

續國譯漢文大成

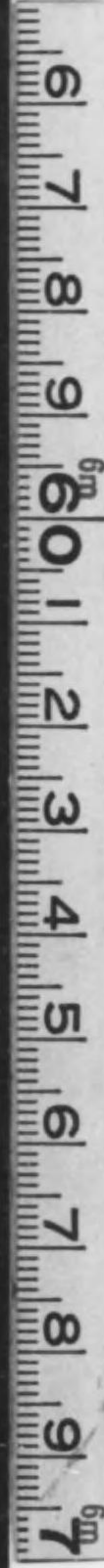
文學部 二十七

309

65

族

入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏 寄贈本

文學部第二十七册(第七帙の三)
韓退之詩集 上の三



韓昌黎集卷三

古詩



河之水二首寄子姪老成

河之水去悠悠

我不如水東流

我有孤姪在海陬

三年不見兮使我生憂

日復日夜復夜

三年不見汝

使我鬢髮未老而先化

河之水二首、子姪老成に寄す

河の水、去つて悠悠

我は水の東流に如かず

我に孤姪あり、海陬に在り

三年見ず、我をして憂を生せしむ

日復た日、夜復た夜

三年汝を見ず

我が鬢髮をして、未だ老いざるに先づ化せしむ

【字解】 一 河之水 黄河。二 水東流 梁の武帝の時に河中之水陶東流とある。三 海陬 海邊の片田舎。四 先化

古詩 河之水二首寄子姪老成

化して白髪となる。

【題義】これは、韓愈が其姪の老成に寄せたのである。老成は、韓愈の兄率府軍佐韓介の子で、姪といふもの、年もさう遠はず、且つ兄弟は皆すでに死し、唯一の肉親である處から、韓愈は之と非常に親密であつた處が、早く死んだから、祭文を作つたので、即ち有名なる祭三十二郎一文である。從來、祭文には押韻するのが普通であるが、この文は、散體を以て之を行ひ、十分に思ふ様を述べて居るので、祭文に於て一新紀元を劃したものと看做されて居る。これより先、韓愈が、汴州なる董晉の幕中に居た時、老成が尋ねて来たが、家族を引き連れて来て同居する積りで、其家に歸つた。すると、間もなく、董晉が死んだ爲に、韓愈は徐州に赴いて、張建封の幕下に身を寄せた處が、老成は、来る來るといつて居て、遂に來るを果さずして病死した。その顛末は、十二郎を祭る文の中に「吾年十九、はじめて京城に來り、その後、四年にして歸つて汝を視、又四年、吾、河陽に往いて墳墓を省し、汝が嫂の喪に從つて來り葬るに遇ふ。又二年、吾、董丞相に汴州に佐たり。汝、來つて吾を省し、止まること一歳、歸つて其孥を取らむことを請ふ。明年、丞相薨じ、吾、汴州を去り、汝來るを果さず。この年、吾、戎に徐州に佐たり、汝を取るものをして始めて行かしたむ。吾、又罷めて來り、汝、又來るを果さず。吾、汝の東に従ふを念ふに、東又客なり、以て久しうすべからず。久遠を圖るには西歸に如くはなし、將に家を成して汝を致さむと欲す。嗚呼、孰れか、汝、遽に吾を去つて歿すと謂はむ

や」といつて居る。すると、韓愈が汴州に居た時、老成は一度尋ねて來たツ切り、相逢ふこともなく、それが即ち永別となつたのである。この詩は、韓愈が徐州に居て、ある年、參贊か何かの爲に上京した時に作つたものである。それから、老成は、何處に居たかといふと、かの祭文の中に「汝と食に江南に就く」といひ、この病（軟脚病、即ち脚氣）は江南の人、常常之あり」といひ、しきりに、江南といつては居るが、その地を點醒せず、はつきり何處とも分らぬ。しかし、今の鎮江、もしくは上海附近だらうといふことである。

【詩意】黄河の水は、悠悠として、東に流れ、末は海に注いで居る。その水に沿うて下つたならば、汝の處へ往けるのであるが、人の幕客たる此身には、それ程の餘暇もなく、つまり、河水に如かざる次第である。わが一人の姪の老成といふものは、海邊の片田舎に居て、三年以來、打絶えて逢はぬから、我をして、日夜愁を生せしめる。かくて、日復た日、夜復た夜と、歲月は頻りに移り行けども、汝と相見る機會もないから、まだ老年といふ程でもないのに、鬢髮が次第に變じて、白くなつて仕舞つた。

河之水悠悠去
我不知水東注

河の水、悠悠として去る、
我、水の東に注ぐを知らず。

古詩 河之水二首寄子姪老成

我有孤姪在海浦。

我に孤姪あり、海浦に在り。

三年不見兮使我心苦。

三年見ず、我が心をして苦ましむ。

采蕨于山。緝魚于淵。

蕨を山に采り、魚を淵に緝す。

我徂京師。不遠其還。

我、京師に徂かば、遠からず其れ還らむ。

【字解】(一) 采蕨于山 詩經に於て蕨南山、言采其蕨とある。(二) 緝魚于淵 詩經に其釣維何、維絲伊緝とある。

【詩意】 黄河の水は、悠悠として東に注ぐが、我は汝を訪ふことが出来ずして、河水にも及ばぬ譯である。わが一人の姪は、海邊に居て、三年の久しき、相逢ふ機會とはなく、その爲に、我が心を痛く苦ましめる。もし一處に居たならば、打連れて、山に蕨を采り、淵に臨んで、ともに釣を垂れ、どんなに楽しいか分からねぬが、遺憾ながら、それが出来ない。われは、今張建封の命を奉じて上京するが、遠からずして歸つて来るから、汝も亦た海邊から徐州まで来て呉れぬか。さうすれば、蕨を采つたり、魚を釣つたりすることも出来るので、相思の餘、取り敢へず、ここに詩を寄せる次第である。

【餘論】 この詩は、詩經三百篇を模擬したので、詩經は、大抵四言であるに對して、此は三言、六言、七言など色々錯綜して、體裁は聊か異なつて居るが、その構想は、全篇彼を踏襲したのである。それから、二首を並觀すると、その大半が互に類似し、韻脚の文字を換へて使つて居る處は、全く詩經の聯作の面影を傳へて居るし、後首の後半が前首と全く句法を異にして居る處も、矢張、詩經に例があるので、全體に於て、何處までも、三百篇の體を傳へるといふことに熱中して作つたのである。劉辰翁が「これ其れ楚語なり」といつたのは、稍や中らぬ様であるが、朱竹垞が「これ國風を學ぶ、却つて、乃ち長短句、蓋し亦た稍や面貌を換へむと欲す」と云つたのは、流石に見るところありと稱すべく、何義門が「二詩、一片の眞氣、詞も亦た古極まる」といつたのも、同じく妥當である。

山石

山石

山石犖确行徑微。山石、犖确として、行徑微なり。

黃昏到寺蝙蝠飛。黃昏、寺に到つて蝙蝠飛ぶ。

昇堂坐階新雨足。堂に昇り、階に坐すれば、新雨足れり。

芭蕉葉大支子肥。芭蕉葉大にして、支子肥えたり。

僧言古壁佛畫好。僧は言ふ、古壁佛畫好しと。

以火來照所見稀。火を以て來り照らせば、見るところ稀なり。

鋪牀拂席置羹飯。牀を鋪き、席を拂うて、羹飯を置く。

古詩山石

【字解】(一) 犖确 かどかどしき貌。(二) 行徑 人の通る小路。(三) 蝙蝠 かうもり、説文に「蝙蝠は服翼」とあり、古今註に「一名仙鼠」とある。(四) 芭蕉 蘇頌の草木疏に「大なるものは二三尺間、重皮相覆り、葉は扇の如く生ず」とある。(五) 支子肥 支子は繩子即ちくちなし、西陽雜俎に「諸花六出の者少し、惟だ梔子花のみ六出、即ち西

疎糲亦足飽我饑。疎糲亦た我が饑を飽かしむるに足れり。
 夜深靜臥百蟲絕。夜は深く、靜に臥すれば、百蟲絶え、
 清月出嶺光入扉。清月嶺を出でて、光、扉に入る。
 天明獨去無道路。天明獨り去れば、道路なし。
 出入高下窮煙霏。出入高下、煙霏を窮む。
 山紅澗碧紛爛漫。山紅澗碧、紛として爛漫たり。
 時見松樾皆十圍。時に松樾を見れば、皆十圍。
 當流赤足蹋澗石。流に當つて、赤足、澗石を蹋む。
 水聲激激風吹衣。水聲、激激として、風、衣を吹く。
 人生如此自可樂。人生、かくの如きは、自ら樂むべし。
 豈必局束爲人鞅。豈に必ずしも局束人の爲に鞅されむや。
 嗟哉吾黨二三子。嗟哉、吾が黨の二三子。
 安得至老不更歸。安んぞ、老に至るまで、更に歸らざるを得む。

城の薔薇花なり」とある。それから、杜甫の句に紅綻雨肥梅とあつて、肥の字は、これに本づき、即ち上の新雨足を承けたのである。【六】疎糲。列子に「食は則ち疎糲」とあり、杜甫の句に百年疎糲腐儒餐とある。糲は、よくつかぬ米、即ち支米。【七】松樾。南都賦に楓樾松樾とあつて、李善の註に「樾は樾と同じ」とある。樾は即ちくぬぎ。【八】赤足。杜甫の詩に、南望青松架短壑、安得赤脚蹠三層水とある。【九】風吹衣。杜甫の句に風吹三客衣、日暮某とある。【一〇】爲人鞅。漢書滄夫傳に「廷論局蹙、轡下の駒に效ふ」とあり、又楚辭に余鞅好三修婚、以鞅鞅とあつて、その註に「鞅の口に在るを讀といふ」とある。又漢書刑法志に「是れ鞅は鞅を以てして、脚突を御する

がごとし」とあつて、顏師古の註に「馬、頭を給するを鞅といふ」とある。爲人鞅とは、人の爲に鞅せらるるといふ意。

【題義】 蔣註には「この詩、河之水の後に編次す、當に是れ徐を去つて洛に即く時に作りしなるべし。蘇子瞻、かつて、客と南溪に遊び、醉後、相與に衣を解き、足を濯ひ、因つて公の此篇を詠じ、その韻に次すこと蘇集に見ゆ」とあるが、韓集の編次は全く出鱈目で、あてには成らず、従つて、この説は誤つて居る。この詩は、韓愈が徐州を去りし後、しばらく洛陽に居た時、貞元十七年七月二十二日、その門人、李景興・侯喜・尉遲汾といふ人人と共に、洛陽の郭外なる温水に遊び、その歸途、洛北の惠林寺に往つた處が、夜遅くなつたから、その儘、留宿したといふので、惠林寺に題名が残つて居た爲に、その時の事實が明かに成つたのである。山石は、例の如く、篇首の二字を取つて題に填したので、格別の意味もない。

【詩意】 かどかどした山石の間に、やつと人の通る一條の細徑があつて、これを辿つて行くと、惠林寺に到着したが、それは蝙蝠が得意に飛び廻る黄昏の頃であつた。そこで、堂に升り、階に坐すれば、新に暑熱を洗ひ去つた雨あがりの時で、秋の初の氣が爽かに、冷いやりとして居た。雨後であるから、芭蕉の葉は大きく伸びひろがり、梔子の花も肥えて、えならぬ香氣を放つて居る。すると、坊主が出て来て、當寺の壁畫は、随分古いもので、佛様が太そう見事に描かれて居るから、是非御覽なさいといつたから、燈火を以て照らして見た處が、薄暗くて、何が何だか、さつぱり分からなかつた。今日は、

一日遊び暮らして、腹も減つたからといふので、牀を鋪き、席を拂つて、羹や飯を持つて来て貰ひ、さて意よ箸をつけて見ると、まづい玄米の飯であつたが、ひもじい時に不味い物なしといふ通り、それでも、飢を飽かすには十分であつた。やがて、夜が更けたから、靜に横に成つた處が、百蟲の響も絶え、清き月が東嶺にさし上り、その光が扉の中へ照らし込んで、まことに澄み切つた氣分がした。それから、夜が明けて、同行者のまだ寢て居る内に、自分ひとり起き出て、山中の景色を眺める積りで歩いて見ると、路もない處に迷ひ入つたが、それにも拘はらず、高い處に出で、低い處に入り、朝靄の挂つて居る間を彼方此方と窮めて廻はつて見た。すると、山の土は赤く、谷川の流は青く、粉として爛漫といふやうに、如何にも善い眺めであつた、山には松だの樺だのが生えて居て、いづれも、十抱程ある老木である。その前には水が流れて居るから、跣足になつて、巖石を踏みしめて、とぼとぼと覺束なくも進み行けば、淺瀬には、水の音が激して聞こえ、風は、颯然として衣を吹き、身にしみる様な寒さを感じた。こんな面白い事は無い、人生かくの如く、始終ここに居れば、實に楽しいことであらうと思ふ位で、世の中に局束し、きびしく繋がれて、人の爲にこき使はれるにも當るまいと、つくづく心に感じた。そこで、歸後、同行の弟子ともに告げて、ならう事なら、君等と共に、老に至るまでも、歸り去らず、この儘、山中の人と成りたいと思ふといつた。

【餘論】 黄震は「山石の詩、最も清峻」といひ、乾隆御批には「以火來照所見種、嶽廟の作、神縱

欲福難爲功と略ぼ同じ。法に於ては、手に隨つて撒脱し、意に於ては、素より滿たざるところの事、即ち隨處自然に流露するなり」といひ、顧嗣立は「七言古詩、整麗に入り易くして、亦た平熟に近し。老杜、はじめて拗體を爲る、杜鵑行の類の如し。公の七言皆この種を祖とす、而して、中間極めて鮮麗の處あり、雕琢を事とせず、更に精采あり、聲あり、色あり、自らはれ大家。元遺山の論詩絶句に云ふ、有情芍藥含春淚、無力微蓋臥晚枝、拈出退之山石句、始知渠是女郎詩、真に篤論なり」とある。有情芍藥の二句は秦少游の詩で、これを韓愈の山石の詩に對照して見ると、同じく綺麗であるけれども、秦少游のは女郎の詩、韓愈は丈夫の作であるといふので、元遺山の宗奉するところも分かる。つまり、韓愈のは、雄壯渾成の中に時たま綺麗な處があるので、これは、一寸眞似の出来ぬ處である。東坡の詩にも、華確何人似退之、意行無路欲從誰、宿雲解駁晨光漏、獨見山紅澗碧時、とあつて、彼は、山紅澗碧が、ひどく氣に入り、始終かういふ詩を作らうと苦心して居たのである。なほ、何義門は破題四句を評して「即目を直書し、工を求むるに意なく、しかも文自ら至り、謝家の模範を一變す、畫家の荆關の如し」といひ、山紅澗碧の四句を評して「すべて是れ雨後の興象、又即ち華確黄昏の二句中、包蘊するところに發端するなり」といつて居る。



天星送楊凝郎中賀正 天星、楊凝郎中の賀正を送る

天星牢落雞喔咿、天星牢落、雞喔咿たり。

僕夫起餐車載脂、僕夫起つて餐し、車載ち脂す。

正當窮冬寒未已、正に窮冬に當つて、寒、未だ已まず。

借問君子行安之、借問す、君子、行いて安くにか之。

會朝元正無不至、會朝元正、至らざるなし。

受命上宰須及期、命を上宰に受け、須らく期に及ぶべし。

侍從近臣有虛位、侍從近臣、虛位あり。

公今此去歸何時、公、今ここを去つて、歸るは何の時。

【字解】(一)牢落、ばらばらとして居る、數が漸く少く見ゆる貌。

(二)喔咿、楚辭に喔咿喈喈とあり、王延壽の賦に喔咿喈喈とあり。

李白の雜子虛に、喔咿喈喈とありとある。(三)車載脂、詩經に載脂とあり。

載脂とあつて、車に油をさす。(四)窮冬、賀正に上京するから、前年の冬、出發するので、即ち貞元十四年十二月である。(五)會朝、會は甲と普通。甲朝は第一の朝といふに同じく、即ち元日の朝會の義。

【題義】この詩は、前詩よりもすつと前、貞元十四年、韓愈が汴州董晉の幕中に居た時、郎中楊凝といふ人が、賀正の爲に上京するのを送つて作つたのである。この時分の節度使は、儼然として諸侯の如く、なかなか其任地を離れて出かけることは無いので、元日以下の式日には、大抵代理を遣ふことに成つて居た。韓愈も、後年徐州に居た時に、張建封の代理として、賀正の爲に上京したことがあつた。それから、楊凝は、唐書に「字は懋功、弘農の人、右司郎中に遷る、宣武の董晉、表して判官となす」とある。

【詩意】夜は明けなむとして、天上の星は、ばらばらと輝き、一番雞が喔咿として、花やかに鳴き立てたので、僕夫は早く起きて、食事を畢り、車に脂をさして、出立の準備も調つて居る。今しも、窮冬十二月、寒さは一ばん烈しい時であるのに、君は、これから何處へ行かれるのか。元旦の會朝は、一年中で最も重い朝廷の御儀式であつて、四方萬國、至らざるなく、この度、上宰の董晉が君を代理として京師に遣はされるのであるから、さつさと出かけて屹度間に合ふ様にせねば成るまい。君は、もとより一個の人才であつて、由來、人才は、一地方の節度使などが勝手に私すべきもので無い。近ごろ、天子侍從の近臣どもの中には缺員があると聞いて居るから、君が上京されると、ひよつと、天子の御目に留まり、その儘、引き止めて任用されるであらうから、この度、ここを去れば、何時歸つて来るか分からぬ様な事に成るかも知れない。

【餘論】結二句は、一步を拓開して、楊凝の爲に祝意を表した次第で、董晉には、あまり聞かせたくは無様な意味である。勿論、韓愈は、董晉に心服して居らず、どうかして早く汴州を去りたいと思つて居た位で、後年、張建封に於けるも、矢張その通り。彼は、無論藩鎮の屬官たるに甘んぜず、天子の直臣となり、そして、滿腹の經綸を展べて、藩鎮を敲き潰さうといふのが、その年來の夙望である。

處から、無意識の中に、時たま、かういふ事を云つたのである。

汴泗交流贈張僕射

汴泗交流、張僕射に贈る

「るが如し。」

汴泗交流郡城角、汴泗交流す郡城の角、
 築場千步平如削、場を築くこと千步、平かなること、削
 短垣三面繚逶迤、短垣三面、繚つて逶迤たり、
 擊鼓騰騰樹赤旗、鼓を撃つこと、騰騰として、赤旗を樹つ。
 新秋朝涼未見日、新秋朝涼しうして、未だ日を見ず、
 公早結束來何爲、公早に結束し、來つて何をか爲す。
 分曹決勝約前定、曹を分つて、勝を決すること約前に定む、
 百馬攢蹄近相映、百馬、蹄を攢めて、近く相映す。
 毬驚杖奮合且離、毬は驚き、杖は奮つて、合し且つ離る、
 紅牛纓紱黃金羈、紅牛の纓紱、黃金の羈。

【字解】(一) 平如削 地ならし
 をして平坦に成つて居るをいふ。
 【二】短垣 丈の低い矢來。
 【三】繚逶迤 めぐつて長く繚く。
 【四】公早 この早は早朝の義。
 【五】分曹 組を
 支度をする。
 【六】約前定 前以て規約
 を定めて置く。
 【七】紅牛纓紱 牛
 の毛で造つて、頭の飾りとしたるもの。
 【八】黃金羈 羈は鞵、おも綱。
 【九】毬驚 毬は手、驚は手、驚が手に
 應じて起るかと思はれる程に、毬が
 飛んで行く。南史曹景崇傳に「むかし、鄉里に在り、快馬に騎して驚の如く、弓弦を拓いて驚の聲を作し、驚

側身轉臂著馬腹

身を側て、臂を轉じて、馬腹に著く、

霹靂應手神珠馳

霹靂、手に應じて、神珠馳す。

超遙散漫兩閒暇

超遙散漫、兩つながら閒暇、

揮霍紛紜爭變化

揮霍紛紜、争うて變化す。

發難得巧意氣轟

發するに難く、得るに巧に、意氣轟なり、

謹聲四合壯士呼

謹聲四に合して、壯士呼ぶ。

此誠習戰非爲劇

これ誠に戰を習はす、劇を爲すに非ず、

豈若安坐行良圖

豈に若かむや、安坐、良圖を行はむには、

當今忠臣不可得

今に當つて、忠臣得べからず、

公馬莫走須殺賊

公の馬、走る莫れ、須らく賊を殺すべし。

【題義】この詩は、貞元十五年、韓愈が徐州なる張建封の幕中に居た時に作つたのである。汴水は徐の西、泗水は徐の南、つまり、徐州は汴泗二水の間に在るところから、これを以て篇に名づけたのである。舊唐書に「張建封、字は本立、兗州の人、貞元四年、徐州の刺史となり、十二年、檢校右僕射を

は驚鳴の叫ぶが如し」とあり、王昌の
 内人羅袖賦に「體似珠」とある。それ
 から、曹植の白馬篇に「仰手接飛猱、
 俯身散三馬蹄」といひ、杜甫の前出塞
 に「走馬脫箠頭、手中接青絲、捷下
 萬仞岡、俯身試一舉、身試一舉、韓愈
 は、此等に本づいて、變化し、もの
 だといはれて居る。【一】超遙
 前方に駆け去る貌を云ふ。【二】
 散漫 今まで整列して居たものが左
 右に推し開く貌。【三】揮霍 一
 生懸命に技能を盡すこと。【四】
 意氣轟 轟は粗と同字、粗豪なるこ
 と。

加へらる。彭城に在ること十年、賢を禮し、士に下る、文人、許孟容・韓愈の如き、皆これが従事となる」とある。この詩は、張建封に贈つて、その打毬に耽けることを諷したので、文集を見ると、諫張僕射撃毬書といふのがある。張僕射は、本來打毬が好きであつた。打毬は、もとより武技を練る爲めであつて、武人として之を好むは、悪いことではないが、あまり凝り過ぎて、遊藝の様に成つては面白くないといふので、この詩の終に此誠習戰非爲劇、豈若安坐行良圖とあつて、かの諫書と同じ意味である。

【詩意】 汗水と泗水とは、郡城の角に於て合流して居る。そこに打毬場を設けて、廣さ千歩に互れる地域を、すつかり地ならしをして、平坦なること、削るが如く、そして丈の低い矢來を三面に繞らしして、すつと長く續き、その内では、どうどうと太鼓を鳴らし、赤い旗を立てて、用意を調へて居る。今しも、新秋の好季節、朝涼しくして、まだ日の出ない時分、張建封に於かれては、早朝から支度をして、親しく此場に臨まれたが、そは何を爲すかといへば、即ち打毬を催すとのことである。そこで、組を分けて、決勝點を設け、前から約束を定め、多くの者どもは、馬に跨り、馬は蹄を擧めて、近く相映じて、そこを駈け廻はつて居る。さて愈よ競技が始まると、取り合はれる爲に、毬は驚いて轉げ廻り、杖を奮つて之を撃たむとし、忽ち合し、忽ち離れ、牛尾の頭飾や、黄金をより込んだおも綱が入り亂れて、旁午しつつかある。競技する者は、いづれも、身を引込め、臂を轉じて、しつかりと馬腹

に身體をつけ、そして、杖を奮つて毬を争ひ、さながら、霹靂が手に應じて起るかと思はれ、珠は精神あるが如く頻りに飛び廻はつて居る。時としては、先方に馳せ向ひ、時としては整列した者が左右に推し開き、しかも、足なみを揃へて、一絲紊れず、餘裕綽綽として、あわてず、駈がず、遣つて居るが、その内に、秘術を盡し、變化を極め、ここを先途と勝負を争つて居る。中にも、上手な者は、一たび毬を受ければ、容易に之を發せず、投げれば、屹度おもふ壺に中るといふので、意氣自ら粗豪であつて、その人が勝を占むれば、四方から譁聲が起り、壯士どもは、我を忘れて大呼する。元來、打毬てふものは、武技を講習する爲に案出したもので、決して、游戲に充つべきものではない。但し、今日の時勢からいへば、なかなか、打毬どころではなく、帷幄の中に安坐して、百戰百勝の良圖を運らさねばならぬことと思ふ。殊に、刻下の世に於て、國難に身を捐てるといふ様な忠臣は、到底求められない位だから、今にも賊が來たといへば、公の馬は逃げ去らずして、進んで之を殺す覺悟を以て、下を引き回して、平生訓練することが必要である。こんな風に、游戲三昧に打毬を遣つて居る様では、いざとなると、皆馬に乗つて逃げ去るに相違なく、この點を篤と考へて頂かねばならぬので、何にせよ、一時の快を得むが爲に、毎日打毬などを遣られるのは、甚だ以て感服せざる次第である。

【餘論】 朱竹垞は、側身轉臂著馬腹の二句を賞し、奇處は、全く身を翻して馬腹に著くるに在り」といひ、何義門は「この詩、用韻變を極めて、しかも整ふ」といひ「風旨、老杜の冬狩行と略ぼ相似

たりといひ、ともに背紫に中つて居る。次に乾隆御批には「神采飛動、結、忠告あり、便ち雉帶箭に比して一格を高うす」とあるが、その雉帶箭は、後に見えて居る。

忽忽

忽忽

忽忽乎余未知生之爲樂也。忽忽として、余、未だ生の樂たることを知らざるなり。

願脱去而無因。

脱し去らむことを願へども而かも因なし。

安得長翮大翼如雲生我身。

安んぞ得む、長翮大翼、雲の如き、我が身に生じ、

身。

乘風振奮出六合絕浮塵。

風に乗じて振奮し、六合を出でて浮塵を絶つことを。

死生哀樂兩相棄。

死生哀樂、兩つながら相棄て、

是非得失付閒人。

是非得失、閒人に付せむ。

【字解】「一」長翮、翮は羽の茎、つまり長い羽といふこと。「二」六合、天地四方を併稱す。

【題義】蔣註に「貞元十五年、董晉薨す。公、汴を去りて張建封に徐州に依る。志を得ずして作る」とある。これも、矢張、局案して人の轡と爲るに忍びぬといふ意を述べて、その不平を遣つたのである。

【詩意】忽忽として、いかにも、詰まらなく、予は、未だ此生の樂たる所以を解し得ない。そこで、この人間を脱し去らうと願つて居るが、因なくして、それも出来ない。この上は、かの垂天の雲の如き長い羽と大きな翼とが我が身に出来て呉れば善いと念じて居るので、さうすれば、風に乗じ、一たび羽ばたきをして奮飛し、見る間に、六合を出て、浮塵を超絶して仕舞ふことが出来る。かくて、死生哀樂などは、いづれも棄て去り、是非得失などは、一切世の閒人に付して、自分は之に與からず、この世界を丸呑にして、自由の生涯を送りたいものである。

【餘論】この詩は、格別面白くもないが、唯だ古色を帯びた處は、さすがに韓退之の手筆たるに負かず、そして、其處に力量が認められるのである。

鳴鴈

鳴鴈

嗷嗷鴻鴈鳴且飛、嗷嗷鴻鴈、鳴いて且つ飛ぶ、

【字解】「一」嗷嗷、詩經に鴻雁

窮秋南去春北歸

窮秋、南に去つて、春、北に歸る。

去寒就暖識所依

寒を去り暖に就いて、依るところを識る、

天長地闊棲息稀

天は長く、地は闊くして、棲息稀なり。

風霜酸苦稻梁微

風霜酸苦にして、稻梁は微なり、

毛羽摧落身不肥

毛羽摧落して、身、肥えず。

徘徊反顧羣侶違

徘徊反顧して、羣侶違ふ、

哀鳴欲下洲渚非

哀鳴下らむと欲するも、洲渚非なり。

江南水闊朝雲多

江南、水闊くして、朝雲多し。

草長沙軟無網羅

草は長く、沙は軟にして、網羅なし。

閒飛靜集鳴相和

閒飛靜集、鳴いて相和す。

違憂懷惠性匪他

憂に違ひ、惠を懷ふ、性、他に匪す。

凌風一舉君謂何

凌風一舉、君、何とか謂ふ。

【題義】蔣註には「これ前詩と同時、公、蓋し、託して以て自ら喩ふるなり」といひ、顧註には「公、

徐州に在り、孟東野に與ふる書に曰ふあり、去年、汴州の亂を脱し、遂に此に來る、主人、余と故あり、余を符離離水の上に居らしむ、秋に及びて、將に辭し去らむとす、云云、と。主人は建封を謂ふ。公、徐に在り、鬱鬱として志を得ず、書と詩とに見ゆるもの此の如し。公、蓋し雁に託して、以て自ら喩ふるなり」とある。

【詩意】嗷嗷と悲しげに飛びながら鳴く雁は、秋の末には南の方に去り、春になれば北に歸る。それは寒を去つて暖に就くので、善く己の依るところを知つて居る。然るに、今、空中を見ると、一羽の雁があつて、天は長く、地は闊けれども、おのが棲むべき處だになく、頻りに飛び迷ひ、そして、風霜の酸苦なるに遭うて、その食ふべき稻梁をも見出さず、毛羽は摧落して、身は瘦せ衰へ、徘徊反顧して、その友達を呼んで居るが、さて友達らしいものは、一向見えない。かくて、哀鳴して空から大地に下らうとしても、身を寄すべき洲渚もない。唯だ江南は、水闊く、朝雲多く、その上、時候も暖であつて、草は長く、沙は軟かで、加之、網羅の憂が無いから、先づ當分そこへ往つて、閒に飛び、靜に集まつて、その友達と共に鳴いて相和して居たらば善からう。すべて、物の性として、憂ふべき處を去つて、惠に懷くのが普通であるから、やがて、風を凌いで、一舉して遠く去るのは、まことに止むを得ぬ次第。自分は、久しく、君の幕下に身を寄せて居たが、どうも満足することが出来ず、よい處があれば、立ち去るかも知れぬが、それは、違憂懷惠の然らしむるところ、さのみ深く、君の咎

めざらむことを懇願するのである。

【餘論】この詩は、何分にも、ここに居ても詰らぬから、その内どこかへ行くかも知れぬといふ心をほのめかしたのである。全篇が柏梁體で、毎句に押韻してある。一寸見ると、前の方は五微で、朝雲多以下は五歌で、韻が換はつて居るかと思ふが、實は、さうでなく、古しへは、五微と五歌とが相通じたので、轉意は之を一韻と看做したのである。但し、之を錯綜して使用すると、或は調子はづれといはれる虞もある處から、わざと五微の方を先に出し、五歌の方を後にしたので、ここらは、特に注意したものである。

龍移

龍移る

天昏地黑蛟龍移。天は昏く、地は黒くして、蛟龍移る。

雷驚電激雄雌隨。雷は驚き、電は激して、雄雌隨ふ。

清泉百丈化爲土。清泉百丈、化して土となる。

魚鼈枯死吁可悲。魚鼈枯死、吁、悲ひべし。

【題義】蔣註に「この詩は、南山の湫を謂ふなり。湫、はじめ平地に在り、一日風雷、移つて山上に

【字解】(一) 雷・電・激 寒田の西都賦に見ゆ。

居る。その下の湫、遂に化して土と爲る。長安の人、今に至つてこれを乾湫といふ。公の炭谷に題する詩に云ふ、厭處平地水、巢居挿天山と、これを指すとある。その湫が龍と共に山上に移つたといふ珍事は、韓退之の時分に有つた事で、それを傳聞して、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】一天俄に振き曇り、大地も黒く、咫尺晦冥、そことも見分かぬ時に當り、雷は驚き、電は激し、世にも恐ろしい聲がして、蛟龍は、雌雄相隨つて、その居をば山上に移して仕舞つた。そこで、今まで龍が住んで居た百丈の清泉は、すつかり土で埋もれ、その中に棲んで居た魚鼈の類は、いづれも乾ばしに成つて死んで仕舞つたので、まことに、氣の毒なことであつた。

【餘論】後半は、城門火を失して、その災、池魚に及ぶといつたやうな事で、何だか、諷意があるらしい。そこで、方世舉は説をなし、これは例の王叔文・韋執誼の一派が敗れた爲に、柳宗元・劉禹錫等、謂はゆる八司馬の貶謫と成つたことを指したのだらうと云つた。無論、さう見た處で差支は無いが、ただ推測であつて、確乎たる證據の有る譯ではない。

雉帶箭

雉帶箭

原頭火燒靜兀兀。原頭、火燒いて、靜、兀兀たり。

【字解】(一) 兀兀 說文に「高くして上平かなるなり」とある。

野雉畏鷹出復沒 野雉、鷹を畏れて、出でて復た沒す。

將軍欲以巧伏人 將軍、巧を以て人を伏せむと欲し、

盤馬彎弓惜不發 馬を盤らし、弓を彎いて、惜んで發せず。

地形漸窄觀者多 地形、漸く窄く、觀るもの多し、

雉驚弓滿勁箭加 雉驚き、弓滿ちて、勁箭加はる。

衝人決起百餘尺 人を衝いて決起す、百餘尺、

紅翎白鏃相傾斜 紅翎白鏃、相傾斜。

將軍仰笑軍吏賀 將軍は仰いで笑ひ、軍吏は賀す、

五色離披馬前墮 五色、離披として、馬前に墮つ。

【題義】これは、韓愈が張建封の幕中に居た時、狩獵に隨行し、その雉を射落す様を實視して作つたので、即ち縣齋有懷の詩に大梁從三相公、彭城赴二僕射、弓箭圍三狐兔、絲竹羅三酒炙、とある其時の事である。

【一】盤馬 馬を乗り廻す。【二】衝起 俄に飛び上る。【三】五色 爾雅に「雉、五彩皆備はつて、雉を成すを盤といふ」とあり、射雉賦に有五色之名聲とある。

で、兀兀然として居る。そこに雉が居るが、鷹を畏れて、頻りに出たり引つ込んだりして居る。その時に、箭を濫發すると、雉は遠くへ飛び去る虞があるが、將軍は、射藝に巧なることを以て人を心服せしめむと欲し、馬を乗り廻し、弓を引いて箭を番へた儘、なかなか放たない。段段追ひ込んで、地形の窄い處へ來ると、左右には、澤山の見物人が片唾を呑んで控へて居る。雉は、もう逃げられないから、多勢の居るのまかまはず、人を衝いて百餘尺も高く飛び上つた。この時遅く、かの時早く、弓は滿を放ち、勁箭が勢こんで飛んだから、見事に的中し、白羽の征矢は、紅の羽と共に、ばらばらと傾斜して下に落ちて來た。その有様を見て、將軍は空を仰いで、からからと笑ひ、軍吏どもは、喝采して之を賀する程もあらせず、箭を帯びた雉は、五色離披として、さつと馬前に墮ちて來た。

【餘論】この詩は、格別諷諭の意味があるのではなく、唯だ狩獵の實況を敘したので、杜甫の哀江頭に輩前才人帶弓箭、白馬嚼嚼黃金勒、翻身向天仰射雲、一箭正墮雙飛翼、といふ其描寫の法を學んだのである。洪容齋は「昌黎雉帶箭の詩、東坡、かつて、大字これを書し、以て妙絶と爲す。予、曹子建の七啓を讀むに、羽獵の美を論じて云ふ、人稠網密、地逼勢脅と。乃ち韓公用意來るところの處を知る」といひ、顧嗣立は「將軍欲以巧伏人、盤馬彎弓惜不發の二句、無限の神情、無限の頓挫、公、蓋し人に示すに運筆作文の法を以てするなり。その全首の波瀾委曲、細微熨貼に至りては、王留耕の謂はゆる寫物の妙、その狀、目前に在るが如し、信に然り、信に然り」といひ、又「句句實境、

寫し來つて絶妙、是れ昌黎極めて得意の詩、亦た正に是れ昌黎の本色」といひ、沈德潛は「李將軍、中らざるを度つて發せず、發すれば必ず弦に應じて倒る。未だ弓を彎かざるの先に審量し、此は已に弓を彎くの條に矜惜す。すべて肯て嚴しく其技を見はさざるなり。詩を作り、文を作る、亦た須らく此意を得べし」といひ、最後に乾隆御批には「篇幅限あり、しかも、盤屈跳盪、生氣遠く出づ、故に是れ神筆」といつて居る。

條山蒼

條山蒼し

條山蒼、河水黃。

條山は蒼、河水は黃なり。

浪波沄沄去、松柏在山岡。

浪波沄沄として去り、松柏は山岡に在り。

【題義】條山は即ち中條山、黃河が西北より來り、華山の北麓を屈曲して、やがて、洛陽の方へ流れる。その屈曲する處の北岸に中條山があつて、その下に蒲津といふ處がある。この詩は、韓愈が蒲津を通つた時に作つたのである。

【詩意】中條山は、蒼蒼として居るし、その下を流れる黃河は、いたく濁つて、その名の通り、眞黃な色をして居る。その黃なるは、波浪沄沄として流れ去るからであるし、その蒼なるは、松柏が山岡

に在つて、茂つて居るからである。

【餘論】はじめ、條山蒼、河水黃、と置いて、後の二句で之を解釋したのである。黃震は「簡淡にして餘興あり」といひ、顧嗣立は「語多からず、却つて古に近し」といつたが、こんな短いものでは、格別の面白い味を包含する譯に行かぬ。曾國藩の説に、この浪波沄沄去といふ句は、世人の俗に従つて、墮落して行く有様を言つたのであるし、松柏在山岡は、君子のみが、何處までも後凋の節を守つて居ることを美したものだとなるが、かういふ解釋は、毎毎の事で、折角ながら、あまり有り難くもない。方世舉の説では、これは、蓋し脱文が有るので、ひよつとすると、その下にまだ數句あつたのが亡びて仕舞つた爲に、こんな變なものに成つたのでは無からうかといつて居るが、これは如何にも尤もである。

贈鄭兵曹

鄭兵曹に贈る

樽酒相逢十載前。

樽酒相逢ふ十載の前、

君爲壯夫我少年。

君は壯夫たり我は少年。

樽酒相逢十載後。

樽酒相逢ふ十載の後、

我爲壯夫君白首。

我は壯夫たり君は白首。

【字解】(一) 周行 詩經にも數ば見え、もと周代習用の語で、役人の行列といふ意。(二) 遠道 いそがしげに駆け廻る。

我材與世不相當。我が材、世と相當らず、

戢鱗委翅無復望。鱗を戢め、翅を委して、復た望むなし。

當今賢俊皆周行。當今、賢俊、皆周行、

君何爲乎亦遑遑。君、何すれぞ、亦た遑遑。

杯行到君莫停手。杯行つて君に到る、手を停むる莫れ。

破除萬事無過酒。萬事を破除する、酒に過ぐるはなし。

【題義】兵曹は、詳しくいへば兵曹參軍事、將軍鎮將の屬官で、その詳は、唐書の百官志に見えて居る。ここには、鄭とあるだけで、その名は分からない。ある説には、鄭通誠で、張建封が武寧に節度たりし時、通誠は副使であり、韓愈は、その軍の從事であつたから、その時であらうといふが、白居易の哀三良の詩に、祠部員外郎鄭通誠とあるを見れば、どうも、さうとは思はれず、要するに、その詳は分からないが、詩で見ると、年は韓愈よりも多く、そして、老後なほ微官に沈淪して居たものと思はれる。

【詩意】かつて十年の前、ともに酒を飲んだ時、君は血氣盛んの壯夫で、我はまだ青二才の少年であつたが、十年の後の今日、ともに酒を飲めば、我は壯夫で、君は白髮の老人となり、十年の間に、すつ

かり變りはてて仕舞つた。顧みれば、我輩の如きは、才あるも、世の風潮に合はざるが故に、魚が鱗を戢めて小さな油に泳ぐが如く、鳥が翅を疊めるが如く、全く世事を度外視して、格別の希望もない。今しも、賢俊の士は、並び進んで、役人の行列に連つて、いづれも、納まつて居るのに、如何なれば、君は仕官もせず、そわそわとして居るか。これも時勢で仕方がないとすれば、もう何も言ふまい。されば、盃が廻はつて君の處に至れば、手を停めず、さつさと早く飲んで返杯をし玉へ、何は冤もあれ、人間の萬事を忘れるのは、酒が第一で、せめて、これでも飲まなければ、とても遣り切れない。【餘論】朱竹垞は「起四句大快、これ韓退之ならず、これ張正言」といひ、又「收、味あり」といつた。張正言は即ち張籍で、起首の處は張籍の樂府の筆致に似て居るといふのである。しかし、この詩は、張籍よりも、むしろ白樂天に近く、當時、元白の詩體が世に流行したから、韓愈は、おれは平生六つかしいことばかり言つて居るが、さういふ詩でも作れないのでは無いぞといふので、特に其調を彈じたものと見え、集中に、數ば其例がある。それから、結二句の如き、今では、あまり人口に膾炙して、格別の妙味もないが、その當時に於ては、まさしく破天荒の名句で、讀者をしてアツと言はせたものに相違ない。

桃源圖

桃源圖

神仙有無何眇芒、
 桃源之說誠荒唐、
 流水盤迴山百轉、
 生綃數幅垂中堂、
 武陵太守好事者、
 題封遠寄南宮下、
 南宮先生忻得之、
 波濤入筆驅文辭、
 文工畫妙各臻極、
 異境恍惚移於斯、
 架巖鑿谷開宮室、
 接屋連牆千萬日、

神仙の有無、何ぞ眇芒、
 桃源の説、誠に荒唐、
 流水盤迴、山百轉、
 生綃數幅、中堂に垂る、
 武陵の太守、好事の者、
 題封遠く寄す南宮の下、
 南宮先生、これを得たるを忻び、
 波濤、筆に入つて文辭を驅る、
 文は工に畫は妙に、各極に臻る、
 異境恍惚として、斯に移る、
 巖に架し、谷を鑿つて、宮室を開き、
 屋を接し、牆を連ぬる千萬日、

【字解】

【一】神仙有無、神仙といふものが實際有るか無いかといふこと。唐註に「淵明、桃源を敘し、初より神仙の説なし。梁安賢、武陵記を爲る、亦た其語を羅述するのみ。淵明云ふ、先世、秦の亂を避く」と。而して、安賢亦た云ふ、兼に秦人の亂を避くるを以て、邑人相率わ、妻孥を攜へて此に隱る。厥後、外に遇せず、何ぞ人世の多く質還するや、と。すなはち知る、漁人の愚ふところは、乃ち其子孫、はじめて山に入るものに非ず、後人深く考へず、因つて謂ふ、秦人晉に至つて猶ほ死せず、遂に以て仙と爲す。故に退之云「云」とある。これは、羅漢の項にも一寸述べて置いたが、念の爲めに更に引抄して置く。【二】荒唐、莊子

羸顛劉蹶了不聞、
 地坼天分非所恤、
 種桃處處惟開花、
 川原近遠蒸紅霞、
 初來猶自念鄉邑、
 歲久此地還成家、
 漁舟之子來何所、
 物色相猜更問語、
 大蛇中斷喪前王、
 羣馬南渡開新主、
 聽終辭絕共悽然、
 自說經今六百年、
 當時萬事皆眼見、

羸顛劉蹶、了に聞かず、
 地は坼け天は分るるも恤む所に非ず、
 桃を種えて、處處に惟だ花を開く、
 川原近遠、紅霞を蒸す、
 はじめ來つて、猶ほ自ら郷邑を念ふ、
 歳久しく、此地還た家を成す、
 漁舟の子、何の所より來る、
 物色相猜して、更に問語す、
 大蛇中斷前王を喪ひ、
 羣馬南渡して新主を開く、
 聽き終つて、辭絶え、共に悽然、
 自ら説く、今に經る六百年、
 當時萬事皆眼に見る、

天下篇の註に「廣大にして城畔なきなり」とあるし、疏には「荒唐は羅漢の別名、鬼籍に擬なし、以て言の無根を況するなり」とある。いづれにしても、根據の分からぬ取り留めもない言葉。【三】生綃、生綃、即ち畫絹。【四】武陵太守、武陵は、唐の世では朗州武陵郡、明以後は湖廣常德府に屬して居た。その太守の姓名は分らない。【五】好事者、漢書の揚雄傳に「好事者、酒肴を數せ、從つて遊學す」とある。【六】南宮先生、南宮は禮部省、南宮先生といへば、禮部郎中某氏であらうが、その姓名は分らない。或は謙意が自ら言ふと解する説もあるが、謙意は禮部に出仕したことが無いから、これは誤である。【七】羸顛劉蹶、秦漢の相繼いで亡びしこと、羸は秦の

不知幾許猶流傳。知らず、幾許か、猶ほ流傳。

爭持酒食來相饋。争うて、酒食を持して、來つて相饋る、

禮數不同樽俎異。禮數同じからず、樽俎異なれり。

月明伴宿玉堂空。月明伴うて宿すれば、玉堂空し、

骨冷魂清無夢寐。骨冷かに、魂清くして、夢寐なし。

夜半金雞啾晰鳴。夜半、金雞、啾晰として鳴く、

火輪飛出客心驚。火輪飛び出でて、客心驚く。

人間有累不可住。人間累あり、住むべからず、

依然離別難爲情。依然、離別、情を爲し難し。

船開棹進一廻顧。船は開き、棹は進んで、一たび廻顧、

萬里蒼蒼煙水暮。萬里蒼蒼、煙水暮る。

世俗寧知僞與眞。世俗、寧ろ知らむや僞と眞と、

至今傳者武陵人。今に至つて傳ふるものは、武陵の人。

註、劉は漢の姓。【一】地城天分

魏晉の亂を指す。【二】紅霞、河圖

に「昆崙山に五色水あり、赤水の氣

上蒸して霞となる」とあり、蜀都賦

に「舒丹氣而爲霞」となる。【三】

物色、後漢書、嚴光傳に「物色を以

て之を訪はしむ」とある、ここで

は、じろじろと見合ふと云ふこと。

【四】大蛇中斷、漢書高帝紀に「夜、

澤中を徑る、前に大蛇あり、道に當

る。乃ち劍を抜いて之を斬る。蛇、

分れて兩となり、道開く。後、人來

つて蛇の所に至る、一老嫗を見る。

曰く、吾が子は白帝の子なり、化し

て蛇と爲つて、道に當る、今、赤帝

の子、これを斬る」とある。【五】

襄陽王、秦の亡びたことを云ふ。

【六】羣鳥南渡、晉書に「元帝即位、

羣鳥の南渡に云ふ、五馬渡江、一馬

化爲龍」とある。五馬は、潯陽、西陽、汝南、南頓、彭城の五王をいひ、潯陽王、竟に帝位に登りしが故に、化して龍と爲るといつたのである。【一】六百年、晉書に「始皇の時、望氣の者云ふ、五百年後、金陵に天子の氣あり、元帝の江を渡るに及び、乃ち五百年、眞人の塵、此に在り」とある。按ずるに、元帝の建武より武帝の太元に至るまで、又すてに六十年、六百といふのは、成數を擧げたのである。【二】禮數、禮儀度數。【三】樽俎、飲食の器具。【四】玉堂、楚辭に「衆貝闕兮玉堂」とあるし、吳郡賦に玉堂對、李善註に「玉堂は仙人の居なり」とある。【五】啾晰、楚辭に「啾晰兮啾晰」とあつて、聲高に歌ふ貌。【六】火輪、太陽。

【題義】これは、桃源の圖に題した詩である。抑も桃源の事は、陶淵明の作つた記文にだけ見えて居るので、試に其文を擧げると「晉の太元中、武陵の人、魚を捕ふるを業とし、溪に縁つて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢ふ。岸を夾むこと數百歩、中に雜樹なく、芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚だ之を異み、復た前行して、その林を窮めむと欲す。林盡きて、水源に一山を得たり。山に小口あり、髣髴として光あるが若し。便ち船を捨てて口より入る、はじめ、極めて狭く、わづかに人を通ず。復た行くこと數十歩、豁然開朗、土地平曠、屋舍優然、良田美池桑竹の屬あり。阡陌交通、雞犬相聞

こえ、その中、往來種作、男女衣著、悉く外人の如く、黃髮垂髫、並に怡然として自ら樂む。漁人を見て、乃ち大に驚き、その従つて來るところを問ひ、具に之に答ふるや、便ち要して家に還り、酒を設け、雞を殺して食を作す。村中の人、この人あるを聞き、咸な來つて問訊す。自ら云ふ、先世、秦

時の亂を避け、妻子邑人を率ゐ、この絶境に來つて、復た出でず、遂に外人に間隔すと。問ふ、今は是れ何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉を論するなし。この人、一一爲に具に聞くとところを言へば、

是れ何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉を論するなし。この人、一一爲に具に聞くとところを言へば、

是れ何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉を論するなし。この人、一一爲に具に聞くとところを言へば、

是れ何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉を論するなし。この人、一一爲に具に聞くとところを言へば、

皆歎惋す。餘人、各復た延いて其家に至り、皆酒食を出す。俾まること數日、辭して去る。この中の
 人、語つて云ふ、外人の爲に道ふに足らざるなりと。すでにいでて其船を得、便ち扶けて路に向ひ、
 處處に之を誌し、郡下に及び、太守に詣つて、説くこと、かくの如し。太守、乃ち人を遣して、さき
 に誌せしところを尋ぬるに、遂に迷うて復た路を得ず。南陽の劉子驥は、高尚の士なり、これを聞き、
 欣然として親ら往かむとせしが、未だ果さざるに、尋いで病んで終り、後、遂に津を問ふものなし
 といふ唯だこれ丈の事に過ぎないので、ひよつとすると、老子の篇末に見え、莊子の胠篋に見えたる
 道家の理想を陶淵明が繼承し、やがて具體的に表出し、詩的想像を以て潤色したものかとも考へら
 れるが、當時、實際かかる傳説が有つたのかも知れない。次に、世人は、この桃源を以て神仙の境と
 なし、その人を以て、秦人が晉の世に至るまで猶ほ未だ死なずに居た様に考へて居るらしいが、東坡
 の云へるが如く、この文中に「先世、秦の亂を避けて此に來る」といへば、斷じて、その子孫である
 し、且つ雞を殺して食を作るなどいふことは、仙家には無いことと思はれるので、いはば、我が邦の
 五個莊、祖谷山などいふ平家の落武者の村里と略ぼ相似たものと考へられる。しかし、韓愈の斯詩な
 ども、聊か世俗の謬を承けて居る様である。なほ一言して置くが、後世にも、かかる話は、いくらも
 あるが、要するに、皆この桃源の記事から出たので、多くは、根據の無いことである。

【詩意】世に神仙が有るとか無いとかいふが、それは渺茫として分からのことであつて、桃源の傳説の

如きも、まことに根據の無いことである。今、この中堂に挂れる圖は、數幅の生絹より成り、川の流
 が盤廻し、山勢の之に隨つて百轉する狀が寫し出してある。こは好事者の稱ある武陵の太守が、實景
 を寫したといふので、ちやんと封を爲し、宛名を書いて、禮部郎中某の處へ送つて寄越した。郎中は、
 これを得て大に喜び、やがて、筆下に波濤を捲くの勢ある文章を作り、その文の工なると、畫の妙な
 るとは、兩兩相得て、各、その極に至り、これに對すれば、この世ならぬ神仙の世界が、恍惚として眼
 前に見える様である。抑も、桃源の人は、この絶境に來て、巖に橋を架し、谷を切り開いて、住宅を
 造り、屋舍牆垣、相連接して、千萬日の久しきに互り、秦漢の滅びしをも聞かず、魏晉の亂、地坼け
 天裂くるが如きも、一向知らねば憂ひもせず、ただ處處に桃を植ゑ、その花の開くときは、川原一帯
 遠近に紅の霞を蒸し出したやうである。その初めて此に來りし時は、故郷を思ひ出したであらうが、
 いつしか住み慣るれば、ここが家だと思ひ、ゆつくり落ち付いて、又立ち去らうともしなかつた。さ
 て、漁人が舟に乗じて、偶然ここに至れば、どこから來たかといつて、じろじろと眺め合つた後に、
 ここに來た次第を尋ね、さまざまの事を問ひしに因つて、漁人は、秦から以後の事を話して聞かせ、
 漢の高祖が大蛇を斬つた祥瑞に因つて秦を亡ぼし、それから、兩漢の後に魏晉となり、五馬江を渡
 るといふ童謡に應じて、晉の元帝が新に江南に即位して、東晉となつたといつた。桃源の人は、これ
 を聞き終つて、やがて、話が濟むと、いづれも、今昔の感に打たれた様であつたが、扱て云ふには、

はじめ、秦の亂を避けて、ここに來りしより、六百年にもなり、當時の事は、すべて眼に見て、詳しく知つては居るが、その中の幾分が人間に流傳して居るか、世の推移變遷も、まことに甚だしいものであるなどといひ、漁人を要して、その家に歸り、争つて、酒食を持つて來て、御馳走をしたが、作法も今とは違つて居るし、飲食の器具も珍らしいものであつた。かくて、月明の夜、さつぱりした家に泊めて呉れたが、さすがに仙境の事であるから、物とはなしに、骨も冷かに、魂も清く、心澄み渡つて、碌碌寝られもせず、うとうとして居る内に、夜半の頃、金雞が聲花やかに鳴き出で、太陽が高くさし上れば、客心驚くばかり。漁夫は、なほ人間に係累ある身の、とても久しく留まつて居ることも出來ぬ處から、やがて辭して立ち去つたが、さすがに別はつらく覺えた。そこで、舟を押し出し、棹を進めて、元と來し方に歸り、試に顧みて望めば、萬里蒼茫として、煙にまがふ水の色も暮れかかり、さしもの仙境、再び尋ねることが出來なかつた。かくの如き次第で、世俗の間に傳はるところの桃源の事は、眞偽の程も分からず、今に至るまで之を傳へるのは、矢張、武陵の人のみある處から、その地の太守は、この圖を作つて、わざわざ寄せて來たのであらう。

【餘論】愈瑒は「公の七言古詩、すこしく對句を用ふ、この篇諸對、亦た甚だ奇偉」といひ、乾隆御批には「一起一結、善く地步を占む」とある。これより先、王維に桃源行といふ七古があつて、初唐の格を以て之を行ひ、屬對を多くして、巧妙に敘寫し、非常に名高い詩である。韓愈は、それを粉本

とし、同一の筆法を以て寫し出し、詳略各異に、互に表裏を成す様にして、この詩を作り、たとひ比較されても、決して、ひけを取らぬといふ抱負を見せつけるといふ考であつたことは、もとより言ふまでもない。そこで、念の爲に、王維の詩を次に擧げることにする。

漁舟逐水愛山春。兩岸桃花夾去津。坐看紅樹不知遠。行盡青溪不見人。山口潛行始隈隩。山開曠望旋平陸。遙見一處攢雲樹。近入千家散花竹。樵客初傳漢姓名。居人未改秦衣服。居人共住武陵源。還從物外起田園。月明松下房櫺靜。日出雲中雞犬喧。驚聞俗客爭來集。競引還家問都邑。平明闔巷掃花開。薄暮漁樵乘水入。初因避地去人間。及至成仙遂不還。峽裏誰知有人事。世中遙望空雲山。不疑靈境難聞見。虛心未盡思鄉縣。出洞無論隔山水。辭家終擬長游衍。自謂經過舊不迷。安知峰壑今來變。當時只記入山深。青溪幾曲到雲林。春來遍是桃花水。不辨仙源何處尋。

韓愈の作の起結照應して、均しく晝に係ることは之を除き、王維は、桃花源記の本文通りに、漁人が尋ね入つたことに筆を起したが、韓愈は、桃源の人の方に力を盡し、漁舟之子來何所の一句で、初めて題に入り、そして、兩者の間答せる一段は、極めて面白い。次に漁人留宿の事は、二詩ともに略ぼ同じである。その次に、王維は、相變らず漁人の事を述べ、歸後再び尋ねたが見付からなかつたといふので、かなり長く書き立てたが、韓愈は、極めて簡單に済ませ、王維が當時只記入山深の四句を費し

て居る處を、萬里蒼蒼煙水暮といつて、唯だ一句で片付けて居る。すべて、かういふ風に、詳略出入、各異なるが故に、並存を妨げないので、古題を詠するものには、毎毎、その巧妙手段が必要である。後には、王安石が王維と同じく桃源行を作つて居るが、即ち左の通り、望夷宮中鹿爲馬。秦人半死長城下。避世不獨南山翁。亦有桃源種桃者。一來種桃不記春。采花食實枝爲薪。兒孫生長與世隔。知有父子無君臣。漁郎放舟迷遠近。花間忽見驚相問。世上空知古有秦。山中豈料今爲晉。閑道長安吹戰塵。東風回首亦沾巾。重華一去寧復得。天下紛紛經幾秦。

これは、又作法を異にし、中間に桃源漁郎の事、各一解宛で述べ、そして、前後には、史實を述べて、無限の感慨を寓し、王韓二家の外に立つて、拔戟亦た一隊を爲すの概がある。

東方半明

東方半ば明かなり

東方半明大星没

東方半ば明かにして大星没し、

獨有太白配殘月

獨り太白の殘月に配するあり。

嗟爾殘月勿相疑

嗟、爾殘月、相疑ふ勿れ。

【字解】(一) 半明 暮之類は未明の方が善いといつたが、必ずしもさうでは無いと思はれる。(二) 太白 長庚星で、西方の星なるが故に、月に配すと云つたので、又太白は大星を主とし、その餘を上公となすが

同光共影須臾期

光を同じうし、影を共にして須臾を期す。

殘月暉暉

殘月暉暉、

太白睽睽

太白睽睽、

雞三號更五點

雞三號、更五點。

故に、餘に意を用ひて之を點出したのである。(三) 暉暉 太玄經に明暉、中天獨耀也とあつて、その光輝の殊に明かなるをいふ。(四) 雞三號 史記に「雞三號、卒に明かなり」とあり、杜甫の句に「初曉度必三」とある。(五) 更五點 通典に「一夜を五更に分つは、五更更易を以て名となすなり」といひ、爾之類は「五更は甲乙丙丁戊を謂ふなり。點とは、下漏滴水を以て名となす、一更ごとに又分つて五點となすなり」とある。

【題義】韓醇は「この詩、煌煌東方星と典寄頗る同じ。蓋し順宗即位、政を親らする能はずして、憲宗東宮に在るの時を指すなり」といひ、蔣之類は之を承けて「然れども、煌煌東方星は、詞義尙は影響に屬す。而して、この詩、嗟爾殘月勿相疑の一句を觀れば、公、託意なきに非ざるに似たる者なるを知る。但し、舊註碎雜にして存すべからず」といつた。なほ某氏は、一一これを當時の史實に引きあてて「時に賈耽・鄭珣瑜の二相、皆天下の重望、王叔文、事を用ふるや、相繼いで引いて去る。この詩、東方半明大星没に喩ふる所以なり。章執誼、叔文に汲引せらる、この詩、獨有太白配殘月に喩ふる所以なり。順宗、すでに機政を厭ひ、執誼、叔文、尙ほ私意を以て、更なる相猜忌す、この詩、嗟爾殘月勿相疑、同光共影須臾期ある所以なり。憲宗立つて、叔文竄せらるるに及びて、猶ほ東方明

かにして残月太白滅するがごとし、この詩、残月暉暉、太白暉暉、雞三號、更五點に喩ふる所以なり、意微にして願、まことに詩人の旨を得たり」といつた。要するに、この詩は、順宗が位を禪られる少し前、王叔文と韋執誼とが確執を生じ、小人同士軋軋して居るのを見て作つたので、そんな真似をして居ては、とても長持ちする筈もなく、やがて共倒れをする外はあるまいといふので、太白とか、残月とかいふものに比して、構想したのである。

【詩意】今の世は、さながら東方の將に明かならむとする時で、天上に燦爛たる大星が大抵隠れて見えなくなつたといふ様な按排、従前衆望ありし諸宰相は、みんな辭職して、廟堂には居ない。そして、曉の明星たる太白が残月に配し、兩兩相對して、弱弱しい光を放つて居る。その太白と残月とが、今しも、軋軋するといふが、そんな事をして居るべき場合ではない。しばらくの間、光を同じうし、影を共にし、互に志を合せたならば兎に角、さうしない限りは、どうして、長持ちが出来やうか。残月は暉暉、太白は暉暉、互に負けぬ氣に成つて光つて居る。兎角する内に、雞が三聲高く鳴いて、五更の鐘が一たび響けば、忽ち夜が明け離れて、暉暉も、暉暉も、有つたものではなく、すべての物は、消滅して仕舞ふではないか。

【餘論】暉暉、暉暉の字は、巧に點出したので、その光り合つて居る有様が、目に見える様である。樊汝霖は、「公の憶昨行に謂はゆる任文未、捕崖州熾、雖得三教宥、常愁猜、近者三奸悉破碎、羽穴無底

幽黃龍、義、この詩と同じ。惟だ此詩に東方半明といふのは、その詞を微にする所以、かくの如し、蓋し風人の物に託するなり」といひ、朱竹垞は「枯淡の若しと雖も、然れども、含味却つて濃腴、氣格極めて練」といひ「只だ此の如く收め、更に意を點出せず、最も妙」といつて居る。

贈唐衢

唐衢に贈る

虎有爪兮牛有角、虎には爪あり、牛には角あり。
虎可搏兮牛可觸、虎は搏つべく、牛は觸るべし。
奈何君獨抱奇材、奈何せむ、君、獨り奇材を抱き、
手把鋤犁餓空谷、手に鋤犁を把つて空谷に餓うるを。
當今天子急賢良、當今、天子、賢良に急、
匭函朝出開明光、匭函、朝に出でて明光を開く。
胡不上書自薦達、胡ぞ上書して自ら薦達し、
坐令四海如虞唐、坐して四海をして虞唐の如くならしめざる。

【字解】(一) 匭函、舊唐書の武后紀に「垂拱二年、命じて匭を朝堂に置き、書を進め、事を言ふものあらば、之を投ずるを聽るす」とある。目安箱、投書箱。(二) 明光、殿の名、三藏記に「未央宮漸臺の西に柱宮あり、中に明光殿あり」と見ゆ。(三) 虞唐、即ち堯舜、堯は唐に居り、舜は虞に對せられしが故に云ふ。

【題義】唐衢は、韓門に遊んだ人で、左程詩文に達して居たことは聞かぬが、世に善哭を以て稱せられ、そして、舊唐書に於ては、韓愈の傳の後に附載してあつたが、新唐書では、削つて仕舞つた。舊唐書には「衢、進士に應せしが、久しうして第せず、能く歌詩を爲り、意、感發多く、人の文章を見て、傷嘆するところあらば、讀み訖りて、必ず哭し、涕泗已む能はず、人と言論する毎に、すでに別れ、聲を發して一號す。音辭哀切、聞くもの、泣下らざるなし、故に世に唐衢善哭と稱す。左拾遺白居易、これに詩を贈る、略に云ふ、賈誼哭三時事、阮籍哭三路歧、唐生今亦哭、異代同其悲」とある。この詩は、韓愈が唐衢に贈つたので、その自ら薦達せむことを勸めたのである。

【詩意】虎には、鋭い爪があつて、他の獸を搏つべく、牛には、丈夫な角があつて、その敵に觸れて、突き殺すことが出来る。これと同じく、人にして才あるものは、時の用に立つべきものである。然るに君は、如何なれば、奇才を抱いて、しかも、時に用ひられず、手に鋤鎌を把り、躬ら耕して、空谷の中に飢ゑて居るのであるか。今しも、天子は、賢良の士を求められるに急にして、朝堂には、區兩を設け、且つ明光殿を開いて、大に天下の士を召見せられる位であるから、君も上書して、自ら推薦し、やがて要職に登り、天子を輔佐して、堯舜の世の如き至治を成さしめたならば善いので、何も引込んで、快快として自ら稱悔するには及ばない。

【餘論】慰藉に至らざるなく、且つ其奮起を望んだので、一應尤もな言ひ草であるが、詩としては、淺俗に近きを免れぬものである。

貞女峽

貞女峽

江盤峽束春湍豪。江は盤り、峽は束ねて、春湍豪なり。

雷風戰鬪魚龍逃。雷風戰鬪して、魚龍逃る。

懸流轟轟射水府。懸流轟轟として水府を射る。

一瀉百里翻雲濤。一瀉百里、雲濤を翻す。

漂船擺石萬瓦裂。船を漂はし、石を擺いて、萬瓦裂く。

咫尺性命輕鴻毛。咫尺性命、鴻毛よりも輕し。

【字解】(一) 峽東。杜甫の詩に峽東滄江起とある。峽間が俄に狭くなつて、迫まつて居る。(二) 春湍。春、水が増して、勢更に凄まじくなる早瀬。(三) 水府。龍宮、海賦に、爾其水府之内、極深之處とある。(四) 擺石。擺は推し開く。(五) 輕鴻毛。漢書司馬遷傳に「或は鴻毛よりも輕し」とある。

【題義】この詩は、貞元十九年の冬、韓愈が陽山に左遷される途中の作である。王韶の始興記に「桂陽の貞女峽、傳へて曰く、秦の世、數女あり、螺を此に取り、風雨に遇ふや、一女忽ち化して石人となる、今形七尺、狀女子の如し」とある。

【詩意】江水は盤曲し、峽勢は愈よ覺まつて狭く、折しも春で、水嵩が増して居るから、流の瀬は更

に早く、その勢は、風雷の空中に戦ふが如く、その響の凄まじきに驚いて、魚龍なども居たたまらずに、逃げ出すといふ位。向ふを見ると、數十丈の断崖から、懸流が轟轟として直下し、水底の龍宮まで射透すかと疑はれ、一瀉百里、雲濤を翻すといふ様な挨拶。そこを船で下るのであるから、大抵の舟は、顛覆して漂はされ、石でさへも、波の爲に押し開かれ、さながら、萬瓦の裂ける様に、すべての物は粉碎されて仕舞ふ。ここに至れば、わが生命の軽きことは、さながら鴻毛の如く、まことに、危いことである。

【餘論】 僅僅六句であるが、峽流の奇險は、眼前に見るが如く、人をして、覺えず戰慄せしめる。朱竹垞は「起、長吉に似たり」といつて、殊に其破題の筆致を激賞して居る。

贈侯喜

侯喜に贈る

吾黨侯生字叔起

吾が黨の侯生、字は叔起。

呼我持竿釣温水

我を呼び、竿を持して、温水に釣る。

平明鞭馬出都門

平明、馬に鞭つて、都門を出で、

盡日行行荆棘裏

盡日行行荆棘の裏。

【字解】 (一) 温水 即ち洛水、河南縣北に在る。易の乾鑿度に「王者、養德の應あれば、洛水先づ温かなり、故に温洛と號す」とある。

温水微茫絶又流

温水微茫、絶えて又流る。

深如車轍闊容輞

深きは車轍の如く、闊きは輞を容る。

蝦蟇跳過雀兒浴

蝦蟇跳り過ぎて、雀兒浴す。

此縱有魚何足求

ここに縱ひ魚あるも、何ぞ求むるに足らむ。

我爲侯生不能已

我、侯生の爲に已む能はず、

盤針擘粒投泥滓

針を盤げ、粒を擘いて、泥滓に投ず。

晡時堅坐到黃昏

晡時、堅坐して、黃昏に到る。

手倦目勞方一起

手倦み、目勞して、方に一たび起つ。

暫動還休未可期

暫く動いて還た休み、未だ期すべからず。

蝦行蛭渡似皆疑

蝦は行き、蛭は渡るも、皆疑ふに似たり。

舉竿引線忽有得

竿を舉げ、線を引いて、忽ち得るあり。

一寸纜分鱗與鬚

一寸纜に分かる、鱗と鬚と。

是日侯生與韓子

この日、侯生と韓子と、

【三】 鱗鬚 鱗は魚の鱗。

良久歎息相看悲。良に久しうして歎息し、相見て悲む。

我今行事盡如此。我、今、行事盡く此の如し。

此事正好爲吾規。この事、正に好し、吾が規と爲さむ。

半世遑遑就舉選。半世遑遑、舉選に就く。

一名始得紅顏衰。一名はじめて得て、紅顏衰ふ。

人間事勢豈不見。人間の事勢、豈に見ざらむや。

徒自辛苦終何爲。徒に自ら辛苦して終に何すれぞ。

便當提攜妻與子。便ち當に妻と子とを提攜し、

南入箕潁無還時。南、箕潁に入つて、還る時なかるべし。

叔起君今氣方銳。叔起、君、今、氣方に銳。

我言至切君勿嗤。我が言、至つて切、君嗤ふ勿れ。

君欲釣魚須遠去。君、魚を釣らむと欲せば、須らく遠く去るべし。

大魚豈肯居沮洳。大魚、豈に肯て沮洳に居らむや。

【三】箕潁 莊子に「許由、箕山に過れ、耳を潁水の下に洗ふ」とあり、高士傳に「許由、字は武仲、堯舜、天下を以て由に讓らむと欲す、乃ち遁つて、中嶽、潁水の關、箕山の下に耕す」とある。

【題義】 侯喜は、韓門に在つて、あまり藝の出来なかつた人と思へて、その作も、残つて居ない位。しかし、韓愈は、之を棄てずして、精精引き立てて遣つたものと見える。韓愈の洛陽に居た時、侯喜の催しで、一緒に洛北の温水に釣に出かけたことがあつて、この詩は、その時の作である。そして、その歸途、惠林寺に立ち寄つて、山石の詩を作つたので、その折の題名に「韓愈・李景興・侯喜・尉遲汾、貞元十七年七月二十二日、魚于温洛、宿此而歸」とあつて、それが長く残つて居た爲に、後人に考據の材料を提供した。ところが、この日は、一向魚が釣れなかつたから、そこに趣向を設けて、戯に侯喜に對して、不平を言ふやな意味で作つたのである。

【詩意】 吾が黨の侯生は、字は叔起といひ、その男の發起で、一日竿を擔いで、温水に釣をしやうといふことに成つた。そこで、朝早く、馬に鞭つて都門を出たが、その路は、荆棘の間に通じて居る爲に、なかなか暇どり、ざつと一日かかつて仕舞つた。さて愈よ温水に到着して見ると、兼ねて聞いて居たとは甚だ異に、唯だ微茫として、碌碌水もなく、絶えては又流れるといふ有様、その深さは、車の轍が土中へ減入り込んだ位しかないし、その闊さは、車の心棒がやつと通るかと思ふ位。それは蝦蟇でも飛び越せるし、雀が来て水を浴びるに丁度善い。こんな處に、たとひ魚が居つたにしても、求むるに足るやうなものは居ないことに決まつて居る、しかし、侯生に誘はれて、折角ここに來た上は、釣が目的であるから、その儘、歸る譯にも行かず、やがて釣道具を取り出し、針を曲げ、飯粒を

勢いて、それを泥水の中に投げ込んだ。河に著いたのが、すでに七ツ下りであつて、それから、釣を垂れ、じつと其處に坐つて、黄昏までも居たけれども、一向魚が餌を食ふ様子もなく、竿を持つ手もだるくなり、見詰めて居る目も疲れ、しやがみくたびれたから、はじめ、一たび身を起した。小さな蝦か蛭が糸に觸れても、魚の様に思はれるが、一寸糸が動いたかと思ふと、又止まつて仕舞つて、一向釣れさうなあてもない、彼此する内に、すこしく手ごたへがする程動いたから、占めたといふので、竿を擧げて糸を引くと、果して一尾の魚が掛つて居た。さて、どんな魚かを見ると、わづか一寸位、よく見なければ鱗も鱗も分からぬ様な小さな魚であつた。かくて、侯生と韓子とは、あまり釣れぬ處から、稍や久しうして嘆息し、相見て悲んだ。何となれば、我輩平生の行事は、丁度、今日の事と同じく、小さな事にのみ、齷齪して居るからで、今日、これだけ辛抱しても、その結果の一向詰まらぬは、平生の行事に對して、まことに善き規箴となる譯である。我輩は、半生の間、遑遑として試験に憂き身を嘗し、やつとの事で、一たび及第を得るに至れば、最早、年が寄つて仕舞つて、紅顔も、いつしか衰へた。人間の事勢は、大抵これで分かつて居るので、徒に自ら辛苦したとて、何の得るところもなく、丁度、今日の釣魚と同じである。されば、妻子を提携して、南の方、箕山頽水の間に入つて、再び世間に出まいと思つて居る。しかし、叔迄の如きは、今しも年少氣鋭であるから、決して、世の中を棄てるにも及ばぬが、我が言の痛切なるを聞いて、笑はずに居て呉れる。元來、魚を

釣らうとするには、こんな狭い川では、到底駄目なので、大きな魚は、決して、水溜りの様な處には住んで居らぬから、少くとも、江海に臨んで釣を垂れる外はない。何は兎もあれ、世の中で仕事をするには、遠大の計畫を爲すことが、第一に必要なである。

【餘論】 蔣註に「蘇東坡の記に、僮耳、上元、杖を放つて笑ふ。過問ふ、何をか笑ふ、曰く、自ら笑ふなり、然れども、亦た韓退之、魚を釣らむとして、得るところなく、更に遠く去らむと欲するを笑ふ。知らず、海に走るもの、未だ必ずしも大魚を得ざるなりと。蓋し、公、この詩を作る時、年三十四、徐を去り、洛に居り、方に求官來東洛の語あり、而して、東坡は晩歲、僮耳にして、憂患の餘に發す、覽者、以て異となす無かれ」とある。この詩は、全篇が平易で、釣を垂れる一段などは、事こまかに敘述してあるが、品致未だ高からず、その言つて居ることも、瑣細に過ぎる。されば、顧嗣立は「淺事淺敘、只だ語太だ繁なるを嫌ふのみ」といつて居る。

古意

古意

太華峰頭玉井蓮、太華峰頭、玉井の蓮、
開花十丈藕如船、花を開く十丈、藕、船の如し。

古詩古

意

【字解】 (一) 太華、山海經に、華山、一名太華」とある。(二) 玉井、蓮華山記に「山頂に池あり、千葉の蓮を生じ、これを服すれば羽化す」と

冷比雪霜甘比蜜。冷は霜雪に比し、甘は蜜に比す、

一片入口沈痾痊。一片、口に入つて沈痾痊ゆ。

我欲求之不憚遠。我、これを求めむと欲して、遠きを憚ら

青壁無路難資緣。青壁路なく、資緣し難し。

安得長梯上摘實。安んぞ長梯を得て、上つて實を摘み、

下種七澤根株連。下、七澤に種ゑて根株連るを。

【題義】朱子の説に「この詩、古意を以て篇に名づく、登山紀事の詩に非ざるなり、舊註、國史補華

山に登る事、及び沈顔の登華旨略を援引す、聚訟紛紛、殊に謂はれなきに屬す、今悉く刪り去る」といつた通り、何か寓意があるらしいが、今に成つては、本當の事が、よくは分からぬ。韓愈は、華山に登つたことがあつて、その時の作だらうといふ人もあるが、どうも、さうでも無いらしい。唯だ

方世舉の編年本に據ると、憲宗の末年、神仙の道に感溺して、藥草を求められたことなどがあつたら、それを諷したものだらうといふので、或は、さうかも知れぬ。が、憾むらくは、確證がない。

【詩意】華山の絶頂なる玉井といふ池には、千葉の蓮があつて、花を開けば、その大さ十丈に互り、さながら、船と見まがふばかり。この花は、仙藥に成るので、冷たきことは霜雪の如く、甘きことは蜜の如く、唯だ一片を口に入れば、平生の持病も、忽ち直る。我は之を求めむと欲し、遠路を憚らずして、態態出かけて見たが、何分にも、青壁千尋屹立し、到底、攀ち登ることが出来ない。いかで長梯を用意して、之を摘み來り、根株相連る様に、楚の七澤の中に植ゑ込んで、遍ねく天下の人を救ひたいと思ふばかり、遺憾ながら、それも出来ない相談である。

【餘論】世間に云ふ神仙の道は、太華峰頭、玉井の蓮の如きもので、到底、求め得られるものではなく、長生不死も、虚談に過ぎぬ。もし、本當に神仙の道が得られるならば、天下の人を化して盡く、長生不死にすれば、それで善いといふのが、この詩の諷諭の本旨らしいと見える。或は又、この詩を以て、世人が榮に趨り、位を貪り、懸崖を渉るが如き險を顧みず、やがて顛危踏蹶して、はじめ、後悔することを諷したものと爲す説もある。朱竹垞は「すべて、只だ譏事諷語を以て結構す」といひ、まことに的確な評語である。

八月十五夜贈張功曹

纖雲四卷天無河。纖雲、四に巻いて、天に河なし。
 清風吹空月舒波。清風、空を吹いて、月は波を舒ぶ。
 沙平水息聲影絕。沙は平かに、水は息んで、聲影絶ゆ、
 一杯相屬君當歌。一杯相屬す、君、當に歌ふべし。
 君歌聲酸辭且苦。君が歌、聲酸にして、辭且た苦なり、
 不能聽終淚如雨。聽き終る能はずして、涙、雨の如し。
 洞庭連天九疑高。洞庭、天に連つて、九疑高し、
 蛟龍出沒猩鼯號。蛟龍出沒、猩鼯號ぶ。
 十生九死到官所。十生九死、官所に到る、
 幽居默默如藏逃。幽居默默として、藏逃するが如し。
 下牀畏蛇食畏藥。牀を下れば蛇を畏れ、食には藥を畏る、
 海氣濕蟄熏腥臊。海氣濕蟄、熏して腥臊。

【字解】(一) 天無河 銀河さへ見えない。(二) 相屬 漢書灌夫傳に「夫、田蚡を迎へて饗宴を過ぐ。酒を飲んで、醉なるに及びて、夫、絶つて舞うて、蚡に屬す」とあつて、顏師古の註に「屬は付なり、猶ほ今の舞訖つて相勸むるがごときなり」とある、さしつける。(三) 淚如雨 詩經に「涕零如雨」とあり、李白の詩に「獨宿空房淚如雨」とある。(四) 洞庭、九疑 前に見ゆ。(五) 蛟龍 爾雅異に「蛟は、人面豕身、言語を能くす。鱗は狀、小狐の如く、翼あり、大率風翼の如し」とある。環は環、鱗はむささび。(六) 官所 唐註に「張署、公と同じく御史より、事を言ふを以て擢けられ、張は郴州臨武令となる」とある。(七) 藏逃

昨者州前擗大鼓。昨は、州前、大鼓を擗ち、
 嗣皇繼聖登夔臯。嗣皇、聖を繼いで、夔臯を登ぐ。
 赦書一日行萬里。赦書、一日、萬里を行き、
 罪從大辟皆除死。罪、大辟に從ふも、皆死を除く。
 遷者追廻流者還。遷者は追廻し、流者は還る、
 滌瑕蕩垢朝清班。瑕を滌ぎ、垢を蕩して、朝に班を清くす。
 州家申名使家抑。州家は名を申べ、使家は抑ふ、
 坎軻秬得移荆蠻。坎軻、秬だ荆蠻に移るを得たり。
 判司卑官不堪說。判司は卑官、説くに堪へず、
 未免捶楚塵埃間。未だ捶楚を免れず、塵埃の間。
 同時輩流多上道。同時の輩流、多く道に上る、
 天路幽險難追攀。天路幽險にして、追攀し難し。
 君歌且休聽我歌。君の歌、しばらく休めて、我が歌を聽け、

古詩 八月十五夜贈張功曹

かくれ逃げる。(八) 長樂 樂は毒藥。(九) 嗣皇繼聖 貞元二十一年正月、順宗即位せしを云ふ。【一〇】 登臯臯 臯と臯陶、ともに堯舜の時の名臣、この二人にも比すべき賢良を登用する。【一一】 赦書 同年二月甲子、天下に大赦せしことをいふ。【一二】 大辟 死刑。【一三】 追廻 即ち量移。【一四】 朝清班 朝廷に於ては班列を清うする、即ち姦邪を驅け忠良を進むること。【一五】 州家 地方官。【一六】 使家 湖南觀察使を指す。【一七】 坎軻 不遇の意。【一八】 判司 功曹參軍をいふ。【一九】 未免 杜甫の送高書記詩に、脱身傳尉中、始與捶楚二辭とあり、杜牧の詩に參軍與滯尉、塵土靈三勳勳、一語不中治、鞭笞身滿瘡とある。唐註に「唐制、參軍參尉、過あれば、

我歌今與君殊科。我歌、今、君と科を殊にす。

一年明月今宵多。一年、明月今宵多し。

人生由命非由他。人生命に由る、他に由るに非ず。

有酒不飲奈明何。酒あり、飲まずむば、明を奈何。

即ち管杖の刑を受くことある。【110】
天路 都に歸る路。

【題義】この詩は、貞元二十一年八月十五夜に當つて、張功曹に贈つたのである。張功曹、名は署。

これから先、韓愈は、陽山に貶謫せられ、張署も同じ地方の郴州臨武に流されて、韓愈と同役であつた。ところが、憲宗即位、天下の罪人を大赦するといふので、二人ともに赦免を蒙り、江陵に量移されることになり、そして、韓愈は命を郴州に俟つて居ることになり、そこで張署に遇つたものと見える。韓愈が江陵に居た時、祭三郴州李使君一文といふのを作つて、その中に、輟三行道於俄頃、見三秋月之三鼓、速三天書之下降、猶低徊以宿留、とあるから、この時、郴州に居たことは、顯著なる事實である。張署の事は、韓愈の作れる墓志に「署は河間の人、進士に擧げられ、監察御史に拜せらる。幸臣に讒せられ、同輩韓愈・李方叔と、三人ともに南方に縣令となり、二年、恩に逢うて、ともに徙つて江陵に據たり、半歲、篋管奏して判官となす」とある。兩人とも、全く同じ閱歷を持つて居る處が、一段の因縁だといふので、この詩は純ら構想を此に著けたのである。

【詩意】宵の内は、ちらちらと細い雲があつたが、やがて四方に巻き散らされて、跡方もなく、空は澄み切つて、天の河さへ見えぬ位。清風瑟瑟として空を吹き、月は水面より登つて、その光は、波の上に舒びて居る。平沙渺渺として、水の動くのが見え、さながら、息んで居るらしく、聲もなく、影もなく、あたりは、ひっそりとして居る。この時しも、君と我と相對坐し、杯を君にさして、心に思つて居ることを遠慮なく歌ひ出されよといつた。そこで、君は歌ひ出したが、その歌は、極めて酸楚、その言辭は極めて悽苦、我輩は、これを終まで聞くことが出来ずして、涙は雨と降るやうであつた。さて君の歌はといふと——さきに南方に貶謫された時、長長しい旅をしたが、洞庭の湖水は天に連り、九疑の山は高く聳え、水には、恐ろしい蛟龍が出没し、山には、猩猩だの、むささびなどが悲しい聲を出して哀號して居る。普通の者ならば、十人の中、九人までは死ぬといふ困難を経て、やつと郴州の臨武に到着したが、もとより、僻地である處から、黙黙として逃げ藏れて居る様な工合、人に顔をも合はさなかつた。その上、この邊は、南方瘴癘の區であるから、寢床の下には蛇の潜んで居ることがあり、食物の中には毒が入れてあるといふ様なこともあつて、始終用心をせねばならぬ。おまけに、海氣は、濕うて、腥い様な氣を蒸し出し、如何にも、堪へられない。昨日、州前に於て、太鼓を搥つ聲がしたが、聞けば、先帝が崩御になつて、太子は新に即位せられ、そして、古しへの夔・皋陶に比すべき忠良の大臣輩は登用せられて、萬事革新といふことになり、やがて、天下に大赦し、

その赦書は、一日に萬里を馳せて、殘る隈なく觸れ廻り、死罪に該當するものまでが首を繋かれ、左遷されたものは善地に量移せられ、流されたものも召し還されるといふ次第。かくて、先帝の末世に於て、瑕と稱し垢と稱せられた様な悪政は、悉く洗ひ去られ、そして奸邪の臣を除いて、朝廷の班列を盡く清められたのは、まことに有り難いことである。そこで、我我どもも、御赦免に漏れぬ様にといいので、折角地方官から名を書いて上申した處が、上役に睨まれたものと見え、觀察使の手許で差押へられ、本來ならば、都に召し還される處を、やつとの事で、やや善地と稱せられる荆蠻に量移されることになつた。但し、功曹參軍といへば、觀察使の一屬官で、もとより御話にも成らぬ様な卑職であつて、たまに過失でもあると、上役に鞭で敲かれて、塵土の間に打ち据ゑられることもある。我輩と同じ罪名で遠流されたものは、大方召し還されて、既に發足したが、我輩のみは然らず、天路幽險にして、攀ぢ難きを嘆息して居る始末、お互に詰まらぬことでは御座らぬか——かくの如く、張功曹は歌ひ出でた。如何にも御尤もではあるが、先づ暫く止められよ、今度は私が歌はうが、私の歌は、君のとは大分品種を殊にしたものである。今宵は八月十五日、一年中で一番好い月の夜ではないか、人間の事は、すべて運命の然らしむるところ、何も外に悪い者があつて、爲す譯でもない。それは、今さら仕方がないことと思ひ諦め、この皓皓たる明月に對し、折角酒があるのに、楽しく飲まないといやがて、夜が明けて仕舞ふ、サア、これから十分、痛飲を致さうではないか。

【餘論】この詩は、一種の奇格で、はじめに風景を敘し、それから、自分の述べやうとする意を悉く張功曹の言葉として寫し出し、最後に、天命なるが故に思ひ諦めよといふことを、自分の言葉にしてある。もとより、張功曹は、同じ閱歷の人で、互に同情がある處から、自分を餘處に置き、さうして、自分の思ふところを其人に言はせるといふ趣向と見え、全體に於て、用語も平易を旨とし、その風調も自然流暢である。朱竹垞は起首を評して「寫景の語淨」といひ、又「張を借つて賓主となし、又歌を借つて悲樂を分つ、すべて是れ、人を抑へ、己を揚ぐ」といつて居る。

謁衡嶽廟遂宿嶽寺題門樓

衡嶽廟に謁し、遂に嶽寺に宿して、門樓に題す

五嶽祭秩皆三公 五嶽の祭秩、皆三公。

四方環鎮嵩當中 四方に環り鎮して、嵩は中に當る。

火維地荒足妖怪 火維、地荒れて、妖怪に足れり。

天假神柄專其雄 天、神柄を假して、其雄を專にす。

噴雲泄霧藏半腹 雲を噴き、霧を泄らして、半腹を藏す。

雖有絶頂誰能窮 絶頂ありと雖も、誰か能く窮めむ。

【字解】【一】五嶽祭秩皆三公

禮記に「天子は天下の名山大川を祭り、五嶽は三公に親ぶ」とあり、書經に「榮して山川を望秩す」とあつて、その註に「その秩の如き、次第して之を祭る」とある。五嶽は、各順序があつて、第一に東嶽泰山、第二に西嶽華山、第三に北嶽恒山、第四に南嶽衡山、第五に中嶽嵩山といふ様に、順

我來正逢秋雨節。我、來つて、正に逢ふ秋雨の節。

陰氣晦昧無清風。陰氣晦昧にして清風なし。

潛心默禱若有應。心を潜めて、默禱、應あるが若し。

豈非正直能感通。豈に正直の能く感通するに非ざらむや。

須臾靜掃衆峰出。須臾にして靜に掃うて、衆峰出で、

仰見突兀撐青空。仰ぎ見れば、突兀として青空を撐ふ。

紫蓋連延接天柱。紫蓋連延して天柱に接し、

石廩騰擲堆祝融。石廩騰擲して、祝融を堆す。

森然魄動下馬拜。森然魄動いて、馬を下つて拜す。

松柏一逕趨靈宮。松柏一逕、靈宮に趨る。

粉牆丹柱動光彩。粉牆丹柱、光彩を動かし、

鬼物圖書填青紅。鬼物、圖書、青紅を填す。

升階僂僂薦脯酒。階に升つて、僂僂、脯酒を薦む。

巖に攀つて行く。そして、五嶽は三公と同様、即ち天子の次に位するものとして持運する。【一】嵩山中、嵩山は、他の四嶽の真中に當つて居る。白虎通に「嵩山は、四方の中に居る、故に嵩といふ」とある。【二】火維、盛弘之の荊州記に「衡嶽、下、離宮に屬して、位を火維に接す」とあり、徐靈期の南嶽記に「衡山は朱陵の靈臺、太靈の寶洞、上、翼軫を承け、萬物を鈐縛す、故に衡山と名づく。下、離宮に屬し、火神を統攝す、故に南嶽と號す、赤帝、その巖に館し、祝融、その巖に宅す」とある。火維は、南方で赤道に近い處。【三】無清風、蔣註に「清風興つて羣陰伏す、清風なければ雨意未だ已まざるなり」とある。【四】正直、詩經に神之聰明之。正直是與とある。【五】紫蓋、

欲以菲薄明其衷。菲薄を以て、其衷を明かにせむと欲す。

廟令老人識神意。廟令の老人、神意を識り、

睢盱偵伺能鞠躬。睢盱偵伺して、能く鞠躬。

手持盃琖導我擲。手に盃琖を持し、我を導いて擲たしむ。

云此最吉餘難同。云ふ此れ最も吉、餘は同じうし難し。

竄逐蠻荒幸不死。蠻荒に竄逐せられて、幸に死せず、

衣食纔足甘長終。衣食纔に足つて、長く終はらむことを

侯王將相望久絕。侯王將相、望久しく絶ゆ。甘んず。

神縱欲福難爲功。神、縱ひ福せむと欲するも、功を爲し

夜投佛寺上高閣。夜、佛寺に投じて、高閣に上る。難し、

星月揜映雲臃臃。星月揜映して、雲臃臃たり。

猿鳴鐘動不知曙。猿は鳴き、鐘は動いて、曙を知らず、

杲杲寒日生於東。杲杲たる寒日、東より生ず。

古詩 嵩嶽廟遺宿嶽寺題門樓

長沙記に「衡山七十二峰、最も大なるもの五、芙蓉、紫蓋、石廩、天柱、祝融を最高と號す」とあり、杜甫の望嶽の詩にも、祝融五峰尊、峰峰次低昂、紫蓋獨不朝、爭長業相望とある。【七】粉牆、白壁。【八】丹柱、朱塗の柱。【九】填青紅、青紅は丹青に同じ、繪の具で塗り埋めてある。【一〇】僂僂、身を屈めて拜伏する。【一一】脯酒、乾肉と酒。【一二】廟令、官司。【一三】睢盱偵伺、恐る恐る伺ふ。【一四】鞠躬、身を屈めて丁寧挨拶する。【一五】盃琖、唐韻に「琖は盃なり、玉を以て之を爲る」とある。程大昌の演繁露に「トを神に問ふ、器あり、盃琖と名づく。兩餅を以て、空に投じて地に擲つ、その俯仰を觀、以て休咎を斷す、後人、或は竹を用ひ、或は木を用ふ、

断つて蛤形の如くして、中分二となる、亦た孟政と名づく。野廟の巫、未だ必ずしも力めて能く玉を用ひず、當に是れ蚌殼蟹白の者
を擲んで、之を爲るべし、因つて玉を附して名と爲す。凡そ今の珠璣瑋瑤の字、玉に従ふと雖も、その實は、蚌の屬なり」とある。
すると、孟政とは云ふものの、その實、貝殻で作り、それを投げ上げて地に落つるとき、表が出るか、裏が出るかに因つて吉凶を卜
するのである。【二六】 龍。蘇註に「按ずるに、廣韻、龍の字、紙に日に从ふあり、月に从ふものなし、龍は本と日の出づる貌。
然れども前輩、月を詠する、多く之を用ふ、梁孝綽の詩、龍入三林翠、潘岳秋賦、月麗龍而含光の類の如きなり、當に更に之を考
ふべし」とある。【二七】 猿。謝靈運の潘行の詩に猿鳴誠知、谷關光未、願とある。【二八】 果。果。寒日。詩經に果臝出日とあり、
禮記に「大明、東より生ず」とある。

【題義】 爾雅に「霍山を南嶽となし、一名は衡山」とあり、郭璞は「衡山は南嶽」といひ、唐書地理
志に「衡山は、長沙湘南縣南に在り」といひ、元和郡縣志に「衡嶽廟は、衡山縣の西三十里に在り」
と記してある。衡嶽廟は、衡山の麓に在るので、韓愈は陽山より江陵に量移されたとき、はじめ廟に
謁し、夜、嶽寺に宿し、その門樓の上に、この詩を題したので、絶頂まで登つたのではない。それか
ら、この詩を以て、潮州から袁州に移る時に作つたものだとする説もあるが、それは、無論、誤つて
居るので、顧嗣立の集註に引ける王伯大の説には、詳しく之を論じて居る。曰く、公、兩たび南方に謁
せらる。はじめは、陽山より北に還つて、衡を過ぐ、永貞元年に在り、八月、潭を過ぐ、適ま殘秋に
當る、陪杜侍御、游湘西寺の詩に云ふ、是時秋向殘、と。是れなり。今云ふ、我來正逢秋雨節、と。
故に知る、この詩は是れ陽山より還る時の作、後、潮州より還り、移つて袁州に刺たるは、元和十五

年十月、蓋し未だ嘗て衡を過ぎず。袁州謝表に據るに云ふ、去年正月、貶せられて潮州刺史を授け
られ、その年十月、例に準じて量移す云云、と。即ち潮より徑に當に袁に來るべし、又未だ嘗て秋雨
節の時に遇はざるなり。蘇東坡の海市を觀るの詩に、湖陽太守南遷歸、喜見石廩堆三祝融、と云ふは、
これを确言するのみ、とあつて、考據極めて確切である。

【詩意】 五嶽は、中原に於ける名山であるから、その順序も定まつて居て、且つ三公の位を以て之を
待遇する。その五嶽の中で、泰・華・衡・恆は、四方に環つて鎮を爲し、そして、嵩山は其中央に當つて居
る。ここに、南方の赤道に近い地方は、一體荒蕪たる處であつて、妖怪などが随分居る處から、天は、
衡嶽の神に權柄を假し、その威力を以て、これを鎮壓することに成つて居る。かくの如き名山であるか
ら、或は雲を噴き、霧を泄らし、半腹以上は雲霧の中に隠れて居て、絶頂は、何處とも分らない位
である。自分は、今しも、その山麓に差しかかつたが、秋の長雨の降り續く時で、陰氣晦昧として深
く立ちこめ、それを吹き拂ふべき清風もない。自分は、何時又來るか分からず、是非一度、山の全形
を見たいと思ひ、心を潜めて黙禱すると、さながら、神靈の感應があつたらしいので、もともと、神
様は正直であるから、わが心が自然に感通したのであらう。しばらくすると、雲霧は靜に掃ひ退けら
れ、多くの峰峰は、一齊に出で、突兀として青空を撐へて居る有機が、はつきりと見えて來た。眺め
やれば、紫蓋峰は連延して天柱峰に接し、石廩峰は騰擲して躍るが如く、そして、祝融峰は堆く

つて之に引き續いて居る。さても、神靈の威徳は、素晴らしいものだといふので、森然として魄の動くをも覺えず、取り敢へず、馬を下つて再拜した。それから、松柏の左右に生ひ茂れる一徑を辿つて、衡嶽廟に往つて見ると、眞白の壁に丹塗の柱が相映して、光彩自ら動いて見え、廟壁には、鬼物など、奇怪の者が青や赤の繪の具で、塗り填められて居る。そこで、廟中に入り、階を登り、身を屈めて神前に額づき、乾肉と酒とを供へ、もとより菲薄な物ではあるが、今日威應を與へられた御禮の積りで、おのが誠心を表明せむとした。すると、宮司の老人は、平生神に事へて、自ら神の意志を善く知つて居るものであつて、我輩の参拜するを見、恐る恐る伺ひを立て、鞠躬如と身を屈めて我輩に向ひ、ここに御参拜になる御方は、神様の前で將來の吉凶を占ふことが慣例に成つて居ますから、これを投げて御覽なさいといつて、盃玦を持つて來て呉れた。そこで、試に之を投げると、廟令は之を見て、貴君の前途は大吉であつて、これまで餘人の投げたのには、こんな善いのは頓と無かつたといつた。しかし、自分は、心の中で嘲笑し、廟令は、人を喜ばす爲に、あんな調子の善いことを言ふけれども、自分は、南方蠻荒の地に左遷せられ、今日まで死なずに居たのが、物怪の幸で、この上は、衣食が粗ば足りて、天年を終へれば、自分で満足する。侯王將相に成りたいといふ希望は、もう久しく断念して居たので、神様は、福を與へて下さつても、何の効果もないと、かう思つた。やがて、嶽寺に投宿して高閣に上つた處が、夜になると、星と月とが見えて、互に掩映して居るが、雲氣朦朧

として、空は曇つて居る。山奥の事であるから、猿が鳴き、そして、鐘を敲き出したが、ぼんやりして居たので、夜が明けたのかどうか、少しも分からなかつたが、その中に杲杲たる寒日が東の空からさし上つて、看る看る朝になつて仕舞つた。

【餘論】この詩は、四段より成り、起首、五嶽祭秩皆三公より雖有絶頂誰能窮に至るまでは、五嶽より始めて衡山の事を敘し、我來正逢秋雨節より欲以菲薄明其衷に至るまでは、衡山の麓を過ぎた時の實況を寫し、廟令老人譏神意より神縱欲福難爲功に至るまでは、衡嶽廟に謁した時の事を敘して、その感興を述べ、夜投佛寺上高閣より以下、最後の四句は、門樓に宿した時の光景で、これを以て、題意を全うしたのである。なほ此篇は、一韻到底の古詩で、毎句に平仄法が儼然として存して居る。即ち押韻の句は、第五字必ず平、第四字必ず仄、そして、踏み落しの句は、その反對であつて、これは、普通の律句の平仄法（即ち二四不同二六對）を破る最も簡便にして最も規則立つた法式である。そこで、王漁洋が古詩平仄論を著した時には、開卷第一に之を掲げて、一韻到底の七古の模範としたのである。朱竹垞は須臾靜掃衆蜂出の數句を評し、「相傳ふ、南嶽、時として雲なきはなし、乃ち退之禱れば、即ち開霽、亦た大に異なり」といひ、又「この下、須らく、虛景の語を用ひて、更に點注すべし、更に活するに似たり、今却つて、四峰を用ひて一聯を排す、徹に板實を覺ゆ」といひ、沈德潛は「横空盤硬語、妥帖力排羣、この詩、この語に當るに足れり」といつた。乾隆御批

には「東坡の謂はゆる能く衡山の雲を開くものは此に本づく」とあつて、これは、東坡の作れる潮州韓文公廟碑に「故に、公の精誠、能く衡山の雲を開けども、しかも、憲宗の惑を回す能はず」といふ一節あるを稱したのである。

岫巖山

岫巖山

岫巖山尖神禹碑

岫巖の山尖、神禹の碑、

字青石赤形摹奇

字青く、石赤くして、形摹奇なり。

科斗拳身薤倒披

科斗、身を拳めて、薤、倒に披く。

鸞飄鳳泊拏虎螭

鸞飄鳳泊、虎螭を拏む。

事嚴跡祕鬼莫窺

事嚴に、跡祕にして、鬼も窺ふなし。

道人獨上偶見之

道人獨り上つて、偶ま之を見る。

我來咨嗟涕漣漣

我、來つて、咨嗟して涕漣漣たり。

千搜萬索何處有

千搜萬索、何の處にか有る。

森森綠樹猿猴悲

森森たる綠樹、猿猴悲む。

【題義】岫巖山は、衡山の中の一峰で、山海經の註には「衡山、一名は岫巖山」とあるが、それは宜しくないもので、蔣註などに「今按するに、岫巖は、實に衡山南麓別峰の名、前詩と同時に作る。東坡の中隱堂の詩に、岫巖何須到、韓公浪自悲とあるは此を指す」といつた方が確かである。そして、岫巖山には、禹の碑があるといふので、盛洪之の荊州記に「南嶽は、周回数百里、むかし禹、登つて、之を祭る。因つて、玄夷使者を夢み、遂に金簡玉字の書を獲たり」といひ、徐靈期の南嶽記に「夏禹、水を導き、瀆を通じ、石に刻して、名山の高きに書す。皆科斗の文字、岫巖碑は、むかし樵者かつて之を見る。自後見るものあるなし」といひ、輿地紀勝に「碑は夔門に在り、宋の嘉定の初、蜀士、樵夫の引に因つて、其處に至り、紙を以て之を摹す。凡そ七十二字、皆曉るべからず、而して、摹本を以て之を觀中に刻す。後、俱に亡ぶ」とある。すると、碑が有るといふのは、甚だ怪しいので、この詩に據れば、韓退之も夙に之を聞いて居たから、山に登つて、態態詮索したが、どうしても知れなかつたといふのである。それから、朱子の説にも「岫巖は、衡山南麓別峰の名、今、衡山、實に禹の碑なし、この詩、記するところ、蓋し當時傳聞の誤、故に卒章自ら疑詞を爲し、以て微意を見はす。

劉禹錫、呂衡州温に寄せて亦た云ふ、嘗聞祝融峰、上有神禹銘、古石琅玕姿、秘文螭虎形と。蓋し、亦た傳聞に得たるなり、倒薤書は、歐公集古錄唐玄度十體書に見ゆ」とあつて、最初から、神禹の碑など無いといふ方が、どうやら正確である。然るに、後世は岫巖山碑の拓本などがあつて、韓退之も

【字解】(一) 山尖 山頂に同じ。(二) 科斗 形摹 形畫に同じ。(三) 科斗 支那最古の字體、王愔の文字志に「科斗は古篆なり、その頭龜、尾細なるを以て、水蟲の科斗に類す」とある。(四) 薤倒披 薤はひひらぎ、その葉が倒に懸けられたやうに見える字體。(五) 拏 攫め合ふ。(六) 漣漣 王粲の詩に、涕淚漣漣とあつて、涙の流れる貌。

朱子も搜し得なかつたもので、愈よ珍らしいと言ひ觸らして居るが、そんな物は、もとより信用することが出来ない。由來、支那人は、碑などを巧に偽造して、天下後世、これに惑はされて居るのを、竊に嘲笑して喜んで居ることが毎々あるので、これもその一つに相違ない。

【詩意】 崎嶇山の絶頂の尖つて居る處に、神禹の碑が立つて居るといひ、その碑は、古色蒼然たるもので、字は青く、石は赤く、碑の形も極めて珍らしく、その字體は、もとより古篆であつて、科斗が身を曲げたやうであつたり、ひひらぎの葉が倒に懸つて居るやうであつたりして、そんな字が碑面に一ぱい鑄り付けてあるから、鸞鳳の飄泊するが如く、龍虎が攫み合ふが如くであるといふことである。但し、神禹が碑を建てたといふことは、極めて神聖で、その跡、秘密に屬し、鬼神でさへも容易に窺ひ知ることが出来ぬといふのに、道人などが、時たま、山に登つて、偶然これを見たといふのは、甚だ怪しい次第である。自分などは、もとより、凡骨の者で、そこに往ける筈もない。その臍甲妻なさに涕淚漣漣として流れる。されば、如何に搜したとしても、その碑は、到底見つかる譯ではなく、森森たる綠樹の間に、猿が悲しげに鳴くのみである。

【餘論】 碑の存在を表面から否定せず、有るには有るさうだが、自分には行かれぬから残念だといふ處に、無限の餘情がある。蕪本には「結語凄清、畫の如し」とある。

永貞行

永貞行

君不見太皇諒陰

君見すや、太皇亮陰、未だ令を出さ

未出令

す、

小人乘時偷國柄

小人時に乗じて、國柄を偷む。

北軍百萬虎與貔

北軍百萬、虎と貔と、

天子自將非他師

天子自ら將として他の師に非ず。

一朝奪印付私黨

一朝印を奪うて、私黨に付す、

懷懷朝士何能爲

懷懷たる朝士、何ぞ能く爲さむ。

狐鳴梟噪爭署置

狐鳴き、梟噪いで、争うて署置す、

賜賤跳踉相嫵媚

賜賤跳踉して、相嫵媚す。

夜作詔書朝拜官

夜、詔書を作つて、朝に官を拜し、

超資越序曾無難

資を超え、序を越えて、曾て難なし。

公然白日受賄賂

公然、白日、賄賂を受け、

【字解】

【一】 太皇亮陰 太皇は

順宗を謂ふ。諒陰とは天の陰に居られること。諒は信、陰は默、信に默して言はずといふ義。諒、一に亮に作る、轉同じ。書の說命に王宅、亮亮陰三祀とある。【二】 小人乘時 王任・王叔文の二人を指す。唐書に「王叔文は、棋を以て東宮に待詔す。王任は始め書を以て待詔し、太子の宮に入つて書に侍す。順宗立つて、政を聽く能はず、深層帷を施して坐し、牛昭容、宣人李忠言を以て側に侍せしめ、羣臣事を奏すれば、帷中より其奏を可す。叔文は任に因り、任は忠言に因り、忠言は昭容に因り、更る相依仗す。任は傳受を主とし、叔文は嚴可を主とし、乃ち之を中書に授く。叔文、毎に言ふ、錢穀は國の大本、その柄を操れば、因つて以て士

火齊磊落堆金盤

火齊磊落、金盤に堆す。

元臣故老不敢語

元臣故老、敢て語らず、

畫臥涕泣何沈瀾

畫臥して涕泣、何ぞ沈瀾たる。

董賢三公誰復惜

董賢の三公、誰か復た惜まむ、

侯景九錫行可歎

侯景の九錫、行く、歎すべし。

國家功高德且厚

國家功高くして、徳且た厚し、

天位未許庸夫干

天位、未だ許さず、庸夫の干すを。

嗣皇卓犖信英主

嗣皇卓犖、信に英主、

文如太宗武高祖

文は太宗の如く、武は高祖。

膺圖受禪登明堂

圖に膺り、禪を受けて、明堂に登る。

共流幽州絳死羽

共は幽州に流され、絳は羽に死す。

四門肅穆賢俊登

四門肅穆として賢俊登る。

數君匪親豈其朋

數君親に匪ず、豈に其れ朋ならむや。

を市ふべしと。乃ち白して、杜佑を用ひて度支鹽鐵使を領せしめ、己は之に副とし、實は其權を專にす」とある。【三】北軍 唐代天子の親兵は、禁軍といつて、南北兩衛に分ち、中にも北衛に屬するものは、天子の親兵として、殊に重んぜられて居た。【四】虎與龍 書の牧誓に如虎如龍とある。【五】奪印付私黨 唐書王叔文傳に「叔文、書署に在り、その黨與を引いて竊に語り、内官の兵柄を奪はむことを謀り、故將范希朝を以て京西北諸鎮を統べしめ、行營兵馬使韓泰、これに副たり」とある。【六】孤鳴泉鳴 楚辭に鳴鳥萃而制之とある。【七】署置 署任、人を見立てて官を授けること。【八】臨 臨文に「朕は暨親なり、臨は疾視なり」とあり、目を閃かして尋ね

郎官清要爲世稱

郎官清要、世に稱せらる。

荒郡迫野嗟可矜

荒郡迫野、嗟、矜むべし。

湖波連天日相騰

湖波、天に連つて日相騰る。

蠻俗生梗瘴癘蒸

蠻俗生梗、瘴癘蒸す。

江氛嶺祲昏若凝

江氛嶺祲、昏くして凝るが若し。

一蛇兩頭見未曾

一蛇兩頭、見て未だ曾てせず。

怪鳥鳴喚令人憎

怪鳥鳴喚、人をして憎ましむ。

蠱蟲羣飛夜撲燈

蠱蟲羣飛して、夜、燈を撲つ。

雄虺毒螫墮股肱

雄虺毒螫、股肱を墮す。

食中置藥肝心崩

食中に藥を置いて、肝心崩る。

左右使令詐難憑

左右、使令、詐つて憑り難し。

慎勿浪信常兢兢

慎んで浪りに信する勿れ、常に兢兢。

吾嘗同僚情可勝

吾かつて同僚、情勝ふべけむや。

【一】 洗眼 身を麗らす。【二】 超賞 賞格を越える。【三】 火齊 順序を論ずる。【四】 火齊 西都賦に翡翠火齊、流耀含英とあり、杜甫の詩に火齊堆金盤とあつて、普通に珠玉といつて居るが、太平寰宇記に「天然に火齊あり、母の如くして色紫、これを製けば、海きこと輝翼の如く、これを凝めば、紗縠の重」とあるを見れば、珠玉では無いらしく、裝飾に用ふる雲母様の礦物である。王叔文の一黨が賄賂を得たことは、舊唐書に「任、叔文と及び諸朋黨の門、車馬填溢、しかも、任の門、尤も盛にして、珍玩賭博、歳時絶えず。室中に大帳を爲り、一寮を開き、以て金寶を藏し、その妾、或は上に寢臥す」とある。【五】 元臣故老不敢語 元臣は元老、唐書鄭

具書目見非妄徵。具に目に見ることを書す、妄に徵する」

珣傳に「王叔文、一日中書に至つて、章執直を見る。直吏白す、宰相の會食に方つては、百官見るものなし」とある。

嗟爾既往宜爲懲。嗟爾既往宜しく懲を爲すべし。「に非ず」
しと。叔文書つて吏を叱す。吏、走つて入つて白す。執直、起つて間に就いて、叔文と語る。珣、杜佑・高郢と罷を頼めて以て待つ。これに頃くして、吏白す、二公同じく飯すと。珣、嚼して曰く、吾、復た此に居るべしむや、と。左右に命じて馬を取らしめて歸り、家に臥して出でず」とある。【一四】董賢。漢書後帝傳に「哀帝の元壽元年、帝、董賢を重んじ、賢を封じて高安侯となし、その位を極めむと欲し、遂に賢を以て大司馬衛將軍となす、この時、賢年二十二にして三公となる」とある。【一五】侯景。南史の侯景傳に「景、蕭棟の詔を矯めて、自ら九錫を加ふ」とある。【一六】九錫。韓詩外傳に「一に車馬、二に衣服、三に虎賁、四に樂器、五に納陛、六に朱戶、七に弓矢、八に鉄鉞、九に租稅、これを九錫といふなり」とあつて、東漢以後、九錫を賜はることが、受禪の先ぶれに成つて居た。【一七】嗣皇。憲宗を謂ふ。【一八】唐圖。國錄にあたる。【一九】登明堂。諸侯を會すること。【二〇】共流。幽州録死羽。書の喪典に「共工を幽州に流し、鯀を羽山に殛す」とあつて、共・鯀は王任・王叔文の二人を指す。前に見えた江陵途中寄三學士の詩に首領誅三共殺」とあるのと同じ。【二一】四門。唐書に「四門に實し、四門穆穆」とある。【二二】賢後。林黃裳・鄭餘慶等を用ひて相となせしことをいふ。【二三】數君。劉禹錫・柳宗元等を指す。【二四】荒郡。道野。唐書に「九月、韓泰を撫州刺史に、司封郎中韓暉を池州刺史に、禮部員外郎柳宗元を邵州刺史に、屯田員外郎劉禹錫を連州刺史に貶す。王叔文に交るに坐するなり」とある。それから、これ等の諸人は、まだ其地に到着せぬ内に、更に他州の司馬に貶せられたので、禹錫は、荆南に至りし後、武陵の司馬に改められた。【二五】生靈。荒つて命を懸する。【二六】蠱。毒氣の氣。【二七】一蛇。兩頭。賈誼の新書に「孫叔敖、嬰兒たり、出でて遊び、兩頭の蛇を見て之を埋む」とあり、同じ事列女傳や新序等に見え、兩頭の蛇を見るものは死ぬといふ事さへある。【二八】蠱。毒蟲の一種。【二九】雄虺。毒蛇の類。【三〇】腹腹。手足をも腹す。【三一】肝心崩。膽玉が潰れる。【三二】蠱。信賴することが出来ない。

【題義】舊唐書順宗紀に「貞元二十二年正月癸巳、德宗崩す、丙申即位。風病、政を聽く能はず。王任を以て右散騎常侍となし、王叔文を戸部侍郎度支鹽鐵轉運使となし、事、巨細となく、皆二人に決す。物論喧雜たり、四月、皇太子を冊す。八月、冊して皇帝となし、貞元二十一年を改めて永貞元年となし、王任を貶して開州司馬となし、王叔文を渝州司馬となす。元和元年正月、太上皇の尊號を上る」とあつて、順宗在位八個月の間に於ける表面の史實は、單に此だけである。韓愈の此詩は、即ち裏面の事實を敍したので、王任・王叔文が宰相章執直と結託して、非常に悪い事を行つた有様を寫した處は、まことに面白いのみならず、亦た實に正史の缺を補ふことが出来る。但し、劉禹錫・柳宗元等は、その黨與であつた爲に、いづれも、遠地に貶謫されて仕舞つた。この二人は、韓愈が曩に陽山令に左遷される時、どうやら中傷を試みたらしいといふ疑も無いではないが、韓愈は、從前の友誼の上から、そんな事は全然忘れて仕舞ひ、この詩の後半に於ては、専ら二人の不運を傷んで、同情を寄せて居る。燕註に「この詩、郎官、荒郡と言ふは、意ふに劉禹錫が叔文の黨に坐して連州に貶せらるるを指す。公、方に陽山より江陵に量移し、而して、夢得、邂逅して之に及ぶ、故に作る」とある。【詩意】順宗皇帝は、折角、御即位に成つたけれども、まだ先帝德宗の喪に居られる諒闇中でもあり、色色と御遠慮がある處から、まだ政令を發せられなかつた。然るに、小人どもは、奇貨居るべしと爲し、公然、國家の權柄を偷み、天子の詔を矯めて、非常に暴逆なる振舞をした。中でも、一

番怪しからぬのは、北軍は御親兵で、貔虎の精銳百萬を算すべく、天子が御自身に大元帥と御成りなされ、決して、他の者に其兵權を委ねられることの出来ない制度であるにも拘はらず、王叔文・韋執誼の輩は、第一に兵權を自分達の手に收めなければ、おもふ存分の事が出来ぬといふので、北軍の大將たるべき印を奪ひ、詔を矯めて、黨中の者に附與した。そこで、在廷の朝士は、慷慨として、皆心に恐れ、見す見す悪い事とは知りながら、その命に屈從するやうになり、何人も、これに對して反抗することが出来なかつた。彼等の黨派は、もう大丈夫だといふので、狐の如く鳴き、鼻の如く嗅ぎ、人選で任官させるといふ段取に成ると、その黨中の者どもは、互に獵官運動を爲し、目を閃めかし、體を躍らし、頻りに嬋媚を呈し、どうか上官の氣に入つて、善い役に有り付かうといふので、大騒ぎをやらかした揚句に、王叔文や韋執誼などは、夜中に、勝手に詔書を作つて、翌朝、それぞれ任命したが、その官の授け方は、如何にも亂暴極まるもので、資格にもかまはず、順序をば飛び越して、少しも憚ることなく、おまけに、白晝公然として、賄賂を受け、火齊の如き珍らしい贖物をさへ、磊落として金盤に堆く盛り上げて、持ち込んで来るものがあつた。そこで、元老とか元勳とか云はれる人人は、權勢の遠く相及ばざる處から、彼等の爲すが儘にして、敢て語らず、鄭珣瑜の如きは、もう世が末になつた、唐の社稷も滅亡が近いといつて啼泣し、涙に咽びつつ、その家に歸り、晝寢をして、再び出ないといふ始末、しかも、決然起つて之を争ふものは無かつた。王叔文の一派の羽ぶりの善いことは、

かの董賢が三公になり、侯景が九錫を賜はつたと同じく、誰も彼奴に此大官は勿體ないといつて、非難するものもないが、行く行くは、慨歎すべき有様であつた。さはいへ、從來、唐室は國家の治に貢獻した功績が高く、前代の徳澤は厚くして、遍く民心に浸み渡つて居るから、たとひ衰へたとはいへ、詰らぬものが天位を覬覦することは出来ない筈である。果然、順宗は位を遷られて、皇太子が即位されたので、それが即ち憲宗、その憲宗は、卓落として、天晴の英主におはし、文は開國の君たる太宗の如く、武は隋末の亂を平げられた高祖の如く、やがて、圖録に膺り、禪を受けて、帝位に上られ、仍つて、明堂を開いて、諸侯を朝し、同時に、舜が堯に繼いで立つと、共工を幽州に流し、鯀を羽山に殛したと同じく、小人どもの罪を糺し、王叔文の一派を盡く斥け、到る處の役所は、俄に肅穆となり、その職に稱ふところの賢俊の士が、次第に登庸され、局面の全く一變したのは、國家の爲に慶すべきことである。ここに、劉禹錫・柳宗元等、數君の如きは、王叔文等と格別の縁故もなく、まさか其朋黨ではあるまいと思はれ、いづれも、員外郎といふ清要の職に居り、世間からも評判されて居た處が、矢張、その連累を受けて、荒郡迫野とも稱すべき遠方に左遷されたのは、まことに、驚くべきことで、我輩は、平素交誼ある處から、一個人の私情としては、實に氣の毒千萬なことと思ふ。その中、劉禹錫は連州に往くさうだが、これは、我輩が今まで居た陽山に近い處で、非常に氣候が悪い。そこへ行く途すがら、洞庭湖の水は、天に連つて、波が高く騰り、うツかりすると、舟が顛覆する。

それから、蠻地の風俗は、何となく荒ッぱく、人づきが悪く、その上、瘴癘の氣の蒸すところで、江嶺の氛穢は、昏く立ちこめて、凝るが如く、今まで見たこともない様な兩頭の蛇も居るし、怪鳥は悪聲を發して、さも憎さげであるし、蠱蟲は、夜、燈火をつけると、羣飛して之を撲ち、又恐ろしい蛇があつて、それに螫されると、たとひ全治しても、手足を切り落さねばならぬ。それから、人氣が悪くて、食中に毒を入れて人を殺すことがあるので、聞いてさへ膽が潰れる位、左右に召し使つて居る者どもは、詐欺を専らにして居るから、すこしも信頼することが出来ず、常に兢兢として、萬事に氣をつけねばならない。我輩は、むかし、同僚であつたから、劉禹錫が其地に赴くことを聞いて、同情に勝へられぬ。そこで、前以て其風土の實況を述べたが、いづれも、自分が最近目睹したことで、妄りに證據のないことを言つて脅す譯ではない。それにつけても、諸君は、何故、そんな處へ行かねばならぬやうに成つたかといふことを篤と考へ、既往の事に懲り、今後、その身を慎んだならば、將來の發展上、必ず見るべきものがあらう。

【餘論】この詩に特異とするところは、その押韻の法であつて、最初は二句で一轉し、北軍百萬虎與、鏡は四句一韻、狐鳴鼻噪爭暑置は二句一韻、夜作詔書朝拜官は十句一韻、嗣皇卓犖信英主は四句一韻、四門肅穆賢俊登より以下は十七句一韻、しかも毎句押韻で、大に調子が違つて居る。かうなること、古詩の換韻などは、もとより、一定の法則なく、その人の心次第で、どうでも遣られるが、但た

意轉すると共に、韻が換はるといふことだけは、如何なる場合にも、動かない様で、この一點を遺却しなければ、それで善いのである。蔡寬夫詩話に「子厚禹錫退之に於て最も厚善、然れども、退之の陽山に貶せらるる、疑なき能はず、赴江陵途中寄三學士に云ふ、同官盡才俊、偏善柳與劉、或慮語言泄、傳之落冤讎、二子不宜爾、將疑斷還不」と。その永貞行を爲つて、憤疾するに及び、數君匪親豈其朋と云ふに至り、又、吾嘗同僚情可勝と曰ふ、亦たその坦夷義を尙び、朋友を待つに始終あるを見るなり」といひ、因學紀聞には「少陵房次律に善し、而して、悲陳陶の一詩、これが爲に隠さず。昌黎、柳子厚に善し、而して、永貞行の一詩、これが爲に諱まず、公議の掩ふべからざるや、かくの如し」といつた。顧嗣立は「この詩、前半、小人放逐の快なるを言ひ、後半、數君貶謫の矜むべきを言ふ、蓋し、劉柳諸公の爲にするなり。舊註、専ら夢得を指す、未だ必ずしも然らざるに似たり。然れども、夢得、連州に貶せらる。而して、公、かつて陽山に令たり、具書目見の句を以て證と爲す、義に於て亦た通ず、姑らく其説を存し以て考を俟つ」といつた。この詩は、劉禹錫に遇つた時に作つたといふから、無論、禹錫を主としたのであるが、これと同一の運命に遭へる柳宗元に旁及したものと見ても差支はない。それから、朱竹垞は、湖波連天日相勝以下を評して「瘴鄉を描寫するの語工」といつた。何義門は「叔文、中人の兵柄を奪ひ、これを天子に還さむと欲す、この事、未だ其人に因つて厚く之を非とすべからず。下文、九錫天位等の語、直に之を坐するに反を以てせむと欲す。公、ここに

於てか、大人長者の度を失ふ」といつたのは、一應尤もで、元來二王の志は、廓清に在つたらし
 いが、唯だ其位地が卑い爲に、陰謀に類似したことを行ひ、蹤跡、跪秘に涉つて居る處から、その當
 時は勿論、後世の非難を受けたので、乾隆帝も、通鑑輯覽に於て、此事に道及して居る。又義門はこ
 の詩の結末を評して「具書目見、亦た君來洛吾歸洛の意あり、長者の言に非ざるなり。末句言ふ、
 將來朝士、咸な宜しく數子既往の事を以て嘆息を懲らすべきなり」といつたが、これは、朝士に向
 つて言ふのではなく、矢張、直に劉禹錫乃至柳宗元等、當事者に向つて言つたものとせねば、この詩
 を作つた主意が貫徹せぬことと思ふ。最後に、乾隆御批には「前幅天昏地暗、中間日出て氷消ゆ、閱
 して後幅に至れば、又凄風苦雨の如く、文、情を生じ、變幻かくの如し」といひ、極めて妥當である。

洞庭湖阻風贈張十一署

洞庭湖に風に阻まれ、張十一署に贈る

十月陰氣盛。北風無時休。

十月陰氣盛なり、北風時として休むなし。

蒼茫洞庭岸。與子維雙舟。

蒼茫たり、洞庭の岸、子と雙舟を維ぐ。

霧雨晦爭泄。波濤怒相投。

霧雨晦くして、争ひ泄れ、波濤怒つて相投す。

犬雞斷四聽。糧絕誰與謀。

犬雞四に聽くを斷ち、糧絶えて誰と與にか謀らむ。

相去不容步。險如礙山丘。

相去ること、歩を容れず、險は山丘に礙へらるるが如し。

清談可以飽。夢想接無由。

清談、以て飽くべし、夢想接するに由なし。

男女喧左右。饑啼但啾啾。

男女、左右に喧しく、饑啼但だ啾啾たり。

非懷北歸興。何用勝羈愁。

北歸の興を懷くに非ざれば、何を用てか、羈愁に勝へむ。

雲外有白日。寒光自悠悠。

雲外に白日あり、寒光自ら悠悠。

能令暫開霽。過是吾無求。

能く暫く開霽せしめよ、これを過ぎては、吾求むるなし。

【字解】(一) 北風 文選の古詩に孟冬寒氣至、北風何慘慄とあり、又杜甫の詩にも烈風無時休とある。(二) 斷四聽 どの方
 へ向いても、さつぱり聞こえぬといふこと。

【題義】洞庭湖は、前にも見えて居たが、郭璞の、山海經註に「長沙巴陵縣西に洞庭陂あり、潛伏江
 に通ず」といひ、水經註には「湖水廣圓五百餘里、日月、その中に出没するが若し」とある。それか
 ら、王伯大は「永貞元年、陽山より徙つて江陵に據たり。十月、洞庭湖を過ぎて作る。或は云ふ、陽
 山に赴く時と。非なり。公の江陵途中の詩、はじめて陽山に赴くを敘して云ふ、春風洞庭浪、と。而
 して此詩の首に云ふ、十月陰氣盛、と。その非なるを知るべし」といつて居る。すると、この詩は、洞
 庭湖で風に阻まれて、滯泊して居る時に、張十一署に贈つたのである。十一は、例の排行。張署は前

にも見えて居た。この時、韓愈は、張署と途中で落ち合つて、やがて江陵に同行したが、舟を異にして居たのは、無論、各、その家族を引き具して居て、とても、一つの舟には乗り切れないからであらう。洞庭を経て江陵へ往くには、北行するので、それ故に北風に阻まれたのである。

【詩意】孟冬十月、陰氣が盛であつて、段段と寒くなり、北風は、かつて休む時がない。蒼茫として廣き洞庭湖を渡らむとするに際し、なかなか、行かれぬ處から、横手の岸に、君と共に雙舟を繋いで風待ちをして居る。折から、一天掻き曇つて、霧雨は、争うて泄れ、その上、風が強い爲に、波は怒つて、互に投げ付けるやうである。もとより、船着の場所でもないから、どちらを向いても、雞犬の聲は丸で聞こえず、船に貯へて居た糧食も盡きなむとして居るが、互に相談することも出来ない。わが舟と君の舟とは、相去ること歩を容れぬ程であるが、何分波が高くて、寄り付けぬから、山丘を隔てて居るやうであつて、清談をしたら、間を消すに足らうと思ふが、夢寐にだに接することが出来ないから仕方がない。引き具したる眷屬中の男女どもは、左右に喧しく、殊に食ふ物がないから、飢に泣いて、但だ啾啾たるのみである。これが少しでも都の方へ近く歸るのだから、まだしも善いが、さうでなければ、とても、羈愁の物淋しきに打勝つことは出来まいと思はれる。しかし、簇る雲の上には、白日が相變らず高く掛り、悠悠たる寒光を放つて居るに相違なく、しばしの間なりとも、この天氣を開霽して下さるならば、それ以上、我輩は何も望むところは無い。

【餘論】雲外の白日が天氣を開霽する様にと祈るは、即ち識者を追ひ拂つて、直接に天子の寵光を仰ぎたいといふ諷意があるものと見ても差支ない。朱竹垞は「偶然の境、道ひ來つて、亦た眼を醒ます、興趣、乃ち近くして相就くを得ざる上に在り」といつた。

李花贈張十一署 李花、張十一署に贈る

江陵城西二月尾 江陵城西、二月の尾、

花不見桃惟見李 花には桃を見ずして、惟だ李を見る。

風揉雨練雪羞比 風は揉み雨は練つて、雪も比するを羞づ、

波濤翻空杳無淡 波濤空に翻つて、杳として淡なし。

君知此處花何似 君知るや、此處花何にか似たる、

白花倒燭天夜明 白花、燭を倒にして、天夜明かなり。

羣雞驚鳴官吏起 羣雞驚鳴して、官吏起つ、

金烏海底初飛來 金烏、海底、初めて飛び來る。

【字解】「二月尾」二月の終り。

【一】花何似 花如何といふに同じ。

【二】金烏 前に見ゆ。太陽を指す。

羣雞の聲に「日は陽翰の宗、曠ん

朱輝 四射青霞開

朱輝、四射して、青霞開く、

迷魂亂眼看不得

魂を迷はし、眼を亂して、看れども得ず。

照耀萬樹繁如堆

萬樹を照耀して、繁きこと堆きが如し。

念昔少年著遊燕

念ふ昔、少年遊燕を著く、

對花豈省曾辭杯

花に對して、豈に省みむや、かつて杯を辭するを。

自從流落憂感集

流落してより、憂感集まり、

欲去未到先思廻

去らむと欲して未だ到らず、先づ廻らむことを思ふ。

祇今四十已如此

祇今四十、すでに此の如し、

後日更老誰論哉

後日更に老ゆ、誰か論せむや。

力攜一罇獨就醉

力めて、一罇を攜へて、獨り就いて醉はむとす、

不忍虛擲委黃埃

忍びず、虚擲して黄埃に委するに。

【題義】これは、元和元年二月、江陵に著到せし後、李花が盛に開いて居るのに對して感興を催し、從來同じ境涯に居る張署その人に贈つたのである。

で鳥を成す、鳥に三趾あり」といひ、隋の孟康の秋日の詩に金鳥升三趾、といひ、唐の太宗の詩に、紅輪不三暫、飛、鳥飛豈復停、とある。

【四】青霞、青霞に同じ。

【詩意】江陵城西の地、時しも二月の末で、花の咲き満つる頃であるが、この邊には桃の花は、無

くて、李花ばかりである。ここは揚子江の岸で、天氣も荒れ勝ちである處から、李花は、風に揉まれ、

雨に練られて、一層美しく、雪も比せられることを羞かしく思ふ位。それから、江中には、波濤空に

翻り、それが又李花と相映じ、杳として涯淡を辨せざる位。この花は、非常に結構だと思ふが、

君も定めてさう考へられるであらう。その白い花が、夜になると、無數の蠟燭を倒に立てた様で、

早や夜が明けたかと思はれる、雞もさう考へて居ると見えて、夜半に驚鳴し、それを聞いて、官吏

どもも目を醒ますことがある。兎角する内、本當に夜が明けて、太陽が海底から飛び上り、その朱輝

が散射すると、花光これに映じて、青雲の空まで、豁然と開いた様に見える。そこで、見る者は、目

を亂し、魂を迷はし、日色と花光とが判然と見分けの付かぬ位。はては、あらゆる木木が李の花に照

耀されて、繁きこと堆を成すかと訝かるばかりである。おもへば昔、少年の時、景色の好い處で遊宴

を恣にしたことがあつたが、花に對しては、酒杯を辭することなく、いつでも十分に痛飲した。し

かし、今は處處に流落した揚句、憂感が集まつて居るから、花見に出かけやうと思つても、まだ其場

所に到着せぬ先に、兎角氣が滅入り込んで歸りたく成つて仕舞ふ。わが年四十、すでに此の如き上は

後日愈よ老い朽ちることは、申すまでもない。されば、枉げて一樽を攜へ、花見の興を恣にして、

醉つて見たいと思ふので、もし此儘に棄てて置くと、折角の李花も、空しく黄埃に塗れて仕舞ふ、そ

れが如何にも心に忍びぬから、これから、一つ出かける積りである。
【餘論】 結末、その同行を促す意は、言外に含めてあるので、極めて餘情がある。この詩は、淺俗に近いが、李花に就いて、夜景朝景を刻劃分説した處は、さすがに、精彩ある筆致である。

杏花

杏花

居鄰北郭古寺空。

居鄰の北郭、古寺空し。

杏花兩株能白紅。

杏花、兩株、能く白紅。

曲江滿園不可到。

曲江滿園、到るべからず。

看此寧避雨與風。

此を見て、寧ろ避けむや、雨と風と。

二年流竄出嶺外。

二年流竄、嶺外に出で、

所見草木多異同。

見るところの草木、異同多し。

冬寒不嚴地恒泄。

冬寒嚴ならず、地、恒に泄る。

陽氣發亂無全功。

陽氣發亂して、全功なし。

【字解】 【一】曲江、司馬相如の京

二世賦に「曲江之隈州」とあつて、

その註に「曲江は、杜陵の西北五里

に在り」と記し、なほ太平寰宇記に

「曲江池は、漢の武帝の造るところ、

その水曲折、廣陵の江に似たるあり、

故に名づく」といひ、廣群の曲談錄

に「曲江は、開元中、疏鑿して勝境

となす、その南に紫雲樓、芙蓉苑あ

り、その西に杏園慈恩寺あり、花卉

環周、煙水明媚」といつて居る。

【二】二年流竄、韓愈は、貞元二十年

の春、陽山に至り、その翌年春、故

浮花浪葉鎮長有。

浮花浪葉、鎮しへに長く有り、

纔開還落瘴霧中。

纔に開いて還た落つ瘴霧の中。

山榴躑躅少意思。

山榴躑躅、意思少し、

照耀黃紫徒爲叢。

黃紫を照耀して、徒に叢を爲す。

鷓鴣鉤輦猿叫歇。

鷓鴣は鉤輦、猿は叫び歇む、

杳杳深谷攢青楓。

杳杳たる深谷、青楓を攢む。

豈如此樹一來翫。

豈に如かむや、此樹一たび來り翫ふには、

若在京國情何窮。

若し京國に在らば、情、何ぞ窮まらむ。

今日胡爲忽惆悵。

今日、胡すれぞ、忽ち惆悵、

萬片飄泊隨西東。

萬片飄泊して、西東に隨ふ。

明年更發應更好。

明年更に發すれば、應に更に好かるべし、

道人莫忘鄰家翁。

道人、忘るる莫れ、鄰家の翁。

に遇ひ、夏秋の頃、出發したから、

この詩は、永貞元年の春の作であら

う。【三】地恒泄、下句に接して陽

氣を泄らすといふ意。【四】浮花浪

葉、何でもない、詰まらぬ花。【五】

躑躅、つつじ、本草の註に「躑躅は

樹生、高さ三四尺、花、山石榴に似

たり、一名山石榴」とあり、蔣註に

「躑躅は花黄なり、羊食ふときは死

し、これを見れば、躑躅分散す、故に

名づく」とある。【六】鉤輦、嶺表

記に「鷓鴣、自ら呼んで鉤輦といふ」

とあり、李羣玉の詩に又聽鉤輦格磔

聲とある。【七】青楓、蔣註に「楓

は白楊に似、葉圓にして故、脂あつ

て香し、厚葉弱枝、善く揺く。霜後

に至り、葉丹にして愛すべし。故に

道人多く之を稱す」とある。【八】

道人、寺僧を謂ふ。

【題義】 蔣註には「前篇と同時に作る」とあるが、二年流竄出嶺外一の句があり、且つ嶺表の風土を細説せしを見れば、まだ江陵に行かぬ前、陽山縣に居た時分の作に相違ない。

【詩意】 わが居る處に鄰れる北郭に、無住になつた一つの荒寺があつて、そこには、二株の杏花がある。その一は花が白く、その一は赤く、まことに、見事に咲いて居る。その花を看て、杏花の名所たる長安の曲江なる満園の花を思ひ出すが、貶謫の身は、行つて見ること出来ざるが故に、今しも、風雨の時なるにも拘はらず、わざわざ此に花見に出かけた次第。自分は、二年以來、この嶺外の僻地に流竄せられ、その地の草木は、都で見えたものとは違つて居る。ここは、冬の寒氣が強くないから、地からは、絶えず陽氣が溢れ、その陽氣のみが發亂して居るから、陰陽相調和せず、従つて、草木に就いて、全功を見ることは出来ず、花は、四時、常に有るが、いづれも、浮花浪蕩と云つた様な詰まらぬもののみで、瘴霧の中に在つて、開いたかと思へば、すぐに散つて仕舞ふ。山榴とか、躑躅とか云ふものは、随分有るが、面白味が少なくて、意思太だ稀に、黄の色や紫の色が、ごたごたと相照耀して咲き出すに過ぎず、その間には、鷓鴣が鉤轉と鳴き、又猿が叫び歌むのみで、面白どころか、或る場合には、悲を添へるのである。そして、杳杳たる深谷には、青楓が攢まつて居るのみである。かかる有様で、この杏花の様なものは、外に無く、それで、ここに來て、花見をするのであるが、これが若し、京國に居つたことであつたならば、如何なる心持であらうか。今朝、ここに來て、忽ち惆悵し

たのは、如何なる故かといふと、一夜の内に、花が衰へて、落紅萬點、風のまにまに、西東に飛んで居るからである。杏花は、明年又美しく咲くが、自分は、ここに居るか如何か分からず、その時、寺の殘僧たちは、去年風雨をも、避けずして、毎日毎日、この花を見に來た鄰家の翁たる我輩の事を忘れずに、思ひ出して貰ひたい。

【餘論】 起四句は、複雑な事を極めて簡單に述べたのが手際で、尋常一様の寫法で無い處が面白い。豈如此樹一來觀の下に若在京國情何窮の二句を著けて一頓したのは、波瀾變化を極めた所以で、全篇が爲に振起する。それから、結二句は、あらゆるものを收束したので、非常に含蓄がある。要するに、この詩は、さばかりの傑作ではないが、割合に苦心して、はじめて篇を成したものと見える。

感春 四首

感春 四首

我所思兮在何所。 我が思ふところは、何の所にか在る。

情多地遐兮徧處。 情は多く、地は遠くして、處處に徧ね

處。

東西南北皆欲往。 東西南北、皆往かむと欲すれども、

【字解】 一、我所思兮在何所、
與衛の四愁の時に、我所思兮在太
山、欲三往從之、樂市觀といひ、我所
思兮在三桂林、欲三往從之、湘水深とい
ひ、我所思兮在三陽關、欲三往從之、
隨數長といひ、我所思兮在三雁門、
欲三往從之、雪紛紛といつてあるが、

千江隔兮萬山阻。 千江隔り、萬山阻つ。

春風吹園雜花開。 春風、園を吹いて、雜花開き、

朝日照屋百鳥語。 朝日、屋を照らして、百鳥語る。

三盃取醉不復論。 三盃醉を取るは、復た論せず、

一生長恨奈何許。 一生長恨、奈何せむや。

【題義】 蔣註に「元和元年春、江陵にて作る」とあつて、大方さうだらうと思はれる。感春とは、春

の賑はしき景色に對し、わが身の淋しさと對照して、自然感慨を催したのであらう。

【詩意】 わが心に思ひ思つて居る地は、何處かといふと、元來、われは心多く、その上、地は遠く、ど

こでも往きたい處だらけ、東西南北、風土の好い處ならば、みんな往きたいのであるが、その間には、

千江萬山があつて、これを隔てて居るから、往くことは、もとより容易ではない。折しも春で、江陵

城中でも時候が追追暖くなり、春風は長閑に我が庭園を吹き度り、くさぐさの花が爛漫と咲き出で、

朝日は、きらきらしく屋根を照らし、百千鳥の聲が賑はしく聞こえる。そこで、三杯を傾けて快き

酔を取るは、無論の事であるが、東西南北、どこへでも往きたくて往かれないといふ一生の長き恨は、

さて如何にしたら好いか、自分は、決して、こんな處の花だけを見て満足して居る積りではない。

【餘論】 この詩は、前半が巧妙である。

皇天平分成四時。 皇天、平分して四時を成す。

春氣漫誕最可悲。 春氣、漫誕として、最も悲むべし。

雜花妝林草蓋地。 雜花は林を妝ひ、草は地を蓋ふ。

白日座上傾天維。 白日座上に天維を傾く。

蜂喧鳥咽留不得。 蜂は喧しく鳥は咽んで、留むれども得ず。

紅萼萬片從風吹。 紅萼萬片、風の吹くに從かす。

豈如秋霜雖慘冽。 豈に秋霜の如くならむや、慘冽と雖も、

摧落老物誰惜之。 老物を摧落するも、誰か之を惜まむ。

爲此徑須沽酒飲。 此が爲に、徑に須らく酒を沽うて飲む

自外天地棄不疑。 自外、天地、棄てて疑はず。

近憐李杜無檢束。 近ごろ憐む、李杜が檢束なく、

まさしく、之に傲つたのであらう。

【三】 雜花、くさぐさの花。【四】 三

盃取醉、李白の詩に三盃過大道と

いひ、杜甫の詩に乘舟取醉非事

事といつて居る。【五】 奈何許

奈何せむやと訓すべし、許の字には

意味なし、古樂府に奈何許、石闕生

口中、新詩不得語とある。

【字解】 【一】 皇天平分成四時

宋玉の九辯に、皇天平分四時令とあ

る。【二】 漫誕、茫漠として落着の

無きこと。【三】 傾天維、西京賦に

張天維とあつて、その註に、維は綱な

りとおる。傾は傾側、風に動かされ

て傾く、つまり天の綱が傾いてゆら

ゆらする。蔣註には「天維とは、春光

照灼、維帯の張舉するが如きなり」と

ある。【四】 萬片從風吹、杜甫の詩に

一片花飛減却春、風飄三萬點、正愁

人とおる。【五】 摧落、西京賦に水

霜摧列とある。【六】 摧落老物、晉

書に「宣帝、かつて疾む、張皇后、往

いて省す。帝曰く、老物惜むべし。

又曰く、老物惜むに足らず」とあり、

なほ周禮に「蜡を祭り、以て老物を

爛漫長醉多文辭。爛漫として、長く酔うて文辭多きを。

屈原離騷二十五。屈原の離騷二十五、

不肯餽啜糟與醢。肯て糟と醢とを餽啜せず。

惜哉此子巧言語。惜いかな、此子、言語に巧なれども、

不到聖處寧非癡。聖處に到らず、寧ろ癡に非ざらむや。

幸逢堯舜明四目。幸に堯舜の四目を明かにするに逢ふ、

條理品彙皆得宜。品彙を條理して、皆宜しきを得たり。

平明出門暮歸舍。平明、門を出でて暮に舍に歸る、

酩酊馬上知爲誰。酩酊馬上、知る誰とか爲す。

時、酒を禁ず、而して、人、痛に之を飲む、故に酒と言ひ辱し、白酒を以て賢人と爲し、清酒を聖人とす」とある。ここでは兩意を兼ねて云ふ。「二」明四目、書經に「四目を明かにし、四聰を達す」とあつて、註に「四方の視聽なり」とある。「三」酩酊、山簡の事、前に歸三都賦の時、遇酒即酩酊、公知我是誰の處で解釋をして置いた。

一詩意、皇天は、一年を平等に割つて、春夏秋冬の四時となし、普通に、春は樂しく、秋は悲しいといふが、我輩の考では、春の氣の茫漠として、落著の無いのは、第一に悲しい様である。くさぐさ

の花が林を妝ひ、緑なる草が地に蓋うて、春の景色は、まことに綺麗であるが、座上の白日は、少しも之が爲に待つては呉れず、天の網は、早くも傾いて居るでは無いか。やがて、蜂は喧しく騒ぎ、鳥は咽び入つて鳴くけれども、行く春を引き留める術とはなく、萬片の紅夢は、風に任かせて吹かれて居る。かくの如く、花が散る位ならば、何も初から雑花を以て林を妝ひ、草を以て地を蓋はずとも善いので、なまじひに、一度よい景色を見せて置いて、忽ちそれを落すといふのは、まことに、しづ心なき仕草で、即ち春氣の漫誕たる所以である。秋霜は、非常に慘烈なものであるが、すでに老物になつたものを摧落するから、もとより、當り前の事で、誰しも之を惜むものは無い。秋は、必然的と見るべく、春の方が餘程悲しい譯である。かくの如く悲觀すると、酒を買つて飲み、それで慰めるより外はないので、酒以外なる天地間の事は、一切棄てて省みない。近世では、李白といひ、杜甫といふ様な人達が、まことに檢束なく、春が来れば、爛漫として長醉し、その結果を文辭に顯はしたので、その中心は、我輩と全く同一であると思へば、まことに、同情に堪へられぬ。それに引き換へて、むかし、屈原といふ人があつて、離騷等凡そ二十五篇を作つたが、漁父が、聖人は物に凝滞せずして物と推移するから、世の人が酔つて居れば、おのれも亦た醉ふべしといへるにも拘はらず、敢て糟と醢とを餽啜せず、衆人は皆酔うとも、我は獨り醒むといつて、遂に死んで仕舞つた。惜むべし、屈原は言語文章に巧妙であるが、まだ悟りが足らず、聖人の聖人たる所以に到達しなかつたのは、癡とい

ふ外なく、それにつけても、世に聖人と稱せらるる醇酒を飲まぬ手合は、丸で御話にも成らない。今しも、堯舜に比すべき明君が上に在り、四目を明かにし、四方の門を開いて、人才を登庸し、陰陽を燮理し、あらゆる種類の萬物を規則正しく整頓して、各その宜しきを得せしめるといふ清平の御代であるから、朝早く門を出て、日暮に家に歸るまでも飲み續けて、馬上に酩酊して、ひよろひよろとして遣つて来る、これが、まことにあり難い處で、何にせよ、今の時に方り、春の愁を消すには、酒を飲むに限るのである。

【餘論】朱竹垞は「意新に語奇に、すなはち、もとより生硬たり」といつて居る。

朝騎一馬出、喚就一牀臥。朝に一馬に騎して出で、喚に一牀に就いて臥す。

詩書漸欲拋、節行久已情。詩書漸く拋たむと欲す、節行久しく、已に情る。

冠欵感髮禿、語誤驚齒墮。冠欵つて髮の禿なるを感じ、語誤つて齒の墮つるに驚く。

孤負平生心、已矣知何奈。孤負す平生の心、已ぬぬかな、知る何奈せむ。

【字解】「一」喚、日暮。「二」節行、風節を賞ぶところの素行。「三」語誤、言葉を開き誤られる。

【詩意】朝に一馬に乗じて家を出で、さうして、前述の如く、一日酒を飲んで歩み廻り、暮に歸つ

て、おのが牀に就いて寝る。出る、飲む、寝ると、この三つより外に仕事もなく、若い時には、随分勉強もしたが、近ごろは、詩書を棄つばかりにし、風節を尚べる素行も、兎角怠り勝ちになつて来た。これも、年を取つたからのことで、帽子が緩く成つて傾くにつけて、頭髮の禿げたことを感じ、言葉をは人に聞き誤られるに因つて、齒が落ちて息の漏れることに驚いた。あはれ、詩書を窮めて、これを其身に行ひ、一塵の人物に成らうといふ平生の志は、さることながら、今日は、自然、これに孤負するに至り、已ぬぬかな、扱て如何したものかといふより外は無い始末である。

【餘論】朱竹垞が「これ側律、意態自ら妥順」といつた通り、形式上から云へば、仄韻の五言律であるが、それが生硬に流れず、極めて穩妥に出来て居るといふのである。

我恨不如江頭人。我、恨むらくは、江頭の人に如かず。

長網横江遮紫鱗。長網、江に横はつて、紫鱗を遮る。

獨宿荒陂射鳧。獨り荒陂に宿して、鳧を射り、

賣納租賦官不嗔。賣つて租賦を納れて、官嗔らず。

歸來歡笑對妻子。歸り來り、歡笑して妻子に對す。

【字解】「一」紫鱗、蜀都賦に鮮

以三紫鱗とあつて、即ち鮮魚の鱗。

【二】荒陂、荒れた陂。【三】鳧、

蒼足。史記に「楚の惠王、柱國昭陽

をして、兵に將として、齊を攻めし

む。陳軫、昭陽に對つて曰く、齊人、

その令人に、一厄の酒を遺るものあ

衣食自給寧差貧、衣食自ら給して、寧ろ貧を差ぢむや。

今者無端讀書史、今は、端なくも、書史を讀み、

智慧只足勞精神、智慧は、只だ精神を勞するに足れり。

畫蛇著足無處用、蛇を畫いて足を著け、用ふるに處なし。

兩鬢雪白趨埃塵、兩鬢雪白、埃塵に趨る。

乾愁漫解坐自累、乾愁、漫解して、坐ながら自ら累ふ。

與衆異趣誰相親、衆と趣を異にして誰か相親まむ。

數杯澆腸雖暫醉、數杯、腸に澆いで、暫く酔ふと雖も、

皎皎萬慮醒還新、皎皎萬慮、醒めて還た新なり。

百年未滿不得死、百年、未だ滿たず、死するを得ず。

且可勤買拋青春、且つ勤めて拋青春を買ふべし。

一境「便服」人と。近時、變調、傳奇を作り、嬰戲の事を記し、亦た酒あり、松陽春と名づく。乃ち知る、唐人、酒を名づくるに、多く春を以てするを。すなはち、拋青春、亦た必ず酒名ならむ」とある。

り、會人相謂つて曰く、數人、これを飲まば、以て獨りするに足らず、請ふ、地に畫いて蛇と爲すあらむ、蛇先づ成るものは之を飲まむ。一人曰く、吾が蛇、先づ成れりと。酒を擧げて起つて曰く、吾、能く之が足を爲るものと、足を爲るに及びて、後に成る。人、その酒を奪うて、之を飲む。或は曰く、蛇、もとより足なし、今、これが足を爲る、蛇に非ざるなり」とある、無用の業に喩ふ。【乾愁】いらぬ心配。【拋青春】壽註に蘇東坡の言を引いて「退之の詩、百年未滿不得死、且可勤買拋青春、國史補に云ふ、酒に鄰の富春、烏の若下春、榮陽の土窟春、富平の石凍春、劍南の燒春あり。杜子美亦た云ふ、聞道雲安麴米春、纔傾二

【詩意】わが輩は、すでに平生の志に孤負して、江頭の人にも及ばない。江頭の人、何をして居るかといへば、或は大きな網を江中に横へて、紫鱗を捕へ、或は寂しい隄の上に獨宿して、鳧や雁を射て取つて、生業となし、獲物を賣つて、その所得の中から、立派に租税を上納して、格別お上から御叱りを受けることもなく、家に歸れば、歎笑して妻子に對し、衣食自ら給して、貧乏を羞づることも無いやうである。我輩は、これを異にして、ゆくりなくも、書史を讀み習ひ、これに因つて、智慧を生じ、その智慧が兎角邪魔をして、徒に精神を勞することが多い。それで、自分の遣る仕事は、蛇を畫く時に足を添へて、酒を飲み損つたと同じく、まことに無駄な事はばかりで、兩鬢は雪の如く白く、塵埃の中に奔走して、官吏で候といつて居る。かくて、餘計な心配をして、漫然たる行動を取り、それが徒に自ら累をなし、衆人とは趣向を異にして居る處から、誰も親んで呉れるものもない。まことに不平やら淋しいやらで、數杯の酒を腸に澆いで、暫く酔うて之を忘れやうとするが、胸中に蟠まつて居る萬種の憂慮は、皎皎として明かなるところから、酔つて居る内は、どうやら收まつて居ても、醒めれば、又ぞろ新になつて、煩悶は愈々堪へられない。いつそ死んだら善いと思ふが、百年の命は、まだ残つて居て、天命未だ盡きざる間は、むやみに死ぬといふ譯にも行かず、仕方がないから、出来るだけ、拋青春の銘を打つたる酒でも買つて、しばしなりとも、憂を忘れる外はない。

【餘論】抛青春は、前述の如く、酒の名であるが、文字は、青春を抛つといふので、感春の詩には殊に適切である。この四首は、連作であるから、前首の終を承けて、後首の筆を起して居るので、これを詳説すると、第一首の終に「一生長恨奈何許」といつたから、第二首の初に「皇天平分成四時、春氣漫騰」に孤負平生心、已矣知何奈」といつたから、第三首の初に「朝騎一馬出」といつたので、たとへば、春蠶の絲を吐くが如く、斷えむと欲して遂に斷えず、まさしく其體を得たものである。

寒食日出遊

寒食の日、出でて遊ぶ

李花初發君始病、
我往看君花轉盛。
走馬城西惆悵歸、
不忍千株雪相映。
邇來又見桃與梨、
交開紅白如爭競。

李花初めて發して、君、始めて病む。
我往いて、君を看るとき、花轉た盛なり。
馬を城西に走らし、惆悵して歸る。
忍びず、千株、雪、相映するに。
邇來又た見る、桃と梨と、
交る紅白を開いて、争ひ競ふが如し。

可憐物色阻攜手、
空展霜縑吟九詠。
紛紛落盡泥與塵、
不共新妝比端正。
桐華最晚今已繁、
君不强起時難更。
關山遠別固其理、
寸步難見始知命。
憶昔與君同貶官、
夜渡洞庭看斗柄。
豈料生還得一處、
引袖拭淚悲且慶。
各言生死兩追隨、

可憐物色を攜手を阻み、
空しく霜縑を展べて、九詠を吟ず。
紛紛落ち盡す泥と塵と、
新妝を共にして、端正を比せず。
桐華最も晚けれども、今すでに繁し。
君強ひて起たずむば、時、更め難し。
關山遠く別るるは、固より其理。
寸歩見難く、始めて命を知る。
憶ふ昔、君と同じく官を貶せられ、
夜、洞庭を渡つて、斗柄を看る。
豈に料らむや生きて還り一處を得むと、
袖を引き、涙を拭うて、悲んで且つ慶ぶ。
各言ふ、生死兩ながら追隨せむと、

【字解】(一)物色 風物景色。
(二)霜縑 白色の絹、わり絹。古詩に「新人工織縑、故人工織素」とある。
(三)端正 文選劉楨の詩に「冰霜正慘慄、終歲常端正」とある。(四)桐華 禮記の月令に「季春の月、桐はじめて華さく」とある。(五)直置 唐代の俗語、煎じ詰めればといつた様な意味と思はれる。(六)南宮史

張翥は江陵に徙りし後、未だ歳ならずして、昌黎路過使路超の爲に、遷せられて列官となつたので、その事は、墓志に見えて居る。(七)鬼門 壽唐書地理志に「容州北流縣南三十里、兩石あつて相對す、その間、闊さ三十歩、俗、鬼門關と號す。謠に曰く、鬼門關、十八九不運」とある。(八)陸下 蔡邕の獨斷に「陸下と謂ふは、羣臣敢て天子を指斥せず、故に陸下に在るものを呼ぶ、卑に因つて尊に達するの義なり」とある。(九)廣空 杜甫の詩に「廣空恐三豎、留得一錢看」とある。(一〇)慨倒 後漢書郭林宗傳に「孟敏、太原に客たり、甌を荷うて地に墮つ、顧みずして去る」とある。(一一)一食日 禮記に「饋、日を併せて食ふあり」とある。(一二)宋玉庭邊 宋玉は屈原

直置心親無貌敬。直置、心親にして貌敬なし。

念君又署南荒吏。念ふ君が又南荒の吏に署せられ、

路指鬼門幽且覓。路、鬼門を指して、幽且つ覓かなり。

三公盡是知音人。三公盡く是れ知音の人、

曷不薦賢陛下聖。曷ぞ賢を陛下の聖に薦めざる。

囊空甌倒誰救之。囊は空しく甌は倒れて、誰か之を救はむ、

我今一食日還併。我今一食日還た併はず。

自然憂氣損天和。自然に憂氣、天和を損ず、

安得康強保天性。安んぞ得む、康強、天性を保つを。

斷鶴兩翅鳴何哀。鶴の兩翅を斷つ、鳴くこと何ぞ哀しき、

繫驥四足氣空橫。驥の四足を繫ぐ、氣空しく横ふ。

今朝寒食行野外。今朝寒食、野外を行けば、

綠楊匝岸蒲牙迸。綠楊岸を匝つて、蒲牙迸る。

宋玉庭邊不見人。宋玉庭邊、人を見ず、

輕浪參差魚動鏡。輕浪參差、魚、鏡を動かす。

自嗟孤賤足瑕疵。自ら嗟す、孤賤、瑕疵に足る、

特見放縱荷寬政。特に放縱せられて、寬政を荷ふ、

飲酒寧嫌觥底深。酒を飲んで寧ろ嫌はむや、觥底の深きを、

題詩尙倚筆鋒勁。詩を題して、尙ほ倚る筆鋒の勁きに。

明宵故欲相就醉。明宵故らに相就いて醉はむと欲す、

有月莫愁當火令。月あり、愁ふる莫れ火令に當るを。

註、季春將に火を出さむとするなり。司燔、行火の政令を掌る。鄭玄註、鄭子曰く、春、楡柳の火を取る。又、時には火令を施す。魏の武帝の明罰令に云ふ、聞く、太原、上黨、西河、雁門、冬至の後、百五日、皆火を起つて寒食す。朱云ふ、ここに言ふは、夜行月あり、故に寒食禁火の令に當るを憂へざるのみ」とある。

【題義】荆楚歲時記に「冬至を去ること一百五日、即ち疾風甚雨あり、これを寒食といふ」とあるが、蔣之翹は説をなして「荆楚歲時記に、冬至を去ること一百五日を以て寒食と爲す。これ仲春の末に在り。太原の舊俗、介子推が骸を焚きしを以て、その亡月に至つて、冬中ごとに輒ち一月寒食す。こ

の弟子、唐の余知古の清宮故事に「庚信、江陵に歸り、宋玉の故宅に居る。

宅は城北三里に在り、故に哀江南賦に云ふ、

「三」 參差、不揃の貌。は、宋玉の宅址といふものがあつたのである。

【四】 魚動鏡、鏡とは水平かにして鏡の如きを言ふ。

【五】 寧強、底深南史に「桑父、江總の席上に在り、曰く、深盃百罰と雖も、吾亦た醉せざるなり」とあり、杜甫の詩にも百罰深盃亦不醉とある。

【六】 筆鋒勁、龍照の擬古に兩腕窮三舌端、五車揮筆鋒」とある。

【七】 火令、將註に「洪慶善云ふ、この時、春末夏初、故に火令といふは非なり」と。蓋し、寒食、火を禁するを謂ふのみ。火令の

字、周禮に見ゆ。魏の武帝も、亦た寒食禁火の令あり。ここに言ふは、夜行月あり、故に寒食禁火の令に當るを憂へざるなり。蘇子瞻、かつて、李公擇の爲に此詩を書し、燈火冷に作る、直に是れ杜撰、據るところあるに非ず」とあるが、何義門は、これを論じて「按するに、燈火冷も亦た禁火の意、兩本、字同じからず、故、もとより未だ誤讀ならざるなり」といつて居る。それから顧註には「周禮、司烜、仲春火禁を國中に禁す。

れ仲冬に在り、二説、自ら異なり。退之、寒食と稱するは、清明の前に在り。すなはち是れ、冬至を去る一百五日、相傳へて子推の亡月といふは、誤なり。翹、按するに、周官司烜氏、仲春に木鐸を以て火を狗へて國中に禁ず、火を禁ずるは寒食、燧を鑽るは乃ち火を出すなり。これ正に龍忌の禁を謂ふ。蓋し、龍星は木位、春は木行、心は大火、火盛なり、故に禁ず、周制に在つては、仲春一月皆然り、又獨り冬至を去る一百五日のみに非ざるのみといつて居る。して見ると、寒食は、元と周制に在るので、一個月の間であつたが、後には、唯だ一日になつたと見える。そして、介子推の爲にする寒食は、仲冬の頃で、太原の地方に限られて居るのであらう。これは、解説が甚だ簡明である。それから、この詩は、韓愈の自註に「張十一院長、病中花を憶ふの九篇を示さる。寒食の日出でて遊び、夜歸る、因つて、以て投贈す」とある。張十一は例の張署、院長は、國史補に「外郎遺補、相呼んで院長と爲す」とある。又蔣註に「張十一は即ち功曹署。公、張と同じく御史より官を貶せられ、又同じく江陵の掾となる。公は法曹參軍、張は功曹參軍、元和元年の作なり」とある。すると、この詩は元和二年三月、張署は折悪しく病氣で、花見に行くことが出来ないからと云つて、病中憶花の詩を九首作つて、韓愈に寄せた。そして、韓愈は、寒食の日、花見に出かけ、夜に成つて歸宅し、その詩を見たるに因つて、七古一篇を作り、そして、張署に答へたのである。

【詩意】李花の初めて發する頃になつて、君は始めて病氣に罹られた。予は、時時君の病氣を見舞に

出かけるが、その途中で、眼に觸れたのは、李花が轉た盛なることであつた。花は盛なれども、人は病氣であるから、一處に花見をすることも出来ず、自然、感慨に堪へぬ次第である。かくて、馬を城西に走らして、花見をしたが、徒に惆悵して歸つて來た。それは他の故あるに非ず、千株雪の如く、李花は咲き出でて相映じて居るが、君が病氣である處から、何分獨りでは之を見るに忍びぬからである。その後、春の景色は、益々賑はしく、桃が咲き、梨が咲き、紅白交り開いて、互に其色を競ふが如くであるが、手を攜へて、これを見る事が出来ないのは、まことに残念である。兎角する内に、君は病中憶花といふ題で、九首の詩を作つたといつて、白絹に書いたのを、わざわざ寄せられたから、その絹を展べて、その詩を吟じて見た。つれな花は、君の全癒を待たず、皆紛紛として地に落ち、いつしか泥と塵とに化して仕舞つたので、花は、人の如く、新妝を凝らして、その容光を長く保つことが出来ながら、まことに、已むを得ない。中でも一番遅いといふ桐までが、今は花繁き時節となつたので、どうか無理にも起きて貰ひたい、この後、一年の間は、再び花を見ることが出来ぬからといつて、頻りに心に念じて居たが、君は、まだ全癒しない。關山を隔てて、遠く別れて居るのならば、顔を見ることが稀なもの、もとより、道理至極であるが、現在寸歩の間に居て、顔を見ることが出来ないのは、矢張、運命といふより外はない。むかし、君と共に左遷されたことがあつて、南方へ同行する途中、夜、洞庭湖を渡り、北斗の柄の天上に曲つて居るのを見て、舟の進路を見定めた。その時、生

きて還ることは覺束ないと思つて居たのに、料らずも、無事で北歸することになり、君と一處に江陵まで来たので、袖を引き、涙を拭うて、悲喜交々集るばかり、縁あればこそ、かくの如くなつたので、今後は生死兩つながら追隨しやうと語り合つた位。元來、君と予との交際は、煎じ詰めれば、形貌の上に於て、互に相敬するのではなく、心から契合して親むので、もとより、尋常一様の泛交ではない。然るに、つい此頃、君は憲管の判官となつて、復た南荒に赴くといふので、路すがら過ぎ行く鬼門關は、幽にして且つ負かである。今しも、天子を輔佐して居る三公の方は、我我に取つて、知音の人であるにも拘はらず、かういふ事になつたのを見ると、なせ賢者を神聖なる陛下に推薦せぬか、甚だ怪しからぬ次第だといひたくなる。殊に刻下の境涯、財布も空になつて、米を買ふべき錢もなく、米櫃は、倒にしてふるつた儘であるのに、この飢渴を誰が救つて呉れるのか。我輩も、丁度君と同じ様に、一日に一食位で済まし、甚しきに至ると、二日目に一度飯を食ふに過ぎぬことさへある。そこで、自然の勢、憂氣が天然の調和を損じて、無事に丈夫では天性を保つことも出来なくなるので、君が病氣に惱んで居られるのも、尤も至極な事である。鶴は、優れた鳥であるが、兩の翼を断てば、悲しい聲を出して鳴くだけであるし、驥は、千里を一飛びにする材能はあるが、四つの足を縛つて仕舞へば、天地を横絶する氣だけ残つて居ても、本當に馳せることは出来ない。今日は、寒食であるから、君が一處に行くことが出来ずとも、せめては、春の景色を眺め暮らさうといふので、野外に出て見た處が、

柳は縁に煙つて岸を匝り、新蒲は芽を抽いて、勢よく水中から進つて居る。但し、宋玉の宅址には、人跡絶え、水中には、輕浪參差として起り、魚が鏡の如き水面を動かして、寂寞を破るばかりであつた。この身は、孤賤にして、從來瑕疵だらけ、とても、完全な人物でないのは、まことに嘆息すべきことであつて、その爲に、貶謫の憂き目を見たが、幸ひ今は放免せられて、寬典を荷ひ、この江陵に量移されたので、わが運命の猶ほ非なるは、仕方がないこととし、酒を呷り、詩を作るより外、仕様がなない。されば、酒を飲む時には、杯の底の深さを嫌はず、詩を題しては、唯だ筆鋒の鋭さを頼みとして居る。君は、病氣で出て來られなければ、仕方がないこととし、明晩は、こちらから押しかけて往つて、君と一醉を共にしやうと思ふ。勿論、寒食の候で、火を點けることは禁せられて居るが、幸ひ月夜であつて、來往ともに少しも困まることは無い。是非參上するから、その積りで、用意をして居て貰ひたい。

【餘論】この詩は、事柄が卑近であると同時に、聊か煩冗に失した傾向はあるが、尋常應酬の事を、かほどまでに想化したのは、流石に韓退之の偉らい處である。朱竹垞は「興致、花に本づいて來り、微に藻潤を加ふ、營構、猶ほ杜法あり」といつて居る。

憶昨行和張十一

憶昨行、張十一に和す

憶昨夾鍾之呂初

吹灰

上公禮罷元侯廻

車載牲牢饗昇酒

竝召賓客延鄒枚

腰金首翠光照耀

絲竹迴發清以哀

青天白日花草麗

玉璽屢舉傾金疊

張君名聲座所屬

起舞先醉長松摧

宿醒未解舊店作

深室靜臥聞風雷

憶ふ昨、夾鍾の呂、初めて灰を吹きし

上公禮罷んで、元侯廻る。

車には牲牢を載せ、饗には酒を昇き、

賓客を並び召して、鄒枚を延く。

腰金首翠、光照耀。

絲竹廻に發して、清以て哀。

青天白日、花草麗し。

玉璽屢ば舉げて、金疊を傾く。

張君の名聲、座の屬するところ。

起つて舞うて、先づ酔ひ、長松摧く。

宿醒未だ解けず、舊店作る。

深室に靜臥して、風雷を聞く。

【字解】「一」夾鍾之呂初吹灰

禮記に「仲春の月、律、夾鍾に中る、

元日を擲んで、民に社を命ず」とい

ひ、後漢書律歷志に「候氣の法、室

を爲る三重、綆を布き、木を纏して、

案と爲し、内は庫く、外は高く、律

を其上に加へ、覆竿の灰を以て、そ

の内端を仰へ、歴を按じて之を候し、

氣至るものは灰去る」といひ、又漢

書律歷志に「夾鍾とは、陰、大族を

夾助し、四方の氣を宜べて、種物を

由すと言ふなり、卯に位し、二月に

在り」といつて居る。仲春の月は、

律に於て夾鍾に中り、そして、管よ

り灰を吹くのを見て、其氣の來りし

を知るといふ義。【二】上公禮罷元

侯禮 方崧卿の説に「上は社と作す、

荆師變均、社を罷めて客を享するを

謂ふなり」といひ、朱子は「方説、

是なり。但し上を以て社と作すは、

未だ然らず。左傳五行の官、封じて

上公と爲し、祀りて貴神と爲す、そ

の土正を后土といふ、家に在つては

中霱を祀り、野に在つては社と爲す、

故に、社註、幣を社に用ふといふ。以

て上公に請へば、上公は即ち社神な

り、況んや、この句、内、又自ら元侯

を以て對と爲すをや」とある。上公

は、社に祭つた神で、この地の元侯

たる節度使裴均が其處の社の祭をし

たといふ義。【三】鄒枚 鄒陽と枚

乘、ともに梁の孝王の客で、詞賦を以

て稱せられて居た。謝惠連の雪賦に

「召鄒生、延枚叟」とある。【四】腰

金首翠 翠は翡翠の羽を飾つた帽子。

洛神賦に「帶金翠之首飾」とある。

【五】玉璽 璽は酒を酌む器、即ち饒

子、劉孝標の廣絶交論に「玉璽之餘

自期殞命在春序

屈指數日憐嬰孩

危辭苦語感我耳

淚落不揜何濯濯

念昔從君渡湘水

大帆夜劃窮高桅

陽山鳥路出臨武

驛馬拒地驅頻墮

踐蛇茹蠱不擇死

忽有飛詔從天來

任文未揃崖州熾

雖得赦宥恒愁猜

近者三姦悉破碎

自ら期す、命を殞すは春序に在るを。

指を屈し、日を數へて、嬰孩を憐む。

危辭苦語、我が耳に感ず。

淚落ちて揜はず、何ぞ濯濯。

念ふ昔、君に從つて湘水を渡る。

大帆、夜、劃して、高桅を窮む。

陽山の鳥路、臨武に出で、

驛馬地を拒んで、驅つて頻りに墮る。

蛇を踐み、蠱を茹うて、死を擇ばず。

忽ち飛詔の天より來るあり。

任文、未だ揃られず、崖州熾なり。

赦宥を得たりと雖も、恒に愁猜。

近ごろ、三姦悉く破碎。

羽窟無底幽黃能。

羽窟、底なく、黃能を幽す。

眼中了了見鄉國。

眼中、了了として、郷國を見る。

知有歸日眉方開。

歸日あるを知つて、眉、方に開く。

今君繼署天涯吏。

今、君、繼ひ天涯の吏に署せらるるも、

投檄北去何難哉。

檄を投じて、北に去る、何ぞ難からむ。

無妄之憂勿藥喜。

無妄の憂は、藥することなくして喜あり。

一善自足禳千災。

一善、自ら千災を禳ふに足れり。

頭輕目朗肌骨健。

頭は軽く、目は朗かにして、肌骨健なり。

古劍新剛磨塵埃。

古劍新に剛つて、塵埃を磨す。

殃銷禍散百福併。

殃は銷え、禍は散じて、百福併す。

從此直至耆與鯨。

これより直に、耆と鯨とに至る。

嵩山東頭伊洛岸。

嵩山の東頭、伊洛の岸、

勝事不假須穿裁。

勝事、穿裁を須ふるを假らず。

君當先行我待滿。

君は當に先行すべく、我は滿を待つ。

沮溺可繼窮年推。

沮溺、繼ぐべし、年を窮めて推せむ。

【一】拒地 地を歩くことを厭がる。【二】驅頰 頰に我馬應頰とある。如何に驅つても、つづげさまに倒れる。【三】任文未補 崖州也。既文に「捕は滅なり」とあり、史記索隱に「捕は分割せらるるを謂ふなり」とある。崖州は、後に章執誼の貶せられた處。この句の意は、その頃、王任・王叔文の二人は、未だ朝廷から退けられず、章執誼も勢力が盛んであつたといふ意。唐書に「王叔文は、崖州山陰の人、崖州司戸に貶せられ、明年、これを誅す。王任は、杭州の人、叔文と同じく、開州司馬に貶せらる。章執誼は、京兆の人、叔文と交甚だ密、尚書左丞同平章事に累遷し、憲宗、内禪を受けしとき、崖州司戸に貶せられ、貶所に卒す」とある。【四】三姦 王任・王叔文・章執誼を併稱す。【五】羽窟無底幽黃能 左傳に「蘇、羽山に墮せられ、その神、化して黃龍となり、以て羽淵に入る」とある。熊は、此の龍字かと思はれる。國語には現に黃能に作つてある。龍の字に兩音あつて、奴來切のときは三足の龍、奴登切のときは熊の屬。足、龍に似たるものといふこと、ここでは、羽淵とあるから、龍の方が適切である。【六】天運吏 前の寒食詩に「念君文譽南克吏」とあるに同じ。【七】無妄之憂 易に天妄之疾勿藥有喜とある。【八】耆與鯨 詩經の行葦に「黃耆台背とあつて、鄭註に「台の言は餘なり、人老ゆれば背に餘文あり」と見ゆ。耆は、耆の曲ること。鯨は、皮膚が荒れて、皸肌になること。【九】伊洛 二水の名、韓愈の家は河南に在つて、嵩山並に伊洛二水は、皆その附近であつた。【十】穿裁 證讀立をする。【十一】待滿 任期の滿つるを待つ。【十二】沮溺 長沮桀溺の二人、耦耕して居たことが、論語に見えて居る。【十三】推 周の時代、新田の禮を行ひ、天子、自ら耒耜を載せ、三公九卿諸侯大夫を帥めて田を耕すとき、天子は三推、三公は五推、諸侯は九推といふ儀式がある。推は、耒を推し入れることであるが、ここでは、耕すといふ義に用ひたのである。

【題義】憶昨行は、過去の事を憶うて歌つたので、張十一は例の張署。これは、前詩と同時の作であつて、張署が邕管の判官に任じ、再び南方に赴任することに成つたに就いて、これから、都に歸る時が得

【六】金龜 銅製の酒壺。

詩經に我姑酌之彼金龜とある。【七】

座所屬 座上の人が屬目する。【八】

長松推 世説に「山公曰く、昔叔夜

の人と爲りや、巖巖として孤松の獨

り立つが如く、その醉ふや、俄に玉

山の將に崩れむとするが如し」とあ

る。普通に醉つて舞ふことを玉山の

將に崩れむとするが如しといふが、

ここでは、松の方を取り、そして、推

の字を加へたので、まことに新警で

ある。【九】宿醒 二日酔、醒は酒

病。【十】舊疾 左傳の杜預註に「疾

は痼疾なり」とある。【十一】灌漑

集韻に「灌は雪霜凍菜の貌」とある。

但し、文選陸機の祭魏武帝文に「灌は

約二而灌焉とあつて、その註に「灌は

滲沲垂るる貌」とある。【十二】夜對

則是張り上げる。【十三】感武 韓愈

られるだらうといつて、之を慰めたのである。前詩は、専ら張君が病氣であつたことを反覆して言つたが、この詩も、矢張、病氣に就いて言ひ、その病氣に罹つた原因に溯つて寫し出したのである。【詩意】本年二月、律、夾鍾に中つて、蘆管の灰の吹き出す頃、わが上官であつて、この地の元侯たる節度使の裴均に於かれては、社の祭を爲し、滯りなく、其儀を舉つて、やがて引き返して來られたが、車には、犧牲に供した太牢の肉を山の如く積み、壘には、一ばい酒を満たして、それを擔がせて來て、やがて、お下がり頂戴の宴會を催し、大に賓客を招集し、その中には、古しへの鄒陽・枚乘に比すべき文學の士も、随分多く居た。その賓客どもは、御祭の歸りであるから、腰には金の飾を帯び、頭には翡翠の羽を飾つた禮帽を戴き、光彩燦爛として照り耀き、そして、絲竹興を添へ、その聲は、清く且つ哀れ深く聞こえた。時しも、春の半で、青天白日、天氣が善かつたから、花草うるはしく咲き亂れ、まことに賑はしき景色。そこで屢ば銚子を舉げて、金盞を傾け盡すに至つた。その時、張君を召し出されたが、君の名聲は、座客の屬目するところで、よつてたかつて酒を勸めたから、やがて大醉し、興に乗じて舞ひ出されたが、たとへば、巖巖たる長松の摧け倒るるが如くであつた。處が、宿醒のまだ解けやらぬ内に、持病が再發し、それから、どつと床に就き、深室の中に靜臥して、苦んで呻く聲は、風雷を聞くが如くである。かくて、寒熱の往來に苦しんで、容易に直りさうもない處から、張君は、この春の内に死んで仕舞ふものと覺悟し、春盡くると共に命も盡きるといふので、指

を屈して日を數へ、それにつけても、幼兒どもは、如何にも可哀相だといふので、これのみ、心にかけて居た。かくて、我輩が病牀を訪うた時にも、危辭苦語して、遺言された位で、涙をはらはらと流して、掩ひ兼ねる有様であつた。さき頃、君と一處に湘江を渡つた時には、帆柱の極めて高いのに眞帆を張り上げて、夜、舟を進めた。その後、予は陽山に、君は臨武に居り、兩處相去ること、さまで遠からざれども、中間には、險阻な山があつて、鳥の通ふ路しかなかく、そこを彼方此方と往來して居たが、何分にも峻しい處から、馬も地を踏むことを厭がつて、いくら驅り立てても、進まなく成るので、困まり入つて仕舞ひ、平生は、蛇を踐み、蠱といふ蟲を食うて、死を顧みずして居た處が、その内に、ふと詔敕が九重の天より下つて、我我の罪を赦されて、江陵に量移することに成つた。その時には、王任・王叔文の手合は、まだ流されなかつたし、韋執誼も、威權が盛であつたから、折角、御赦免に成つたとはいへ、平生肌が合はぬ故に、この先どうなることか、心中毎に愁に堪へなかつた。兎角する内に、この三森は、近ごろ、悉く破砕されて死んで仕舞ひ、恰も鱗が殖せられて、深淵の中に大龜と爲つて住んで居ると同じである。そこで、我我も、やつと安堵することが出来、眼中に、了了として、郷國が見える様な心持で、北に歸る日も知れて居る處から、初めて眉を開き、そして、君の病氣も、けろりと全癒して仕舞つた。今、君は、天涯の吏に署せられて、更に南方に赴任することに成つて居るが、その身が健全でありさへすれば、辭表を出して、北に歸ることは、何の造作も無いことで

ある。君の全瘞は、取りも直さず、三森の死に在るので、易に謂はゆる、無妄の疾は薬せずとも直るといふものである。その喜に依つて、一善自ら千災を禳ふといふやうに、はては、頭も軽くなり、目は朗かに、はつきりとなり、肌膚筋骨も強健になつたので、たとへば、古い剣を新に研ぎ直し、塵埃を拭ひ去つて、光芒を發したと一般、福殃は、すでに消散して、百福併せ至り、今後は、背が曲り、骸肌になるまでも、病氣などには侵されることは有るまいと、我輩は、非常に頼母しく思ふ。我輩の故郷たる洛陽は、嵩山の東の端で、伊洛二水の岸に當り、もとより風景の好い處で、物外の勝事は、いろいろ、詮議立てをするにも及ばず、先刻すでに御承知の事であらう。いづれ、君は、先に行かれるであらうが、予も亦た任期の満つるを待つて、遠からず、君の跡を追ふことに致さう。歸田の後、官海の事など、一切抛棄して、古しへの長沮・桀溺の如く、年中耦耕して、この生を送りたいと思ふのである。

【餘論】朱竹垞は、全體の上から、この詩を評して「風致は寒食遊に及ばざれども、稍や永貞に勝るといひ、初の飲酒の段を評しては「飲酒に就いて敘し來る、詩家の趣味、自ら合す」といひ、腰金首翠光照耀の四句は、最も精彩の富んで居る處で、これを評しては「これ排縛を避くるに意あり、未だ精腴ならずと雖も、却つて亦た粗硬ならず」といひ、念昔從君渡湘水の數句を評しては「敘し得て、婉曲雅致あり、惟だ遠く永貞に勝るのみならず、亦た八月十五夜に勝れり」といひ、嵩山東頭伊

洛岸の四句を評しては「敘し得て亦た朗快」といひ、流石に的確である。但し、諸家が此詩に就いて、格別取り出でて彼此言はず、全く之を閒却して居るのは、聊か不思議である。

韓昌黎集卷四

古詩

劉生詩

劉生の詩

生名師命其姓劉。生、名は師命、その姓は劉、
 自少軒輊非常儔。少より、軒輊、常儔に非ず。〔て遠遊、
 棄家如遺來遠遊。家を棄ること、遺れたるが如く、來つ、
 東走梁宋暨揚州。東は梁宋に走り、揚州に暨ぶ。
 遂凌大江極東陬。遂に大江を凌ぎ、東陬を極む。
 洪濤春天禹穴幽。洪濤、天を舂いて、禹穴幽なり。
 越女一笑三年留。越女、一笑、三年留まる。
 南逾橫嶺入炎州。南は横嶺を逾えて、炎州に入り、

古詩 劉生詩

【字解】「」軒輊 詩經に莠改

既安、如輊如軒とあり、又後漢書馬援傳に「前に居れば、人をして輊せしむる能はず、後に居れば、人をして軒せしむる能はず」とある。軒は、車の尻尾の方の上がつて居ること、輊は、車の前の方の上がつて居ること。そこで、軒輊は、抑揚とか、低昂とか、又甲乙とか、上下とかといふ意味に用ふるのが、普通であるが、このは、稍々異にして、人が下になるときには自分が上、人が上になるときには自分が下といふ様に、故らに人と違

青鯨高磨波山浮。青鯨、高く磨して、波山浮ぶ。

怪魅炫曜堆蛟虬。怪魅炫曜して、蛟虬を堆し、

山豨譟譟猩猩游。山豨譟譟して、猩猩游ぶ。

毒氣燂體黃膏流。毒氣、體を燂して、黃膏流る。

問胡不歸良有由。問ふ胡を歸らざる、良に由あり。

美酒傾水肉肥牛。美酒、水を傾けて、肥牛を肉にす。

妖歌慢舞爛不收。妖歌慢舞、爛として收まらず。

倒心廻腸爲青眸。心を倒にし、腸を廻して、青眸の爲にす。

千金邀顧不可酬。千金顧るを邀ふれども、酬ゆべからず。

乃獨遇之盡綢繆。乃ち獨り之に遇うて、綢繆を盡し、

瞥然一餉成十秋。瞥然一餉、十秋を成す。

昔鬚未生今白頭。昔は鬚未だ生せず、今は白頭。

五管徧歷無賢侯。五管、徧ねく歴るも、賢侯なし。

つた鑑舞をする。こと。【三】 梁宋

廣書地理志に「宋州臨陽郡は、河南道

に屬す、本と梁郡、天寶元年、名を更

ふ」とあり、杜市の詩にも昔我遊梁

中、惟樂學王都とある。【二】 揚州

書の禹貢に「淮海惟揚州」とあつ

て、孔安國の註に「北は淮に據り、南

は海に距る」とある。【三】 東原

東原に同じ、即ち鮪。【四】 禹穴

前にも見えて居た。史記の太史公自

序に「會稽に上り、禹穴を探る」とあ

り、張晏の解に「禹巡狩して、會稽

に至つて崩す、因つて葬る、上に孔穴

あり、民間云ふ、禹、この穴に入る」と

ある。【五】 鮪女 杜市の遠遊に鮪

女天下白とある。【六】 炎州 前に

見ゆ、南方炎熱の地。【七】 青鯨

舊註に「鯨、或は鯨に作る、もとより

非。即ち青の鯨、亦た未だ詳ならず。

廻望萬里還家羞。廻望萬里、家に還ることを羞づ。

陽山窮邑惟猿猴。陽山の窮邑、惟だ猿猴。

手持釣竿遠相投。手に釣竿を持って、遠く相投す。

我爲羅列陳前修。我、爲に羅列して、前修を陳ね、

芟蒿斬蓬利鋤耨。蒿を芟り、蓬を斬つて、鋤耨を利くす。

天星廻環數纒周。天星廻環、數、わづかに周る。

文學穰穰困倉稠。文學、穰穰として、困倉稠し。

車輕御良馬力優。車輕く、御良くして、馬力優なり。勿れ。

咄哉識路行勿休。咄なる哉、路を識らば、行いて休むこと

往取將相酬恩讐。往いて、將相を取つて恩讐に酬いよ。

【一】 廻望 漢書司馬遷傳に「腸、一

日にして九廻」とあり。【二】 青鯨 晉書阮籍傳に「能く青白眼を爲す」とあり、文選舞賦に「青鯨」

千金邀顧 李白の詩に美人一笑千金とあり、又相知兩相得、一顧輕千金とある。【三】 瞥然一餉成十秋 楚辭に日晷曾兮西沒と

あり、詩經に一日不見如三秋分とある。【四】 管は、説文に「目を過ぐるなり」とある。【五】 五管 舊唐書地理志に「嶺南道五管、廣

州中都督府、桂州下都督府、邕州下都督府、容州下都督府、安南都督府とある。【六】 前修 離騷に「昔者三代之所

題とあつて、王逸の註に「前修は、前世道徳を修習するの人を謂ふ」とある。【二】鮑暉 暉は鮑の稱。【三】天星風環 盧記に「星、天に同り、數、將に幾んど終らむとす」とある。【三】續漢 史記に「五穀蕃熟、穰穰家に滿つ」とある。【三】圖書 圖は米倉。【三】咄哉 漢書東方朔傳に「朔、これを笑うて曰く咄」とあつて、顏師古の註に「咄は叱咄の聲なり」とある。

【題義】蔣註に「貞元二十一年、劉師命、公を陽山に訪ふとき作る。按ずるに劉生、越に在る、意ふに、必ず眷するところあらむ。故に詩に云ふ、越女一笑三年留と。又云ふ、問胡不歸良有由と。繼ぐに妖歌慢舞を以てす。すなはち知る、生の遇ふところ、皆不羈なることを。故に終篇に、咄哉識路行勿レ休、往取三將相三酬三恩三誓三といふ。蓋し、且つ諷し且つ勸むるの意あり。又集中、生の爲にせる梨花の二詩あり、豈に此より前に作れるか」とある。すると、劉生は、才を負ふと共に、志を得ざるより、放蕩に身を持ち崩して居たものらしい。それが陽山縣を過ぎて、韓退之の門人に成つたから、韓退之は、今後、道を重んじて修學せよといつて、懇に之を指導して遣つたのが、即ち此詩である。

【詩意】生は名を師命といひ、姓を劉といふもので、少時より、兎角、世間の人とは一風變つた事をする男、もとより並大抵のものではない。おのが家などは打遣つた儘、さながら忘れたるが如く、遠く天下の名山大川に遊び、東は梁宋地方より、揚州に及び、それから、揚子江を渡つて、東甌、即ち古しへの越地までも極めた。越の地は、海に接して居るから、洪濤天を吞いて起り、そして、會稽には禹を葬つた穴があるが、その幽奥なる處まで、一一探検して仕舞つた。越は、古しへ、西施の出た處で、

今でも美人が多い、劉生は、その美人の一笑の爲に、三年も其處に滞留して居た。次に南に向つて、横嶺を踰え、南方炎熱の地と稱する嶺南に遊んだが、海には、大きな鯨が山の如く、波に乗つて浮んで居るし、陸には、虬蛟などが羣をなし、山には山塗といふものが喧しく騒いで居るし、又猩猩などが遊び廻つて居る。この邊は、熱帯に近い處であるから、毒氣が身體を焦がして、黄色な脂汗が流れる。劉生は、何故に、そんな處にばかり遊んで居て、家に歸らぬかといふと、それも理由のあることとて、美酒は水を傾けるやうに飲めるし、肥牛の炙は、非常に結構で、酒や肴は、すでに十分なる上に、妖歌慢舞をする女どもが居て、爛として收められぬ位。劉生の心を傾倒せしめ、腸を九廻せしめたのは、實に其女の青眸である。尤も、廣東地方の女は、見識ぶつて居て、千金を積んで、その一顧を迎へやうとしても、なかなか容易に靡くものではないのに、劉生のみは、これに遇つて、細繆の情を盡し、大に持てた處から、その儘、南海に流連し、一寸ひと時だといつて居る内に、早くも、十年を経過して仕舞つた。むかし、劉生が家を出た時には、口ばたに鬚も無かつたが、今は白髪頭に成つて仕舞ひ、これでは成らぬ、この邊に己の才を愛して用ひて呉れるやうな人は無からうかといふので、五管の地方を残りなく歴訪したが、誰一人、劉生を用ふるやうな賢太守は無く、萬里の彼方を廻望して、この儘、のそのそと家に還るのも、まことに面目ないことと思つた。その時、予は、陽山の縣令であつたが、陽山は極極の僻邑で、丸で猿の様な人しか居らぬ。そこへ劉生が釣竿を手に

して、遠く來り投じた故に、予は及ばずながら、前世道徳を修習した人たちの事を竝べ立てて、色説き聞かせ、今まで遣つて居た事は宜しくないから、蓬蒿を刈り取つて、鋤鋤を働かすと同じ様に、この悪い舊慣習を棄てて、眞正の教育を受けねばならぬ。かくて天星循環し、一年も立つたならば、劉生の文學は、次第に進んで、滿腹の文章は、米の稔穰として困倉に滿つるやうに成らう。すでに車が軽く、御者も上手で、これを挽く馬も力が優れて居たならば、何處にも、缺點がないので、天下の大道を疾驅することも、容易である。それも、路を識らなければ困まるが、教育を受けて、路を識つて居る上は猶更の事である。劉生たるもの、修養を積んで、かういふ様になり、そして、郡に上り、一舉して將相の位を取り、恩讎分明、これに報いたならば、まことに傑然たる大丈夫の所爲で、この位、愉快な事は無からう。マア少しの間、辛抱して、學問にいそしんだら善からうと思ふ。

【餘論】この詩は、柏梁體で、毎句に押韻し、且つ處處に單句が交つて居るから、普通の詩の様に、二句宛に切つても、意味の通せぬ處があるので、三句もしくは五句續けて讀まねばならぬ。朱竹垞は「柏梁體の句、各一事、これは、自ら是れ燕歌行の體。然れども、この體、宜しく長かるべからず、又須らく練り得て精なるべし。この作、遑緊味あり、意態尙ほ未だ甚だ濃かならざるを恨む」といひ、何義門は、結末を評して「その人に因つて之を言ふと雖も、然れども、公の生平、恩讎の二

字に於て、耿耿忘れず、亦た心病の聲、詩に形はるるものなり。魯頌の克く徳心を廣くするを尙ぶ所以なる哉」といつて居る。

鄭羣贈簞

鄭羣、簞を贈る

斬州笛竹天下知

斬州の笛竹、天下知る。

鄭君所寶尤瓌奇

鄭君、寶とするところ、尤も瓌奇。

攜來當晝不得臥

攜へ來り、晝に當つて、臥すを得ず。

一府傳看黃瑠璃

一府傳へ看る黃瑠璃。

體堅色淨又藏節

體は堅く、色は淨くして、又節を藏す。

盡眼凝滑無瑕疵

盡眼凝滑にして、瑕疵なし。

法曹貧賤衆所易

法曹、貧賤にして、衆の易るところ。

腰腹空大何能爲

腰腹空大、何をか能く爲さむ。

自從五月困暑濕

五月暑濕に困んでより、

【字解】

【一】斬州、唐書地理志に「斬州斬春郡、淮南道に屬す。土貢は、白棕簞」とある。【二】笛竹、蔣註に「笛、或は單に作る、是と爲す」とある。但し、本來笛にする竹で、それを細かに削いで簞を造ると見ても差支はない。【三】黃瑠璃、簞の色、黃にして、光澤、瑠璃の如きをいふ。東坡の寄單與蒲傳正の詩に、愧此八尺黃瑠璃とあつて、即ち此詩を祖としたのである。【四】藏節、ふしが外面に顯はれずして滑かなること。【五】所易、易は侮る、漢書陸賈傳に「陸侯、我と敵れ、吾が言を易る」とあつて、顔師古の註

如坐深甌遭蒸炊。深甌に坐して、蒸炊に遭ふが如し。
 手磨袖拂心語口。手磨し、袖拂うて、心、口に語る。
 慢膚多汗真相宜。慢膚汗多く、真に相宜し。
 日暮歸來獨惆悵。日暮、歸り來つて、獨り惆悵。
 有賣直欲傾家資。賣るあらば、直に家資を傾けむと欲す。
 誰謂故人知我意。誰か謂はむ、故人、我が意を知り、
 卷送八尺含風漪。卷いて、八尺の含風漪を送らむとは。
 呼奴掃地鋪未了。奴を呼び、地を掃ひ、鋪いて未だ了らず。
 光彩照耀驚童兒。光彩照耀して、童兒を驚かす。
 青蠅側翅蚤蝨避。青蠅は翅を側て、蚤蝨は避く。
 肅肅疑有清颼吹。肅肅として清颼の吹くことあるを疑ふ。
 倒身甘寢百疾愈。身を倒にして甘寢、百疾愈ゆ。
 却願天日恒炎曦。却つて願ふ、天日の恒に炎曦なるを。

に「その言を越易するを謂ふなり」とある。「六」慢膚 皮膚の弱いこと。楚辭に「平骨慢膚何以肥之」とあつて、その註に「肥澤の貌」とある。「七」含風漪 漪は水文。「八」青蠅 詩經に「營營青蠅止于樊」とある。「九」蚤蝨 抱朴子に「蚤蝨、君を攻めて、臥するも安きを獲ず」とある。「一〇」清颼 古樂府に「秋風蕭蕭風颼」とある。「一一」甘寢 莊子の論無鬼に「孫叔敖、甘寢、羽を棄り、而して、野人兵を投ず」とあつて、安臥すること。「一二」明珠青玉 張衡の四愁詩に「美人贈我明珠、何以報之明月珠」とあり、又、美人贈我飾綉段、何以報之青玉案」とある。

明珠青玉不足報

明珠青玉、報ゆるに足らず。

贈子相好無時衰

子に相好を贈る、時として、衰ふることなからむ。

【題義】鄭羣は、韓愈が撰せし墓志に「羣、字は宏之、滎陽の人、進士に擧げられ、鄆縣の尉より、監察御史に拜せられ、鄂岳使裴均の江陵守たるに佐とし、殿中侍御史を以て其軍に佐たり」とある。して見ると、韓退之が江陵に量移された時は、同僚であつたのである。ある時、鄭羣は、珍らしい簾を贈つたから、韓愈は之を謝して、この詩を作つたものと見える。蔣註に「唐の孔戣の私記に云ふ、退之豊肥、善く睡る、吾が家に來る毎に、必ず枕簾を命ず」と。而して、沈存中の筆談亦た云ふ、世、韓退之を畫く、小面にして美髯、紗帽を著く、これは乃ち江南の韓熙載のみ。熙載は、文靖と諡す、江南の人、これを韓文公といふ、これに因つて、遂に誤つて以て退之と爲すと。退之は、肥えて髯少し、この詩、腰腹空大及び慢膚多汗の語あり、二説、信に然り」とある。すると、韓退之は、肥えて居て、毎に横に成りたがる癖があつたから、鄭羣は、之を知つて、簾を贈つたのであらうし、韓愈も、亦た特に其好意を喜んで、乃ち此詩を作つたのであらう。

【詩意】蕪州に産する笛の原料たる竹の美材たることは、天下周知の事實であつて、その竹で造つた簾は尤も宜しく、わが同僚たる鄭君の家に寶藏するものは、最も見事で、珍らしいものである。鄭

君は、折角この簞を役所に持つて来たが、晝に當つても、その上に臥すことが出来ない。なせかといふと、一府中の役人どもが、これは黄色で、瑠璃の様な澤があつて、如何にも珍らしいといひつつ、皆驚いて見物して居るからである。そこで、仔細に之を見ると、體は堅く、色は淨く、そして、節は顯はれずして、中に隠れて居るから、平滑であつて、見わたす處、頭から尾に至るまで、一點の瑕疵もなく、すべすべして居る。予は、法曹參軍の職に居るが、もとより貧賤で、人に侮られ、この身體は、徒に肥滿して、腰から腹のあたりは、大さう大きい、何一つ仕出かすことも出来ず、その上、暑氣には、まことに閉口で、五月の濕つぼくて暑い時分には、丁度、飯の中に坐つて居て、下から蒸し炊がれると同じである。その時、この簞を見たから、手でさすり、袖で拂つて見て、さて心の中で語るには、我輩の様な肥くて皮膚の弱いものは、汗が出て堪まらないが、かういふ物の上に臥して見たら、どんなにか心持が善からうと、かういつたが、もと鄭君の物であつて、わが物で無いから、どうにも、仕方がない。日暮に、役所から家に歸り、惆悵として、殘念で堪まらず、かくの如き簞が萬一賣物に出たならば、家の財産を傾けても、是非買つて見たいと思つた。然るに、鄭君が我が心を推察されたと見えて、長さ八尺もあり、風を含んで自然に、漣を生ずるが如き彼の簞を巻いて、我が家に送り届けられたのは、まことに、思ひがけぬことであつた。そこで、早速、下男を呼び、地を掃除して、これを敷かせた處が、まだ敷き切らぬ内に、光彩照耀し、子供などは、大騒ぎに騒ぎ立

てて、大變な物を頂戴したといつて驚いて居る。さて愈よ其簞を展べて見ると、この土地の名物たる蠅も翅を側で、その上には止まらず、蚤や蝨なども、決して、ここには乗つて參らぬ、おまけに、肅肅として、清い風が吹き起る如く、自然に心持がすがすがしく成つた。そこで、身體を引っくりかへし、仰向けに安臥して見ると、如何にも愉快で、百病も即坐に平癒するかと思はれる。すでに之を貰つたからには、何時までも、夏であつて、天日が照りつけて呉れば善いにと思つた程である。この御返禮としては、明月の珠、青玉の案を以てしても、到底報い盡すことが出来ない、されば、今後君との交誼の時として哀ふることなく、長しへに、親密にして、この好意に報ゆるより外はない。

【餘論】この詩は、一韻到底で、前に一寸述べた律句を打破る平仄法を嚴重に守つて居る。そして、六句で一意に成つて、段落も分明である。願詞立は「この詩、毎に反襯の意を用ひて奇を見る。攜來當晝不得臥、却願天日恒炎曠等の句の如き、是れなり。賦物の妙、直に瑣細の處より、體貼して出づ」といひ、朱竹垞は「物象を描寫すること工に、意趣を寫して、亦た妙に入る」といひ、沈德潛は「却願天日恒炎曠、攜來當晝不得臥と、俱に一層を透過するの法」といひ、乾隆御批には「健好の怨歌に云ふ、常悲秋節至、涼風奮炎熱」と。ここに云ふ却願天日恒炎曠と同一語妙」とある。

豐陵行

豐陵行

羽衛煌煌一百里

羽衛煌煌一百里

曉出都門葬天子

曉に都門を出でて、天子を葬る。

羣臣雜沓馳後先

羣臣雜沓、馳する後先。

宮官穰穰來不已

宮官穰穰、來つて已まず。

是時新秋七月初

この時、新秋七月初。

金神按節炎氣除

金神、節を按じて、炎氣除く。

清風飄飄輕雨灑

清風、飄飄として、輕雨灑ぐ。

偃蹇旂旆卷以舒

偃蹇旂旆、卷いて以て舒ぶ。

逾梁下阪笳鼓咽

梁を逾え、阪を下つて、笳鼓咽ぶ。

啼噪遂走玄宮閭

啼噪、遂に玄宮の閭に走る。

哭聲訇天百鳥噪

哭聲、天に訇いて、百鳥噪ぎ、

幽坎晝閉空靈輿

幽坎、晝閉ちて、靈輿空し。

【字解】「羽衛」即ち羽林、

將註に「漢の武帝、羽林を置き、遂に従を掌る。朝門に次するを以て、名づけて、建軍營騎といひ、光祿勳に屬し、令丞を置いて、之を領せしむ。

後に名を羽林騎と更む、兼れて、天に羽林屋あつて、車騎を主るに象るなり、又國の羽製たること、林の盛なるが如し」とあり、舊唐書職官志に

「左右金吾衛、凡そ車駕出入、すなはち其屬を率ゐて、以て遊隊を清くし、白澤・朱雀等の旗を建て、隊先驅し、幽澤の法の如し」といふとある。

【二】金神 禮記の月令に「孟秋の月、その帝は少皞、その神は、蓐收」とあつて、註に「少皞は白雉の君、金天、是れなり。蓐收は、金官の亞なり」とある。

【三】清風飄飄輕雨灑 文選東都賦に「雨師汎灑、風伯清塵」とある。

皇帝孝心深且遠

皇帝の孝心、深くして且つ遠し。

資送禮備無贏餘

資を送り禮備はりて、贏餘なし。

設官置衛鎖嬪妓

官を設け、衛を置いて、嬪妓を鎖し、

供養朝夕象平居

供養、朝夕、平居に象る。

臣聞神道尙清淨

臣聞く、神道は清淨を尙ふと。

三代舊制存諸書

三代の舊制、諸書に存す。

墓藏廟祭不可亂

墓藏廟祭、亂るべからず。

欲言非職知何如

言はむと欲するも、職に非ず、知る何如せむ。

【題義】豐陵は順宗の陵で、長安志に「順宗の豐陵は、富平縣の東北三十五里、璽金山に在り」と記し、唐書には「元和元年七月壬寅、順宗を豐陵に葬る」とある。そして、韓愈は、この年六月、江

陵より召し還されて國子博士に拜せられたから、丁度、都に居て、この葬儀を實際に見た譯である。將註に「終篇言ふ、三代の舊制、諸書に存せりと。當時の禮必ず古しへに合はざるものあらむ、故に

云ふ」とある。すると、この葬儀は、随分盛であつたにも係はらず、古禮に合はぬ點あるのが遺憾だと

いふので、韓愈が特に此詩を作つたのである。

【詩意】今次の御葬送は、非常に盛なもので、煌々たる羽林侍衛の鹵簿は、百里も續いて山川を照り輝かし、曉に長安を出でて、やがて豊陵に葬られた。羣臣は雜沓しつゝ、馳せて後先し、その間を宮内官などが種々として、彼方此方に来往し、まことに非常な騒ぎである。時しも、新秋七月の初秋は五行の中でも、金に屬し、一たび金神が節を按ずれば、炎氣忽ち除いて涼しくなり、加ふるに、清風は、飄飄として吹き起り、輕雨は、道に灑いで、天地も、さながら心あつて、靈柩を導くが如く、銘旗を始め、無数の旗などは、或は巻き、或は舒べて打ち續き、橋を渡り、阪を下る間、笳鼓の聲、響き渡り、やがて、山路にさしかかり、御陵の前なる帳舎に到着した。さて愈よ埋葬となると、哭聲天を動かし、百鳥啼き噪ぎ、さうして、靈柩は、深い穴の中に埋められて、靈輿は空になり、初めて其式を畢つた。御葬儀が、此の如く盛に行はれた故に、今上皇帝の孝心の深遠なるが、窺ひ知られる次第で、その禮は、十分に盡されて、毫髪も遺憾なく、次いで、御陵の四方に役所を設け、侍衛を置き、先帝が宮中で召し使つて居られた宮女どもを送つて、其處に滯留せしめ、御掃除をしたり、食物を供へたり、朝夕奉養して、生前宮中に在ます通にした。しかし、私が承りまするには、神道は清淨を貴ぶので、葬送を盛にしたからといつて、それで、宜しいといふ譯でもない。夏殷周三代の舊制は諸書に残つて居て、墓に葬ることと廟に祭ることとは、全然區別があつて、決して、紊亂しては

ならぬ。つまり、埋葬は、清淨でさへあれば善いので、成るべく、質素を旨とし、そして、祭祀は十分立派にする。この點から見ると、今回の事は、遺憾ながら、どうも、古儀に合はぬことがある。しかし、予は、其職に非ざるが故に、彼此申し上げることも出来ず、仍つて、この詩を作つた次第である。【餘論】順宗の送葬の儀が立派であつたといふが、ここに述べただけでは、普通の事で、特異とするところはなく、つまり、紀述が不十分である。結四句、本志のある處は明白であるが、上記の理由に因つて、甚だ振はぬやうである。清風飄飄輕雨灑の四句は、朱竹垞が「淡淡の語、却つて風致あり」といつた通り、さすがに、趣がある。

遊青龍寺贈崔大補闕

青龍寺に遊び、崔大補闕に贈る

秋灰初吹季月管。秋灰初めて季月の管を吹き、
日出卯南暉景短。日は卯南に出でて、暉景短し。
友生招我佛寺行。友生、我を招いて、佛寺に行く。
正值萬株紅葉滿。正に萬株紅葉の滿つるに値ふ。
光華閃壁見神鬼。光華壁に閃いて、神鬼を見る。

古詩 遊青龍寺贈崔大補闕

【字解】(一) 秋灰。吹。灰を吹くことは、前に憶昨行に註して置いた。(二) 日出卯南。卯は陽、禮記の月令に「季秋の月、日、房に在り、昏に虛中し、且に柳中す」とある。(三) 美官。夏の神。(四) 張火傘。南史に「王緝、笠傘を以て面を覆ふ」

赫赫炎官張火傘。赫赫たる炎官、火傘を張る。
 然雲燒樹火實駢。雲を然やし、樹を燒いて、火實駢ぶ。
 金烏下啄糝虬卵。金烏、下り啄む、糝虬の卵。
 魂翻眼倒忘處所。魂は翻り、眼は倒れて、處所を忘る。
 赤氣沖融無間斷。赤氣沖融して、間斷なし。
 有如流傳上古時。流傳上古の時の如きあり、
 九輪照燭乾坤早。九輪照燭して乾坤早す。
 二三道士席其間。二三の道士、その間に席し、
 靈液屢進頗黎盃。靈液、屢ば進む頗黎の盃。
 忽驚顏色變韶稚。忽ち驚く、顔色の韶稚に變するを。
 却信靈仙非怪誕。却つて信ず、靈仙の怪誕に非ざるを。
 桃源迷路竟茫茫。桃源路に迷うて、竟に茫茫。
 棗下悲歌徒纂纂。棗下悲歌して、徒に纂纂たり。

とある。【五】火實、珊瑚をいふ。
 【六】糝虬卵、糝は赤色、尊醇の解に「上糝は、柿葉の紅にして光華の榮然たるを誅じ、下糝は、柿實の赤くして日光の交も映するを誅す。火傘糝虬は、皆、その紅を狀す。しかも、喻を取るの工、かくの如し」とある。【七】沖融、文選海賦に沖融混濁とあり、杜市の詩に動影與沖融間とある。【八】九輪照燭、淮南子に「堯時、十日並に出て、草木焦枯す。堯、羿に命じ、仰いで十日を射り、その九に中り、日中の九鳥、皆死し、その羽翼を墮す」とある。【九】靈液、潘岳の笙賦に浸潤靈液之滋とあり。【一〇】頗黎盃、頗黎は玻璃に同じ。韻會に「玻璃は、寶玉の名」とあり、本草に「頗黎に作る、云ふ、西國の寶」とある。盤は小盃、ここに

前年嶺隅鄉思發。前年、嶺隅、鄉思發す。
 躑躅成山開不算。躑躅、山を成し、開いて算せず。
 去歲鞦韆湘水明。去歲、鞦韆、湘水明かなり。
 霜楓千里隨歸伴。霜楓千里、歸るに隨つて伴ふ。
 猿呼颺嘯鷓鴣啼。猿は呼び、颺は嘯いて、鷓鴣啼く。
 惻耳酸腸難濯澣。耳を惻しめ、腸を酸にして、濯澣し難し。
 思君攜手安能得。君と手を攜へむことを思へども、安ん
 今者相從敢辭懶。今は相從うて、敢て懶を辭せむや。
 由來鈍駭寡參尋。由來、鈍駭、寡參尋し。ぞ能く得む。
 況是儒官飽閒散。況んや是れ、儒官、閒散に飽くをや。
 惟君與我同懷抱。惟だ、君、我と懷抱を同じうす。
 鋤去陵谷置平坦。陵谷を鋤き去つて、平坦に置く。
 年少得途未要忙。年少途を得て、未だ忙を要せず。

は柿を食ひしことをいふ。【二】
 韻補、韻には美の調がある、みづみづしく若きこと。【三】東下、徒、潘岳の笙賦に「詠、園桃之天天、歌、東下之蕭蕭、歌曰、東下蕭蕭、朱實離離、宛其落矣、化爲三枯枝、人生不能三行樂、死何以三虛設、爲とあり、古唱喏歌に東下何攪攪、榮華各有時、東初秋、赤時、人從三四邊、來、東適今日陽、雖當仰三觀之」とある。接するに、上の二句は、安仁の笙賦に本づいて、柿の赤きを喻へたのである。【四】前年嶺隅、貞元二十年の春、陽山に在りしことをいふ。【五】去歲鞦韆、永貞元年、陽山より江陵に移りしをいふ。【六】濯澣、潘岳の柏舟に如三匪澣衣とある。【七】諫疏尤宜早、韓愈、かつて上疏事を言ひしに因つて、陽山に

時清諫疏尤宜罕。時清く、諫疏、尤、宜しく罕なるべし。

何人有酒身無事。何人か、酒あつて身に事なき。

誰家多竹門可款。誰が家か、竹多くして、門款くべき。

須知節候即風寒。須らく知るべし、節候、即ち風寒なるを。

幸及亭午猶妍暖。幸に亭午に及びて、猶ほ妍暖。

南山逼冬轉清瘦。南山、冬に通つて、轉た清瘦。

刻畫圭角出崖竅。圭角を刻畫して崖竅を出す。

當憂復被冰雪埋。當に憂ふべし、復た冰雪に埋めらるるを。

汲汲來窺誠遲緩。汲汲來り窺うて、遲緩を諷む。

に「大衆に窺く」とあつて、窺は空、即ち穴。

【題義】青龍寺は、長安南門の東に在つて、その頃は、著名であつたが、後には、廢して仕舞つた。

崔大の「大は排行第一、補闕は官名。この人の事は、舊唐書に「崔暉、字は敦詩、清河武城の人、進士の第に登り、右補闕に累遷す」とあつて、韓愈と同年の進士である。この詩は、韓愈が元和元年、京師に在つて國子博士たる時の作で、前詩より、二三月後であつたと思はれる。ところで、この詩の前

半は赤いといふことを形容して、寺の名を青龍といふに對して、甚だ相應しからぬ様であるが、東坡の題跋に「退之、青龍寺に遊ぶの詩、終篇、赤色を言ふ、その故を曉るなし。かつて、小説を見る、鄭度、青龍寺に寓し、貧にして紙なく、柿葉を取つて書を學ぶ。九月、柿、葉赤くして實紅、退之の詩、乃ち此を寓するなり」とあるを見れば、寺に於ける柿の紅葉を寫したのである。詩中、柿といふことは一字も顯はれて居ないが、その赤いといふのは、全く柿を詠じたものとして見ると、成程と思はれるので、これは取りも直さず、東坡の發明に係るのである。

【詩意】今しも、管中の灰が九月の處に吹き到つて、太陽は、房星の南より出で、日脚も段段短くなつた。ここに、友人の招に應じて、一緒に青龍寺に遊びに往つた處、萬株の紅葉が満ちて居た。寺の壁には、様様の神鬼が畫いてあつて、それが、柿の紅葉に映すれば、一層はつきりと見え、さながら夏の神と稱する炭官が火傘を張つて居る様である。その眞赤な柿の紅葉の中には、火實の珊瑚の様なものも、葉葉として竝んで居て、金鳥が赤い虬の卵を啄んで居た様に見える。かういふ眞赤な處に這入り込んだから、魂は翻り、目は引くりかへつて、何處とも知らぬ様な氣がして、現に赤い氣が徐りに立ち昇つて、少しも間斷がない様に思はれる。傳へ聞く、上古の時、九つの太陽が天上に竝び懸つて、乾坤を悉く焼いた爲に、大早になつたといふが、丁度こんなであつたらうと思ふ位。漸く本堂に辿り着くと、二三の道士が席を敷いて坐つて居たが、取り敢へず、わが一行を迎へ、寺の名物だか

らといつて、玻璃の盆に柿の實を盛つて、靈液の滴れる様なのを御馳走して呉れた。その柿の實は赤い光が映るから、わが顔色も、どうやらつやつやしく、俄に若やいだ様な氣がした。これまで、仙人などは、荒唐無稽なものだと我輩は、思つて居たが、ここに至つて、靈仙の怪誕に非ざることを信じた次第である。むかし、漁父が紅の雲たなびく桃源の路に迷ひ込んで行つたが、竟に茫茫として、再び求め難くなつたといふし、棗の實が赤く熟して居る處へ、人が集まつて来て、それを取つて食ふ、しかし、食つて仕舞へば、誰も跡を顧みないといふ悲歌があるが、二つとも、この場合には全く比擬すべからざることである。予は、前年、嶺南に遷謫せられ、頻りに故郷の事を思つたが、折しも、脚躑が眞赤に咲いて山を成し、その夥しきことは、全く數へられぬ程で、それが愈よ郷思を長じたのである。それから、去年江陵に量移されるに就いて、瀟湘を渡つたが、その時は、霜に染め出された眞赤な楓樹が千里も續いて、我が歸るに伴ふやうであつた。その間、猿が悲しく叫んだり、むささびが嘯いたり、又鷓鴣の啼くのを聞いたから、耳を憫しめ、腸を酸くして、滿胸の愁は、洗ひ盡すことが出来なかつた。その時、わが崔補闕の如き肝合へる友人と手を攜へたならばと思つたが、どうしても出来なかつたのに、今日相従つて、ここに同游することが出来たから、疎懶の故を以て斷ることをも爲さず、わざわざ、ここに參つた次第。本來、我輩は薄のろであつて、他處へ出かけることも少しいし、その上、國子博士といふ様な閑職に居るから、つい出無精に成つて、家に引込み勝ちである。但し君

と我とは、懷抱を同じうし、陵谷を鋤き去つて平地に置くといふ様に、何事でも打ち明けて語り合ふ程、意氣が投合して居る。その上、君は年少にして、前途多望であるから、忙はしげに立ち廻るにも及ばず、殊に刻下は、太平の御代であつて、諫疏を上ることも極めて稀なるべき筈である。むかし、秦の犀首は、事なければ、門を閉ちて酒を飲むといひ、王子猷は、竹さへあれば、誰の家でも拘はらず、立ち入つて之を見たといふが、實際、身の無事な時には、酒を飲むのも好いし、氣に入つたら、何處でも尋ねるが宜しい。今は秋の末、追追、寒くなつて、その内に外出も出来ぬ様にならうし、終南山は、すでに冬に過つて、落葉した跡は、峰もあらはに、一しは清瘦の形を爲し、圭角を剝盡した處が、残りなく顯はれ、斷崖だの深洞などが、はつきり見える。予は、前に述べた通り、平生參尋少く、疎懶の癖を爲すものであるが、やがて、終南の山が氷雪に埋もれる様に成つては大變だから、汲汲として、是非青龍寺に遊ばうではないかといひ、その遅緩を戒め、早く早くと促き立てて、君と共に茲に參つて、この一日も樂しく過ごした次第である。

【餘論】朱竹垞が「この詩、運意却つて細、又他處粗硬なる者と同じからず」といつた通り、極めて精細なる注意を以て篇を成したので、その初には、柿の葉と柿の實とを寫し、その形容も極めて適切である。その下、桃源と棗下とを倩ひ來り、二物ともに赤い物である處から、これを以て柿に反襯せしめ、前年の貶謫より量移に及び、躑躅と霜楓とは矢張色が赤い故に、増き出して、愈よ赤色を收め

た。次に思君措手安能得といつて一轉し、今者相從敢辭懶といつて之を承けた處に、開闢の妙がある。次は、その懶を辭せむやといふ處から、これを解釋する積りで、後段が出て来るので、この邊は、筆致が極めて面白のみならず、一分の透間もない様に出來て居る。結末數句は、前の紅葉に轉應して、面白く收束してある。

贈崔立之評事

崔立之評事に贈る

崔侯文章苦捷敏

崔侯の文章苦だ捷敏

高浪駕天輪不盡

高浪天に駕するも、輪して盡さず。

會從關外來上都

かつて、關外より上都に來る。

隨身卷軸車連軫

隨身の卷軸、車、軫を連ぬ。

朝爲百賦由鬱怒

朝に百賦を爲つて、鬱怒に由る。

暮作千詩轉道緊

暮に千詩を作つて、轉た道緊。

搖毫擲簡自不供

毫を搖かし、簡を擲つて、自ら供せず。

頃刻青紅浮海蜃

頃刻に青紅、海蜃を浮ぶ。

才豪氣猛易語言

才豪に、氣猛にして、語言を易くす。

往往蛟螭雜螻蚓

往往にして、蛟螭、螻蚓を雜ふ。

知音自古稱難遇

知音、古しへより遇ひ難しと稱す。

世俗乍見那妨哂

世俗、乍ち見て、那ぞ哂ふことを妨げむ。

勿嫌法官未登朝

嫌ふ莫れ、法官の未だ朝に登らざるを。

猶勝赤尉長趨尹

猶ほ勝る、赤尉の長く尹に趨るに。

時命雖乖心轉壯

時命乖くと雖も、心、轉た壯なり。

技能虛富家逾窘

技能、虚しく富んで、家、逾よ窘む。

念昔塵埃兩相逢

念ふ昔、塵埃兩つながら相逢ふ。

爭名齟齬持矛楯

名を争うて、齟齬、矛楯を持す。

子時專場誇犄距

子は時に場を專にして、犄距に誇り、

余始張軍嚴鞞鞞

余は始めて、軍を張つて、鞞鞞を嚴にす。

【字解】(一)崔侯、崔君といふに同じ。(二)捷敏、杜甫の詩に敏捷詩千首とある。(三)關外、關は函谷關であらう。(四)上都、首都に同じ、即ち長安。(五)鬱怒、物足らぬ心持がする。(六)海蜃、史記の天官書に「海旁の蜃氣は樓臺に象り、廣野の氣は宮闕を成す」とあり、陳藏器の本草に「車螯は是れ大蛤、一名蜃」とある。(七)蛟螭、蛟は龍の角なきもの、螭はお

けら。蔣註に「蛟螭、螭類を雜ふとは、その小大齊しからざるを言ふなり」といひ、百衲漢書註にも「立之の詩、工ならざる處あり、故に、退之、これを以て之を譽る」といつて居る。(八)法官、大理評事を謂ふ、崔立之の官名。(九)赤尉、元和郡縣志に「大唐の縣に赤畿、富強、上、中、下の六等あり、京師、治むるところは赤畿たり、京の旁邑は畿縣たり」とある。京城の縣の邑官。(一〇)尹、府尹。(一一)矛楯、尸子に「楚人に矛と楯とを兼ぐものあり、これを譽めて曰く、吾が盾の堅き、能く隔るなきなり」と。又これを譽めて曰く、吾が矛の利、物に於て隔らざるなきなり」と。或は曰く、子の矛を以て子の盾を隔らば如何、と。その人應ふる

爾來但欲保封疆。爾來、但だ封疆を保たむと欲す。
 莫學龐涓怯孫臏。學よ莫れ、龐涓の孫臏を怯るるを。
 竄逐新歸厭聞。竄逐、新に歸つて、聞しきを聞くを厭ふ。
 齒髮早衰嗟可閔。齒髮早く衰へて、嗟、閔むべし。
 頻蒙怨句刺棄遺。頻りに、怨句を蒙つて、棄遺すと刺らる。
 豈有閒官敢推引。豈に閒官にして、敢て推引するあらむや。
 深藏篋笥時一發。深く篋司に藏して、時に一發。
 戢戢已多如束筍。戢戢、すでに多くして、束筍の如し。
 可憐無益費精神。憐むべし、無益、精神を費す。
 有似黃金擲虛牝。黃金、虛牝に擲つに似たるあり。
 當今聖人求侍從。當今、聖人、侍從を求め、
 拔擢杞梓收楛篋。杞梓を拔擢して、楛篋を收む。
 東馬嚴徐已奮飛。東馬嚴徐、すでに奮飛。

四六〇
 能はずとある。【二】 孫臏、龐涓、文選東京賦に、秦政利齊長軍、終得三捷、擄とある。【三】 龐涓、左傳僖公二十八年に「晉の車七百乘、龐涓執鞭」とあつて、杜預註に「晉に在るを龐といひ、齊に在るを涓といひ、龐に在るを執といひ、後、在るを弊といふ」とあり、即ち聲義修備を云ふ。つまり、龐涓は、車の前に繫ぐ驕馬の節で、いつでも陣を整へて乗り出さうと用意して居る驕。【四】 封疆、境界。【五】 龐涓、孫臏。史記孫武列傳に「孫臏、かつて龐涓と俱に兵法を學ぶ。臏に事へて、惠王の將軍となるや、涓、自ら以爲へらく、能、臏に及ばずと。臏に臏を召して至らしめ、すなはち、法を以て、その兩足を斷つて、之を斃す」とある。【六】 新聞、その頃、

枚臯卽召窮且忍。枚臯、召に卽いて、窮し且つ忍ぶ。
 復聞王師西討蜀。復た聞く、王師、西、蜀を討つと。
 霜風冽冽摧朝菌。霜風、冽冽として、朝菌を摧く。
 走章馳檄在得賢。章を走らし、檄を馳すること、賢を得る。
 燕雀紛拏要鷹隼。燕雀、紛拏して、鷹隼を要す。【一】に在り。
 竊料二塗必處一。竊に二塗を料るに、必ず一に處らむ。
 豈比恒人長蠢蠢。豈に比せむや、恒人の長く蠢蠢たるに。
 勸君韜養待徵招。君に勸む、韜養して徵招を待て、
 不用雕琢愁肝腎。雕琢して、肝腎を愁へしむるを用ひず。
 牆根菊花好沽酒。牆根の菊花、酒を沽ふに好し。
 錢帛縱空衣可準。錢帛、たとひ空しきも、衣、準すべし。
 暉暉簷日暖且鮮。暉暉簷日、暖にして且つ鮮なり。
 城城井梧疎更殞。城城たる井梧、疎にして更に殞つ。

韓愈は、江陵法曹參軍より、長安に召し遣されて國子博士となつた。【一】 閒官、職推引、國子博士は閒職であつて、他人を推引することは六つかしい、崔立之が頌りに詩を寄せて韓愈の推引を望んだから、かく言つたのである。【二】 大輿、大輿に「耶」を杜となし、駘谷を化となす」とあり、文選殿仲文の詩に「哀聖明、二塗」とある、空しき谷。【三】 聖人、天子、即ち憲宗をいふ。【四】 杞梓、左傳襄公二十六年に「晉の大夫、杞梓皮革、楚より往くなり」とあつて、杜預註に「杞梓は皆木の名」とある。【五】 楛篋、書經に「惟れ楛篋」とあつて、孔傳に「楛は美竹、篋は矢幹に中る」とあつて、ともに矢を造る材料。【六】 東馬、嚴徐、東方朔、字は曼倩、平原厭次の人。同

高士例須憐麴藥 高士、例、須らく麴藥を憐むべし。

丈夫終莫生哇咿 丈夫、終に哇咿を生ずる莫れ。

能來取醉任喧呼 能く來つて、醉を取り、喧呼に任かす。

死後賢愚俱泯泯 死後の賢愚、俱に泯泯。

馬相如、字は長卿、蜀成都の人。嚴安、臨邛の人。韓愈、唐郡無終の人。【三】 牧卓、漢書本傳に「字は少卿、自ら牧卓の子と稱す、上、得て大に喜び、召して入つて見えて、待詔たらしめ、拜して郎となす」とある。

【三】 西討蜀、元和聖德詩に見ゆ。【三】 朝置、莊子の遺論に「朝置は時節を知らず」とあつて、司馬遷の註に「置は大芝なり」とある。【六】 走車馳檄、西京雜記に「枚舉は文章敏捷、長卿は制作捷速、車疾の疾、戎馬の間、書を飛ばし、檄を馳するには、枚舉を用ひ、彫廟の上、朝廷の中、高文典冊には相知を用ふ」とある。【七】 燕雀紛華要屢年、續記に「屢年、長く驚つ。孟秋の月、燕、將に蜂鷲せむとし、鳥を大澤の上に殺し、四面、これを陣め、これを鳥を驚るといふ」とある。【八】 捕鯨、文選盧子諶の詩に「捕鯨、芳葉零といひ、潘岳秋興賦に庭樹捕以鯨鯨とあつて、李善の註に「捕は枝空しきの鯨」とある。【九】 井稻、井戸の側なる稻圃。【一〇】 鶴葉、酒をいふ。晉書孔羣傳に「かつて、鶴葉に書を與へて云ふ、今年、田に七百石の稻米を得たり、鶴葉の事を了するに足らず」とある。

【題義】 顧註に「崔珙立、字は立之、博陵の人。貞元四年、侍郎劉太真、舉に知とし、進士三十六人を放ち、これを中第に立つ」とある。それから、韓愈の作つた藍田縣丞廳壁記に「博陵の崔斯之、種學據文、貞元の初、その能を挾んで、畿に京師に暇ひ、再び進んで、再び人に屈す。元和の初、前大理評事を以て、得失を言うて、官を黜けられ、再轉して、この邑に丞となる」とあり、又この集の卷

五に寄崔二十六立之の詩がある。すると、崔立之は、矢張、韓門に列した一人であるが、生來多作家で、詩文を多く作つて、早く出來るといふことを能事として居た。そこで、韓退之は、早く作れば、どうしても疵が出来る、さう疵だらけでは、宜しくないといふことを戒めたので、餘程面白く言ひ廻はしてある。加之、崔立之は、韓退之に向つて、自分を何處かへ周旋して呉れと頼んだが、それが洵に五月蠅いといふ考もあつて、やがて、此詩を贈つたのである。

【詩意】 崔君は、文章を作ることが甚だ敏捷であつて、天に駕する高浪と雖も、とても之には及ぶまいと思はれる程の勢で、筆を飛ばせて居る。さきに、兩谷關外より長安に來たときは、車一ぱいに卷軸を積み、しかも、一つの車では濟まず、二つも、三つも、車軸を連ねて、おのが書いた文章を搬入した位。それから、入京以後、朝に百篇の賦を作つても、なほ鬱怒として物足らぬ様な氣がするし、暮に千首の詩を作つても、轉た遺緊として、力が少しも衰へない。始終、筆を拈かし、簡を擲つて、自ら間に合はない位で、頃刻の間に、屢氣樓の如き青紅の色が目前に現はれる。但し、才の豪なるまに、氣は非常に猛く、従つて、語言を輕輕しくする惡癖がある。そこで、出來上つたものを見ると、小大齊しからず、往往にして、蛟螭の間に蟻や蚯蚓が雜つて居るといふ様な安配、偉らいことは偉らいが、かういふ缺點がある。世に知音といふものは、むかしから、なかなか遇ひ難いもので、世俗の者は、君が折角持つて來た隨身の卷軸を見ると、みんな詰まらないものだといつて笑ふものが多いが、

そんな事には頓著せず、立派なものを作ることに骨を折られたら善からうと思ふ。君は、今、大理評事の職に居て、法官ではあるが、朝廷に昇殿することを許されぬ身分、しかし、京城附近の地方屬官が府尹の下に奔走して、その御機嫌を伺はねばならぬに比すれば、なほ勝つて居るし、時の運命は、おもふ様に成らないけれども、心は轉た壯であるし、文筆上の技能に富んで、家は貧窮であつても、そんな事にはかまはない。おもへば昔、我輩が長安に居た時分、塵埃の間に、君と初めて相逢ふことがあつたが、その時は、御互に競争を爲し、君と名を争ひ、文學に對する見地が互に齟齬して、矛盾を持し、自然確執を生じたこともあつた。その頃、君は、鬪雞が嘴と蹴爪とを持つて、勝ち誇り、その場を專にする様な風で、戦を挑んで來たから、我輩も、負けぬ氣になつて、車の前に繋ぐところの騾馬の飾りを用意し、いつでも乗り出すことの出来るやうに、戰鬪準備を整へて待つて居た。その後、は、てんでに、封疆を保つて、自分の得た處を奪はれぬ様にし、相手の弱り切つて降参するまでは、引き上げぬといふ覺悟で居た。しかし、龐涓が往日同學の友たる孫臏を佐れて、その兩足を切り、後には却つて敗られて死んだといふ様な真似はせぬ積りであつた。ところが、我輩は、一朝竄逐せられ、漸く近頃、呼び還されて長安に歸つたが、年の寄つた爲めか、兎角關がしい事は聞きたくも無い様な氣がするし、齒も抜け、髪も薄くなつて、衰老の態は、まことに憐むべき程である。それなのに、君からは、頻りに、詩文を寄せて、怨の文句を列べ、我輩が舊友の誼を忘れて棄てッばかりして置くが如

く思つて、非常に譴責される様な口ぶり。我輩は、今、國子博士の職に居るが、もとより、閒官であつて、人才を天子に推薦することが出来る程、勢力のあるものではない。それなのに、君から、ひどく怨まれるといふのは、まことに困り入つた次第。それも、一度位なら、我慢も出来るが、つづげざまに度度申し越され、深く文箱の中に藏つてあるが、取り出して見れば、戦戦として、その多く集まれることは、雨後に羣がつかつて出た筈の如く、まことに夥しいものである。こんな無益の事に精神を費されるのは、まことに、御氣の毒の事で、折角、黄金を持ちながら、懸谷の中に抛り込むと一般、頓と役にも立たぬことである。しかし考へて見れば、今上、皇帝は、英明の資を以て上に在まし、しきりに侍従の臣を求められ、杞梓の如き、楛櫛の如き、何でも役に立つものは擢用されること、東方朔、司馬相如、嚴安、徐樂の様な、古しへ漢の武帝の侍臣にも比すべき者が、羽ぶりを利かして御膝元に集まつて居るとのことであるから、彼の枚阜の如き敏捷の才を持つて居る君が、やがて召し出されるのは、無論の事であるから、たとひ、窮したとて、暫時忍耐して居るが善からうと思ふ。それでないにしても、王師は、近ごろ、西、蜀地の叛賊を平定せむとして、戰爭が始まり、晦朔を知らぬ朝菌を凍列たる霜風が一撃の下に摧くやうな勢である。その場合に、章を走らし、檄を馳せ、軍中の文書を扱ふには、然るべき賢才が必要であるが、燕雀の如き詰まらぬ者どもが紛拏して付き纏ふだけで、鷹隼に比すべき俊秀の人は、是非無くてはならぬことと思ふ。かくの如く、天子は侍従を求め

られるといひ、討蜀の軍中にも文士が入用だといひ、刻下、二つの道があるから、必ず其一に居る様なことにならうと思ふので、凡人の様に、何時までも、蠢蠢然として、頭を擧げる時なくして、一生を終ることは無いと、我輩は断言する。されば、そんなに、焦せらずに、韜晦静養して、召し出しの御沙汰あるまで、心のどかに待つて居れば善いので、文章を雕琢して、肝腎を愁へしめる様な事をして、我輩にばかり當つて、小言の百萬陀羅を述べ立てるにも及ぶまいと思ふ。今しも秋で、籬の菊は、盛に咲き出し、酒を飲むには持つて来いといふ時節。君は、貧乏して、錢帛の貯へも無いといふが、著て居る衣類は有らうから、これを質に置けば、酒位はいつでも買へる、櫛に當る晴日は、暉暉として、暖く且つ鮮で、背を晒らすにも好いが、この際、愚圖愚圖して居ると、井上の梧桐の疎なるが掘ひ落されるといふ寒い時節にも成らう。この間、高士の例に漏れず、酒でも飲んで鬱を遣るのが第一。君とても天晴の大丈夫、まさか、我輩が骨を折つて周旋せぬからといつて、畦陲を生じて隔てをされる様な事はあるまい。若し、君が我輩の家に尋ねて來られたならば、君が如何に罵り騒ぐとも、それには拘はらず、面白さうに酒を飲んで酔つて見せやう。死後の事は、賢愚、ともに浪浪として亡びて仕舞ひ、一切無差別であつて、生きて居る内には、十分に酒を飲むに限ると思ふ。

【餘論】顧嗣立は「長篇韻を換へず、氣一にして直下す、藻潤あるを以て、故に迫切せず、又洗鍊し得て淨し、遒緊の味あり、故に韻詠に足る」といひ、朱竹垞は「崔の長ずるところは、能く速なるに

在り、故に首に捷敏といふ。枚卓を引くも、亦た是れ速なるの意。細に此詩を玩べば、還た是れ、その蜀に入るを賛す」といひ、簡單ながら、極めて的確である。要するに、全體が詰らぬ俗事であるが、それを想化して、周匝を極めたのは、例の當行本色で、韓退之なればこそ、巧妙に出來て居るが、うっかり之を學ぶと、飛んでもない鄙俗な者に成るから、特に注意せねばならぬ。それから、乾隆御批には「可憐無益費精神、千古文人の爲に喟息す」とある。

送區弘南歸

區弘の南に歸るを送る

穆昔南征軍不歸。穆、ひかし、南征して、軍、歸らず、

蟲沙猿鶴伏以飛。蟲沙猿鶴、伏して以て飛ぶ。

洵洵洞庭莽翠微。洵洵たる洞庭、翠微莽たり。

九疑錢天荒是非。九疑天に錢して、是非荒たり。

野有象犀水貝璣。野には象犀あり、水には貝璣。

分散百寶人士稀。百寶を分散して、人士稀なり。

古詩 送區弘南歸

四九七

【字解】(一) 穆昔南征 抱朴子に「周の穆王、南征す。三軍の衆、一朝盡く化して、君子は猿となり、鶴となり、小人は蟲となり、沙となる」とあり、造化權輿には「周の昭王南征」とあるが、皆未だ本と何に據るかを評にしない。(二) 洵洵洞庭 楚辭に「波聲之洵洵」とある。(三) 野有象犀 離騷に「夕擊三洲之野」

我遷于南日周圍。來見者衆莫依稀。爰有區子熒熒暉。觀以彝訓或從違。我念前人譬葑菲。落以斧引以繩微。雖有不逮驅駢駢。或採于薄漁于磯。服役不辱言不譏。從我荊州來京畿。離其母妻絕因依。嗟我道不能自肥。子雖勤苦終何希。

我、南に遷され、日周圍す。來り見るもの衆く、依稀たるなし。ここに區子あり、熒熒として暉あり。觀すに彝訓を以てすれば、或は從違。我念ふ、前人の葑菲に譬ふるを。落すに斧を以てし、引くに繩微を以てす。雖ばざるありと雖も、驅つて駢駢たり。或は薄に採り、磯に漁す。服役辱ぢず、言護らず。我に從つて、荊州より京畿に來る。その母、妻を離れて、因依を絶つ。嗟、我、道自ら肥ゆること能はず。子勤苦すと雖も、終に何をか希はむ。

つて、王逸註に「洲草、冬を経て死せざるもの、楚人、名づけて宿莽といふ」とある。翠微は、爾雅に「山未だ上に及ばざるを翠微といふ」とあつて、邢昺の疏に「未だ頂に及ばず、旁の峻陀に在るの處を謂ふ。一説に、山氣青綠色」とあり、蜀都賦に「鬱蒼蒼以翠微」とある。【四】九疑前に見ゆ。湘中記に「九山相似て、行くもの疑惑す、故に九疑と名づく」とある。蔣註に「楚是非とは、豈に此を以てするか」とある。【五】象犀。爾雅に「南方獸の美なるもの、梁山に犀象あり」と見ゆ。【六】貝。書經に「大貝、四方に在り」といひ、その疏に「貝は蕙の屬、古しへ、貝を貨として龜を寶とす」とある。磯は大珠。【七】日周圍。太陽が廻つて一年を廻たといふこと、王

王都觀闕雙巍巍。騰蹋衆駿事鞍鞿。佩服上色紫與緋。獨子之節可嗟唏。母附書至妻寄衣。開書拆衣淚痕唏。雖不敕還情庶幾。朝暮盤羞惻庭闈。幽房無人感伊威。人生此難餘可祈。子去矣時若發機。蜃沈海底氣昇霏。彩雉野伏朝扇暈。

王都の觀闕、雙んで巍巍たり。騰蹋たる衆駿、鞍鞿を事とす。佩服せる上色は紫と緋と。獨り子の節、嗟唏すべし。母は書に附して至らしめ、妻は衣を寄す。書を開き、衣を拆いて、涙痕唏く。雖れと敕せずと雖も、情は庶幾す。朝暮の盤羞、庭闈を惻ましむ。幽房、人なくして、伊威を感ず。人生、これのみ難く、餘は祈るべし。子去れ、時は機を發するが若し。蜃は海底に沈み、氣は昇霏。彩雉、野に伏して、朝扇は暈なり。

註に「貞元九年冬、公、陽山に謫せられ、明年冬、弘來る、故に日周圍といふ」とある。【八】其依。依歸はさもにたりといふことで、人らしいものは居らぬといふ義。【九】熒熒。その聲が綺麗に澄んで居る、即ち聰明なること。【一〇】從違。或は從ひ、或は違ふ。【一一】葑菲。詩經に采葑采菲、無以三下體とあつて、一部分が惡いからといつて、全體を棄ててはならぬ。【一二】落。以斧引以繩微。朱熹の解に「ここに繩微といふは、木工用ふるところの繩微を謂ふなり、然れども、周易に微繩に作る。乃ち黒索たり、彈人を拘ふる所以のもの。恐らくは公の用ふるところ、別に據あるなり」とある。器人の數に違つて居る處けけ切り薄し、又曲つて居る處は繩微で引い

處子窈窕王所妃。處子の窈窕たるは、王の妃とするところ。

苟有令德隱不腓。苟くも、令徳あらば、隠るとも腓まず。

況今天子鋪德威。況んや、今、天子徳威を鋪き、「を受く。」

蔽能者誅薦受襪。能を蔽ふ者は誅せられ薦むるものは襪、

出送撫背我涕揮。出でて送つて、背を撫し、我が涕を揮ふ。

行行正直慎脂韋。行行正直にして、脂韋を慎め。

業成志樹來頤頤。業成り、志樹つて、來つて頤頤たるは、

我當爲子言天扉。我、當に子の爲に天扉に言ふべし。

なり」といつて居る。【三】 羅綺。詩經に四牡騤騤とあつて、毛傳に「行いて止まらざる騤」とある。【四】 採子薄。漢子薄、

將註に「草木の叢生するを薄といふ、蟻は穢なり」とある。【五】 荊州。江陵を指す、唐書地理志に「江陵府、江陵郡は、本と荊州

南郡」とある。將註に「元和元年六月、公、江陵より召されて國子博士となる、弘、公と俱に京師に至る」とある。【六】 紫輿。唐書輿服志に「文武三品以上は紫を服し、四品は深緋を服し、五品は淺緋を服す」とある。【七】 嚙。嚙は歎と同じ、哀んで聲な

きを嚙といふ。【八】 朝事。朝事。文選東晉の補亡時に「朝事。朝事。朝事。朝事」とあり、又晉書謝安傳に「朝事。朝事」とある。【九】 伊威。伊威。爾雅に「伊威委委」とあり、郭璞の註に「舊說風俗」とある。又

詩の幽風に「伊威在室」とあつて鄭箋に「家に人なく、惘然人をして感傷せしむ」といひ、陸德明の音義に「伊威、並に字の如し、

或は旁に虫を加ふるものは、後人増すのみ」とある。【一〇】 朝服。爾雅に「雉、つまり、五彩皆備は

つて、雉を成すを朝服といふ」とあつて、郭璞の註に「雉も亦雉の屬、その毛色の光鮮なるをいふ」とある。將註に「朝服は宮闈な

り、雉尾を以て之を爲る、故に此に言ふ、雉、野に伏して、その羽、用つて朝服の儀と爲すべし、上句と同意」とある。【一一】 處子。莊子の逍遙遊に「綽約として處子の若し」とある。【一二】 窈窕。詩經に窈窕淑女とある。【一三】 不腓。詩經に百卉具腓とあつて、

毛傳に「腓は病むなり」とある。將註に「これ、言ふは、それ苟くも令徳あらば、隱約に在りと雖も、以て病と爲さず」とある。

【一四】 蔽能者誅。漢書に「賢を過むれば上賞を受け、賢を蔽へば顯戮を蒙る」といへると同義。【一五】 脂韋。楚辭に如脂如韋以

濕。後乎とあつて、王逸註に「脂韋は柔弱、曲るなり」とある。【一六】 頤頤。詩經に碩人其頤とあつて、鄭箋に「言ふは儀表長麗俊

好、頤頤然たり」とある。【一七】 天扉。朝庭。

【題義】 區は歐の古字、唐韻に「區治子の後、漢王莽傳に、中郎區博あり」と記してある。この區弘

は、南方の人で、韓退之が陽山令に貶謫された頃から、附隨して、書生同様に召し使はれ、退之が其

後江陵に量移し、やがて長安に召し還される時も、その供をして往つたが、久しく、父母の膝下を離

れて居るからといつて、今度暇を貰つて故郷に歸省するので、これを送る爲に作つたのである。

【詩意】 南方の地は、未開の蠻境ともいふべく、むかし、周の穆王は南征したが、全軍覆滅して、北に

歸ることが出来なかつた。その時、三軍の中で、君子の魂は、化して猿となり、鶴となり、小人の兵

卒どもの魂は、化して蟲となり、沙となつたといふことで、おもひおもひに、地に伏して飛び廻はつ

た儘、盡く異物となつて仕舞つた。かくの如く、南方は、征服することも六つかしく、古來帝王が

て之を矯める。それから、この句は、七字であるが、上三下四になつて居るので、張文瀾は「古人、七言の詩を作る、その句脈、多くは上四字にして下、三字を以て之を成す、退之乃ち句脈を變じ、上三下四を以てす、落以、辨引以三篇微、欲三變、惟舌不可、謂、是れなり」といひ、何陋門は「漢の饒歌上邪篇に云ふ、山無、江水爲、又汝南童謡に云ふ、飯、我豆、食、其、手、婦、その句脈、皆上三字、略ほ断つ、處子必ず本づくある

手古摺つた地域である。その地形を言へば、洞庭湖は洶洶として、波浪その中に湧き、周圍には、山が聳えて、灌木が一ぱい生ひ茂つて居る。九疑といふ山は、天を刺して峙ち、九つの峰が竝び立つて居るといふが、雲霧の中に在つて、はつきりと見えぬから、本當か、うそか、分らない。野には象や犀が居るし、水には貝だの真珠などがある。かくの如く、百寶を分散した儘、利用せず棄て置き、をして、文明的な士人は、極めて稀である。我輩も、その南方の地に貶謫せられ、丁度一年を経過したが、この間に尋ねて来た人は、随分あつたが、この人はと思ふ様なものは、一人も居なかつた。然るに、ここに區弘といふ男があつて、その瞳は、綺麗に澄んで、いかにも聰明らしく、これに示すに、聖人の教を以てすると、従ふこともあるが、違ふこともある。もとより、人には十全を望むべからず、下體を以て葑菲を棄ててはならぬといふ前人の言葉もあることだから、どうかして、これを引き立て遣りたいと思ひ、聖人の教に違つて居る處は、斧で切り落し、曲つて居る處は、墨繩を引いて之を矯め直し、精神力を盡した甲斐があつて、力及ばぬまでも、決して、進行を止めたことはなかつた。そこで、始終自分の側に召し使ひ、或は數に往つて薪を采り、或は河原で魚を捕り、いかなる賤役を命じても、決して辱とせず、苛酷に取り扱つても、隘口を一つ言つたことは無い。その後、我輩は、江陵に量移せられ、それから長安に召し還された。區弘は、その間、常に附き隨ひ、故郷には母があり妻があるが、それ等に別を告げ、依るところを失つても、なほ且つ我輩に従つて来た位で、この

志は、まことに殊勝である。しかし、我が道ばかり修めて、天晴、學者に成つた處で、それでは、飯が食へず、折角、骨を折つて、我輩に仕へて呉れて、それで行く末どうなるかといはれる。それは甚だ氣の毒で、我輩には、格別あても無いのである。現に王城の内には、立派な宮門が二つ竝んで、巍然として雲に聳え、高位大官の人人は、駿馬に鞍を置いて、得意氣に乗り廻はし、その人人は、紫とか、緋とか、色合鮮にして、等級に隨ふところの大禮服を上に着用して居る。わが道を修めたからといつて、直にかういふ高位大官に成れるといふ譯でもないのに、我輩の如き貧儒に従つて、どこまでも道を修めやうといふ心の節義は、まことに嗟嘆すべき程である。然るに、この頃、故郷から便りがあつて、母は手紙を寄越し、妻は仕立て上げた著物を送つて来たので、取り敢へず、その手紙を披見し、その著物を取り出すと、乾いては居るが、兩つながら、涙の痕が確に認められるので、特に歸つて来いとは手紙にも書いてないが、情思厚く、歸つて来て貰ひたいと思つて居ることが分かる。朝に、晩に、盤羞を進む時、母は何となく物淋しく、庭間の團樂を缺くことを嘆いて居るであらうし、妻は、主人が居らぬに因つて、幽房に人なく、折から、伊威の蟲の聲に感じて、一層悲しい心持で居ることであらう。區弘は、この手紙と著物を見て、歸意が動いたに相違ないが、それとは打ち出し兼ねて居た。我輩は、これを察して、一先づ返すことにした。本來、母を慰めることは、その生前に限るので、人生、これのみは難く、その他の事は、おのが祈誓を籠めさへすれば、どんな事でも、出来

るのである。されば、貴公は取り敢へず歸省しろ、愚圖愚圖せず、すぐに出發せよと命じた。抑も、人は徳さへあれば、自然顯はれるもので、特に自ら顯はれることを求めるには及ばぬ。屢といふ大きな蛤は、海底に沈んで居るが、時あつて、氣を吐き出せば、屢氣樓を爲すし、五彩の色を持つて居る雉は、始終野に伏して居るが、その羽は、宮扇を造る爲に用ひられるし、處子の窈窕たるものは、やがて、君王の妃とも成れるので、おのが身に令徳にあらば、如何なる處に隠れて居ても、決して、憂ふるに足らぬ。殊に、方今の世は、天子が普ねく徳威を鋪かれ、能を蔽ふものは誅せられ、賢才を推薦したものは、必ず幸福を受けるといふ位であるから、歸郷した後は、修養を怠らぬ様にして欲しい。そこで、門を出でて汝の遠行を送り、その背を撫して、覺えず涙を揮つたので、行け、行け、正直なる汝は、慎んで曲りくねりの無い様にし、いつまでも正直であれかし、さて愈よ業成り、志立つの日が来たならば、何時でも上京するが善い、その時は、及ばずながら、力を盡して、汝の爲に、朝廷に推薦するから、今回は、安心して歸郷し、ただ其本分を忘れぬ様にして居て貰ひたい。

【餘論】この詩も、毎句押韻せる例の柏梁體であるが、普通の詩の如く、二句宛續けて讀むと、往往分からの處があるので、一句一意に見ねばならぬ。そして、それが、柏梁體の本色である。李光地は「公の陽山に在るや、區冊あり、江陵に在るや、又區弘あり、皆相從つて、舍つるに忍びず、故に弘の公に京師に從つて歸るや、詩以て之を送り、惓惓訓勵して、正に歸す、直に詠すべく感すべし」といひ、

朱竹垞は「全く氣力を以て驅使し、徹に古詞の歌意を襲ぐ、すべて是れ變體」といひ、何義門は「溫柔敦厚、聲、その志の如し。情情藹藹、謂はゆる伯牙の琴絃か。氣味、平子の思玄賦に出づ」といひ、乾隆御批には「分散百寶人士稀、西南邊徼の地脈風氣を道ひ盡す、柳州の謂はゆる人少くして石多きなり。雖不救還情庶幾、語意深婉、游子、これを讀まば、以て無聲に聽くべし」とある。

三星行

三星行

我生之辰、月宿南斗。

我が生の辰、月、南斗に宿し、

牛奮其角、箕張其口。

牛その角を奮ひ、箕、その口を張る。

牛不見服箱、斗不挹酒漿。

牛は箱に服するを見ず、斗は酒漿を挹せず。

箕獨有神靈、無時停簸揚。

箕、ひとり神靈あり、時として簸揚を停むるなし。

無善名已聞、無惡聲已謹。

善無きも、名、すでに聞こえ、惡なきも聲すでに謹す。

名聲相乘除、得失少有餘。

名聲相乗除、得失少しく餘あり。

三星各在天、什伍東西陳。

三星各、天に在り、什伍、東西に陳す。

嗟汝牛與斗、汝獨不能神。

嗟、汝、牛と斗と、汝、獨り神なる能はず。

【字解】【一】我生之辰、辰は時、詩經に我辰安在とある。【二】南斗、北斗と對して南方に在る、斗は斛で、六星を連れると斛の形になる。【三】牛、牽牛、二十八宿の一。詩經の大東に曉彼牽牛、不三以服箱とあつて、毛傳に「河鼓、これを牽牛といふ」とあり、孔穎達は「車内物を容るる處を箱となす」とある。【四】箕、同じく二十八宿の一、詩經の大東に維南有箕、不三以可三箱とあつて、正義に「鄭氏云ふ、箕星は腹狭くして舌廣し」とある。【五】服箱、車を引く。【六】挹、酌む。【七】三星各在天、詩經に三星在天とあるを用ふ。【八】什伍、縦横に同じ、南斗は六星、牽牛は六星、箕四星、これが縦横に並んで居るをいふ。

【題義】三星は、箕斗牛であつて、その三者が、名實相副はぬ様に、自分は、兎角無い事を人に言はれて、警毀されるが、それも、自然の運命であるから、諦める外はないといふ意を詠出したのである。

【詩意】我輩の生まれた日は、星廻りが悪かつたのかも知れぬが、その日、月は南斗に宿り、片方に牽牛が現はれて、角を奮つた様な光を放ち、片方に箕の星が現はれて、口を張つた様な安排に成つて居た。牽牛は、光だけ見えるが、その牛が車を引いたといふことは聞かぬし、斗は斛であるが、斗星が酒を抱んだといふことは聞かぬ。唯だ、幸にも、箕といふ星だけは、神靈があると見えて、始終行動して、簸揚することを止めない。かくて、我輩の一生は、絶えず動いて行きつつある譯である。そんなに善い事をした覚えは無いが、韓退之の名は、逸早く人に知られ、又悪い事は、もとより爲ないが、どうも變な奴だといつて、口喧ましく人から譏られて居る。そこで、雙方の評判を乗除して考へると、どうも得るところ少くして、失ふところ多く、つまり、變な奴だといふ譏りの方が多いやうである。

あつて、身體が常に簸揚して、落ち付かぬのも、尤もなことである。我輩が生まれた時、三星が天に在つて、什伍伍といふ様に、各、東方に羅列せしに拘はらず、牽牛南斗は、聊かも神異なること能はず、唯だ箕のみが靈あつて、それが、我が運命の中に現はれるといふのは、如何にも不思議な事である。

【餘論】東坡志林に「韓退之の詩、我生之辰、月宿南斗、乃ち知る、退之は磨蝸を以て身宮と爲すを。僕、磨蝸を以て命宮と爲す。平生多く勝譽を得たり、殆んど同病なり」とあつて、東坡も亦た韓退之と星まはりと同じだといふことである。愈瑒は「奇趣、却つて大東の詩より來り、變化自ら妙、用韻凡そ五轉、古歌謠に似たり」といひ、朱竹垞は「すべて、詩の南箕北斗より演じ來り、大約戲に近し」といつて居る。

剝啄行

剝啄行

剝啄啄、有客至門。

剝啄啄、客あり門に至る。

我不出應、客去而嘖。

我出でて應へず、客去つて嘖る。

從者語我、子胡爲然。

從者、我に語る、子、胡すれぞして然ると。

我不厭客，困于語言。我、客を厭はず、語言に困む。
 欲不出納，以堙其源。出納せずして、以て其源を堙がむと欲す。
 空堂幽幽，有枯有堯。空堂幽幽、枯あり、堯あり。
 門以兩板，叢書於間。門、兩版を以て、書を間に叢む。
 窅窅深塹，其墉甚完。窅窅たる深塹、その墉、甚だ完し。
 彼寧可墜，此不可干。彼は寧ろ墜るべきも、此は干すべからず。
 從者語我，嗟子誠難。從者、我に語る。嗟、子、誠に難し。
 子雖云爾，其口益蕃。子、爾云ふと雖も、その口、益す蕃からむ。
 我爲子謀，有萬其全。我、子の爲に謀るに、萬、その全きあり。
 凡今之人，急名與官。凡そ今の人、名と官とに急なり。
 子不引去，與爲波瀾。子、引き去らずむば、與に波瀾を爲せ。
 雖不開口，雖不開關。口を開かずと雖も、關を開かずと雖も、
 變化咀嚼，有鬼有神。變化咀嚼、鬼あり、神あり。

今去不勇，其如後艱。今去つて勇ならずむば、其れ後艱を如かむ。
 我謝再拜，汝無復云。我謝して再拜す、汝復た云ふ無かれ。
 往追不及，來不有年。往は追へども及ばず、來は年あらざらむや。

【字解】(一) 剝啄啄。剝啄は門を敲く聲。(二) 有枯有堯。枯は堯、堯は堯の類で席を造るに用ふ。書經に「三百里は桔服を納る」とあり、詩經に下堯上堯とあり。禮記の郊特牲に「堯堯の安くして、清越堯堯の向き」とある。(三) 深塹。漢書高帝紀に「漢王、壘を高うし、塹を深うし」とある。(四) 與爲波瀾。蔣註に「與、或は以に作る。韓文、與、多く以に作る。他文見るもの一に非ず。詩之子歸、不我以、註に、以は猶ほ與のごときなりと。今按するに、陸宣公奏議、亦た然り、未審三云、以否と云ふが如きの類なり。然れども、當に與に作るを正と爲すべし」とある。(五) 有鬼有神。左傳昭公十五年に「譚人交も其間に圖ひ、鬼神にして之を助く」とある。(六) 來不有年。賈本に來可待焉に作る、方世舉の説に「公の祭十二兄文、其不有年、以補我愆、同じく此義なり」とある。

【題義】蔣註に「元和元年、江陵より召され、入つて國士博士となつて作るなり。公、讒を被つて、出でて陽山に令たり。ここに至りて、召し還さる、又これを謗るものあり。故に三星行に云ふ、名聲相乘除、得失少有餘、と。剝啄行に云ふ、我不厭客、困于語言、欲不出納、以堙其源、と。各、激するところあつて云ふのみ。歐陽文忠、剝啄行に擬して、趙少師に寄するに云ふ、剝剝復啄啄、柴門驚鳥雀、故人千里駕、信士百金諾、云云、と。然れども、公は讒に遠ざかり、謗を避け、客を謝し、以て其源を埋めむと欲す、故に其塹を深くし、其墉を堅くし、干すべからざるものと爲さむこ

とを要す 而して歐陽は、故郷に歸老して、欣然客の至るを喜ぶ。これを以て、その辭、同じからざること、かくの如し」とある。すると、この詩も矢張、前詩と同意で、韓愈が都に歸つた後、兎角、誹謗するものが多く、世の中がうるさくて耐まらぬから、一室の中に引込んで、決して、さういふ者と交際はせぬ様にするけれども、都に居る以上は、矢張、人に悪く言はれるといふ意を面白く述べたのである。

【詩意】 剝啄啄と客が来て門を敲く、どんな奴が来やうが、返事さへしななければ、やがて歸るだらうといふので、一切出でて應ぜず、門を敲くに任かせて置くと、果然、客は歸つて仕舞つたが、それからして、韓退之は不都合な奴で、門前拂ひを食はすといつて、觸れ廻るに相違ない。そこで、從者が我に向つて、貴君も餘りひどいではありませぬかといつた。我、これに答へて、おのれは、格別客を厭ふといふ譯ではないが、話をするのが面倒臭い、逢へば話もせねばならぬから、一切さういふ人が出入しない様にしたならば、その源を塞ぐことに成ると思つて、ここに及んだ始末である。わが家は、空堂幽幽として、薄暗い部屋の土間には藪が敷いてあるし、その上には莞の席が展べてある。門は、ちやんと兩扉になつて居るのを、しつかり閉ちて、その間には、様様の書物を集めてある。前には、一つの塹があつて、宥宥として深く、それから、垣根も堅固に出来て居る、尤も垣根だけは打破れるが、とても自分の居間に侵入することは出来ない。それで、客が来ても黙つて居ると、やがて、歸つ

て仕舞ふのであるといつた。すると、從者が又いふには、それは、甚だ宜しくない。貴君は、そんな事をいつて澄して居られるが、彼等は、貴君が逢はなかつたのを怒つて、益々貴君を誹謗するに極まつて居る。私が貴君の爲に謀つて、一つの萬全の策を獻じまするが、刻下この都に居る程の人は、おのが名と官とを得たいと思つて、あせつて居るばかりであるのに、その中に包まれても引き去らず、ともに波瀾を爲して居られる上は、いくら、口を開くまい、門を開くまいといつた處で、先方が承知せず、鬼神の如き變化を以て、種種に咀嚼して、愈々誹謗するにきまつて居るから、さういふことを爲すのが間違であつて、早く引き上げるだけの勇氣が無くてはならぬ。いつまでも、こんな事をして居ると、後難があるに相違なく、決して御爲めに成りませぬといつて忠告をして呉れた。そこで、我は、再拜して之を謝し、なる程、分かつた。もう何も言つて呉れるな、既往の事は、今さら、仕方がないとして、これから、將來の時日に於ては、何とか工夫を致すことにしやうと、かう申した。

【餘論】 この一篇は、古色があつて、極めて面白く、朱竹垞は「鍛語極めて古、然れども、詩に似ず、只だ箴銘に類す」といつた。

青青水中蒲 三首

青青水中の蒲 三首

青青水中蒲 下有一雙魚

青青たり水中の蒲、下に一雙の魚あり。

君今上隴去。我在與誰居。
青青水中蒲。長在水中居。
寄語浮萍草。相隨我不如。
青青水中蒲。葉短不出水。
婦人不下堂。行子在萬里。

君、今、隴に上つて去る、我在れども、誰と居らむ。
青青たり水中の蒲、長く水中に在つて居る。
語を寄す浮萍の草、相隨ふこと我は如かず、
青青たり水中の蒲、葉短くして水を出でず。
婦人堂を下らず、行子萬里に在り。

【字解】「一」蒲がま、水草の名。「二」一雙魚、杜甫の詩に一雙白魚不受釣とある。「三」隴、即ち隴山、今の陝西隴州に在つて、その隴九回、上らむと欲するもの、七日に至るといひ、樂府に隴頭流水、鳴聲咽咽、遠望三秦川、肝腸斷絶とある。【四】浮萍、浮くさ。「五」行子、征夫に同じ。

【題義】例の如く、起句を以て題を填した。全篇の趣旨は、男兒たるもの、志、四方に在るが故に、區區として、家を守つて居る譯に行かぬが、婦人は、常に家を守り、終始渝らざるべく、如何なる困難に遭つても、節を屈しないといふ意を述べたので、古樂府、飲馬長城窟行の青青河畔草や、長歌行の青青園中葵と略ぼ同義である。全體、三首であるが、諸本、一首に作つたものもあるし、又その意が聯關して居るから、一首と見て解釋しても差支はあるまいと思はれる。

【詩意】水中に青青した蒲があつて、その下には、魚が二尾居る。魚でさへ、番ひをなして居るのに、君、今遠く出征し、隴山に上つて去れば、我は、此に在るも、誰と共に居るべきぞ。蒲は、長しへに、水中を離れず、浮草は、波のまに風に任かせて、何處へでも随つて行く。われは、夫に別れても、一つ處に留まつて居るので、絶えず、其處を換へる浮草に及ばない。蒲の葉の短きは、水より出でず、我は婦人の身で、長しへに堂を下らざるも、男兒は、志、四方に在るが故に、萬里の遠きに出征して仕舞つた。あはれ、空閨を守る我が身の上、まことに孤寂の感に堪へられぬ。

【餘論】第一首は、孤寂の身、魚の雙を爲すに若からざるを嘆じ、第二首は、一つ處に居る身は、相隨つて遷る浮萍と異にして、あくまで、操を變へぬといひ、第三首は、男女各、その宜しきを異にすることを言つたので、三首、ひとしく青青水中蒲に就いて發興し、その比擬各、異にし、その間に、深淺輕重の別ある處が面白く、まさしく、詩經の筆致を學んだものである。されば、胡應麟は「退之青青水中蒲の三首、頓に六朝を安しとせざるの意あり、然れども張王樂府の如き、是に似て非なり、兩漢五言を取つて熟讀すれば、自ら見ゆ」といひ、朱竹垞は「語淺く、意深く、藻繪を鍊つて平淡に入るべし」といひ、「篇法は毛詩を祖とす、語調は漢魏の歌行のみ」といひ、何義門も亦た「三章真に古意」といつた。

孟東野失子 并序

孟東野子_を失_ふ 并_に序

東野連產三子。不數日。輒失之。幾老。念無後。以悲。其友人昌黎韓愈。懼其傷也。推天假其命。以喻之。

【訓讀】東野連りに三子を産む、數日ならずして、輒ち之を失へり。幾んど老いなむとして、後なきを念うて、以て悲む。その友人、昌黎の韓愈、その傷らむことを懼るるや、天を推し、其命を假つて、以て之に喻す。

失子將何尤。吾將上尤天。女實主下人。與奪一何偏。彼於女何有。乃令蕃且延。此獨何罪辜。生死旬日間。上呼無時聞。滴地淚到泉。地祇爲之悲。瑟縮久不安。乃呼大靈龜。騎雲款天門。

子を失うて將に何をか尤めむとする、吾將に上天を尤め女實に下人を主れり、與奪、一に何ぞ偏なる。「ひとす。彼、女に於て何か有らむ、乃ち蕃くして且つ延かしむ。これ獨り何の罪辜、生死旬日の間。上に呼べども時に聞くことなし、地に滴れて、涙泉に到る。地祇、これが爲に悲み、瑟縮、久しうして安んぜず。乃ち大靈龜を呼んで、雲に騎して、天門を款かしむ。

問天主下人。薄厚胡不均。天曰天地人。由來不相關。吾懸日與月。吾繫星與辰。日月相噬嚼。星辰踏而顛。吾不女之罪。知非女由緣。且物各有分。孰能使之然。有子與無子。禍福未可原。魚子滿母腹。一一欲誰憐。細腰不自乳。舉族長孤鰥。鷓臬啄母腦。母死子始翻。蝮蛇生子時。坼裂腸與肝。好子雖云好。未還恩與勤。惡子不可說。鷓臬蝮蛇然。

天に問ふ、下人を主る、薄厚胡ぞ均しからざるや。天曰く、天地人、由來相關せず。吾、日と月とを懸く、吾、星と辰とを繫ぐ。日月は相噬嚼し、星辰は踏いて顛る。吾、女を之れ罪せず、汝の由縁に非ざるを知らばなり。且つ物各、分あり、孰れか能く之をして然らしむ。子あると子なきと、禍福未だ原ぬべからず。魚子は、母の腹に満てり、一一誰か憐まむとする。細腰は、自ら乳せず、族を舉げて長しへに孤鰥あり。鷓臬は、母の腦を啄み、母死して子始めて翻る。蝮蛇は、子を生む時、腸と肝とを坼裂す。好子は好しと云ふと雖も、未だ恩と勤とを還さず。惡子は説くべからず、鷓臬蝮蛇然り。

有子且勿喜、無子固勿歎。子ありとも、且つ喜ぶ勿れ、子なくとも、固より歎ずる勿れ。
 上聖不待教、賢聞語而遷。上聖は教を待たず、賢は語を聞いて遷る。
 下愚聞語惑、雖教無由悛。下愚は語を聞いて惑ひ、教ふと雖も悛むるに由なし。
 大靈頓頭受、卽日以命還。大靈、頓頭して受く、卽日、命を以て還る。
 地祇謂大靈、女往告其人。地祇、大靈に謂ふ、女、往いて其人に告げよ。
 東野夜得夢、有夫玄衣巾。東野、夜、夢を得たり、夫あり玄衣巾。
 闔然入其戶、三稱天之言。闔然として、其戸に入り、三たび天の言を稱す。
 再拜謝玄夫、收悲以歡忻。再拜して玄夫に謝し、悲を收めて以て歡忻す。

【字解】(一) 與善一何偏。莊子に「彼を善うて此に與ふ、一に何ぞ偏なるや」とある。(二) 大靈。爾雅に「二に曰く靈龜」とあつて、邢昺の疏に「結書、靈龜は玄天五色、神靈の精なり」とある。(三) 細腰。蜂の屬、爾雅に「果臝潘盧」とあつて、郭璞の註に「卽ち細腰畫なり」とあり、博物志に「細腰には雌雄の類なし、桑蟲或は阜蠶の子を取り、抱いて己の子と成す、詩に謂はゆる螟蛉有子、果臝負之なるものなり」とある。(四) 鳴鳥。爾雅に「鳥鳴」とあり、郭璞の註に「土鳥とあり、説文に「鳥は母を食ふ、不孝の鳥」とある。(五) 蟻蛇。楚辭、宋玉の招魂に「蟻蛇藥藥」とあり、羅願の爾雅翼に「蟻、母胎に、在るの時、その毒氣發作、母、腹を襲いて、乃ち生まる」とあり。(六) 有夫玄衣巾。史記龜策傳に「江使神龜、河に使す、漁者、これを得たり。龜、夢に宋の元王に見ゆ、一大龜に見る、腹を延べて長頭、玄纁の衣を衣て、輜車に乗す」とあり、古今註に「龜、一名は玄衣、晉鄭」とある。(七) 闔

然。公羊傳に「これを開けば闔然、すなはち公子陽生なり」とあり、説文に「闔は馬の門を出づる貌」とある。

【題義】韓愈の自序の意味は「孟東野は、續けて三人の子供を擧げた處が、三人とも、生まれて數日ならざるに死んで仕舞つた。若い時なら、すぐ後から又子の出來る望もあるが、老に垂んとする身では、後來子供の出來ることも覺えないといふので、後なきを思うて、自ら悲んだ。そこで、その友人、昌黎の韓愈は、彼が體をこはす様なことがあつては成らぬといふので、天を推し、其命を假り、まことに仕方が無いから、諦める外はないぞといつて諭す爲に、此詩を作つた」といふのである。孟郊が鄭餘慶の留府の實佐となつたのは、元和二三年の頃であるから、韓愈の此詩も、大方その時分だらうと思はれる。そこで、孟郊の集を檢すると、先づ悼幼子の一首がある。

一閉黃蒿門。不閉白日事。生氣散成風。枯骸化爲地。負我十年恩。欠爾千行淚。灑之北京上。不待秋風至。

次に杏塲の九首があつて、その序に「杏塲は花乳なり、霜翦つて落つ、因つて、昔嬰を悲む、故に是詩を作る」とあつて、見るものに就いて興を起し、いつまでも、その悲を忘れ得なかつたものと思はれる。その詩は、左に記する通りである。

凍手莫弄珠。弄珠珠易飛。驚霜莫翦春。春翦無光輝。零落小花乳。爛斑昔嬰衣。拾之不盈把。日暮空悲歸。

地上空拾星。枝上不見花。哀哀孤老人。戚戚無子家。豈若沒水鳥。不如拾巢鴉。浪散破便飛。風雛鳥相誇。芳嬰不復生。向物空悲嗟。

應是一線淚。入此春木心。枝枝不成花。片片落剪金。春壽何可長。霜哀亦已深。常時洗芳泉。此日洗淚襟。

兒生月不明。兒死月始光。兒月兩相奪。兒命果不長。如何此英英。亦爲弔蒼蒼。甘爲墮地墜。不爲末世芳。

踏地恐土痛。損我芳樹根。此誠天不知。翦棄我子孫。垂枝有千落。芳命無一存。誰謂主人家。春色不入門。

冽冽霜殺春。枝枝疑織刀。木心既零落。山竅空呼號。班班落地英。點點如明膏。始知天地間。萬物皆不牢。

哭此不成春。淚痕三四斑。失芳蝶既狂。失子老亦辱。且無生力。自有死死顏。靈風不銜訴。誰爲扣天關。

此兒自見吳。花發多不諧。窮老收碎心。永夜抱破懷。聲死更何言。意死不必嗒。病叟無子孫。獨立猶東柴。

霜似敗紅芳。剪啄十餘雙。參差呻細風。唳鳴沸淺江。泣澁不可消。恨壯難自降。空遺書日

影。怨彼小書窓。

さればこそ、韓愈は、その悲を消すが爲に、此詩を作つて贈つたのである。

【詩意】子供が亡くなつたに就いて、誰を咎めむとするか、上、天を咎めるより外に仕方がない。そこで、孟東野は、何といつて天を咎めたかといふと、天よ、汝は實に下土の人の主でありながら、輿奪を爲すに、どうも甚だ偏頗で、公平ならぬは、如何なる故か。彼の子福者とても、天に對して特別の關係がある譯でもないが、何故に之を眷顧して、子孫を蕃延せしめたのであるか。この孟東野は、天に對して、如何なる罪があつて、三人の子供を、いづれも、旬日の間に死なして仕舞つたのであるか。孟東野は、かくの如く、上に向つて叫んだけれども、天は之を聞いて、返事をする様子もなく、日日號哭し、その涙は、地に滴れて、九泉にも達する位。さうなると、地祇は、流石に黙つても居られず、これが爲に、ひどく悲み、恐れ入つて縮み上り、久しく落ち付かぬ有様であつたが、やがて、大靈龜を呼び出し、雲に乗つて、遠く天門を敲き、そして、天に向つて、その理由を尋ねさせた。靈龜は天に向つて、天は下人に主たるものであるのに、厚薄の均しからざるは如何なる故かといふと、天は之に答へて、元來、天地人は三才と稱せられるが、個個別物であつて、相互の間に關係のある譯でもない。天には日と月とが懸つて居り、星と辰とが繋がれて居る。しかし、日月でさへも互に吞噬して、喰ひ合ふことがあつて、日蝕月蝕といふ變が起るし、星辰も、時としては、踏いて倒れ、即ち流星だの、

慧星だのといふものが、現出する次第である。天は、かかる機事があつたからといつて、地祇を罪しないのは、元と地祇と何等の關係もないといふことを知つて居るからである。然るに、今、汝、即ち地祇の方から、天は人間に對して厚薄があると不平がましいことを言つて、天を詰問するのは、以ての外の事で、不届至極である。物には各、分があつて、銘銘自然に得て来た上は、誰が然らしむるといふ譯でもないから、仕方がない。それから、子が有るから福、子が無いから禍といふ譯でもない。試に例を擧げると、魚の腹の中には、幾つ卵があるか分からぬ位、それで、魚にも、矢張、親子の情は有るかどうか。細腰といふ蜂の一種は、自分に子が出来ぬ處から、他の蟲の子を取つて来て、それを養つて、自分の子とする。鷓鴣は、不孝な鳥で、母が卵を解して之を育てると、雛が段段長するに従つて、母の腹を食ひ、母を殺してから初めて飛ぶといふ話。蝮蛇は、生まれるときに、母の腹を裂いて出る。して見れば、たとひ、子が有つた處で、好い子は好いに相違ないが、それでも、父母の恩愛と辛勤とに報ゆるといふ譯には行かぬ。まして、悪い子であれば、まことに御話にも成らないので、即ち鷓鴣蝮蛇と同じ様なものである。されば、子が有るからとて、一向喜ぶこともなければ、子が無いからといつて、何も深く嘆息するに及ばぬ。元來、上聖は、教を待たず、生まれながらにして、この理を知つて居るし、賢人は、初こそ疑ふかも知れないが、この話をして聞かせると、これを聞いて遷り、成程と合點する。唯だ困まつたのは下愚の輩であつて、いくら話をして、聞けば聞け程、

惑を生じ、教へてやつても、到底、改悛することが出来ない。孟東野の如きも、氣の毒ながら、下愚の奴であるから、何といつて泣かうが、喚めかうが、決して構はないで、打棄てて置くのである。天が此の如く言つたから、靈龜は、一言もなく恐れ入り、頭を下げて、其命を受け、如何にも御尤もな仰せ、いづれ地祇に申し傳へませうといつて、即日、天からの返事を傳へて歸り、地祇に向つて、その話をした。すると、地祇も、ほとほと感じ入り、如何にも道理至極な次第、然らば、とてもその序に、汝、大靈龜、これから往つて、孟東野に其話をしつて聞かせろといはれた。その爲めでもあらう、ある夜、孟東野の夢の中に、黒い衣、黒い頭巾を着けた男が現はれ、闐然として其戸に入り、孟東野に向つて、天の言はれた通りの言葉を、三度も繰り返して聞かせた。孟東野も、流石に分かつたと見えて、再拜して、かの黒装束の男に謝し、その後は、悲を收め、今までは打つて變つて、機嫌の善い喜びの顔を見せるやうになつた。

【餘論】王伯大は「黄魯直、かつて、この詩を書して石君美に遺る。君美、子を失ふといふ、時に以て觀覽し、用つて思を亂して哀を舒ぶべし。物理を究め觀るに、その實、かくの如し、大概、因果のみ。退之、世弊を救はむとし、故に因果を并せて言はず、と。然れども、この一段の文意、乃ち是れ涅槃經中の佛語。退之、かつて言ふ、讀まざるところなき能はずして、能く大儒たるものあらず、それ信ならざるかと。魯直言ふところ、かくの如し」といひ、俞瑒は「用韻、もと先字を主とし、眞文元

寒削の諸韻を兼入す、此日足可_レ惜の一首と同法_一といひ、朱竹垞は大靈龜を呼び出す一段を評して「但だ直説す、頗る亦た古朴、然れども猶ほ是れ詩の變格_一」といひ、何義門は「先生、早年の詩、好んで鑄鐵を爲し、以て怪巧を出す。元和後は、多く古樸に歸す、謂はゆる森窮變怪得、往往造_二平淡_一と。又云ふところ、意を用ひずして、功益す奇老。これ等の詩の如き、愈_レ樸淡、愈_レ奇古_一といひ、乾隆御批には「龜筮傳、祝詞に云ふ、假_レ之玉靈夫子、而上行_二於天_一、下行_二於淵_一と。詩、大靈を以て端を發するは、これに本づく_一とある。

陸渾山火和皇甫湜用其韻

陸渾山火、皇甫湜に和して其韻を用ふ

皇甫補官古賁渾

皇甫、官に補せらる、古しへの賁渾。

【字解】 【一】 賁渾、公羊傳、

時當玄冬澤乾源

時、玄冬に當つて、澤、源を乾かす。

宣公三年に「楚子、賁渾の戎を伐つ」とあつて、何休の註に「賁は、音六、

山狂谷狠相吐吞

山狂し、谷狠りて、相吐吞し、

或は音奔、左傳に陸渾に作る」とある。【二】 各狠、狠は拗れる。【三】

風怒不休何軒軒

風怒つて休まず、何ぞ軒軒たる。

擺磨出火、互に磨磨して火が出る。

擺磨出火以自燔

擺磨火を出して、以て自ら燔く。

【四】 地陣、羽獵賦に陣天蟻とあつて、李善註に「陣は陣ゆるなり」とある。【五】 崖墳、かざり、文選東

有聲夜中驚莫原

聲あり、夜中驚いて原ぬるなし。

天跳地踔顛乾坤

天は跳り、地は踔つて、乾坤を顛へす。

赫赫上照窮崖垠

赫赫上照して、崖垠を窮む。

截然高周燒四垣

截然高く周つて、四垣を燒く。

神焦鬼爛無逃門

神焦れ、鬼爛れて、逃るる門なし。

三光弛墜不復噉

三光弛墜して、復た噉かならず。

虎熊麋豬逮猴猿

虎熊麋豬逮び猴猿、

水龍鼉龜魚與鼃

水龍鼉龜魚と鼃と、

鴉鷓鴣鷹雉鵠鷓

鴉鷓鴣鷹雉鵠鷓、

燂魚煨燻孰飛奔

燂魚煨燻せられて、孰れか飛奔する。

祝融告休酌卑尊

祝融休を告げて卑尊を酌む。

錯陳齊玫瑰華園

齊玫瑰を錯陳して、華園を開く。

芙蓉披猖塞鮮繁

芙蓉披猖、塞がつて鮮繁。

千鍾萬鼓咽耳喧

千鍾萬鼓、耳に咽びて喧し。

古詩 陸渾山火和皇甫湜用其韻

京賦に北動_二四崖_一、南燂_二朱垠_一とある。【六】 三光、日月星をいふ。

【七】 不復噉、再び明かならず。

【八】 燂魚、燂は説文に「湯中に肉を燂るなり」とあつて、ゆでること。

無は、廣韻に「毛を含んで物を炙るなり」とあつて、毛煮しにすること。

【九】 燂燻、燂は説文に「釜中の火なり」とあつて、釜の中に在る火などで炙ること。燂は、廣韻に「物を灰中に埋めて熱さしむるなり」とあつて、灰の中に埋めて熱焼にすること。

【一〇】 祝融、火神、左傳昭公二十九年に「火正を祝融といふ」とあり、

又「顛頊氏、子あり、蒙といふ、祝融と爲す」とある。王伯大の説に「火

行の冬に於ける、燂は祝融休を告げて歸るがごときなり」とある。【一一】

酌卑尊、尊卑の等級の者を會して、

攢雜嗽嘍沸篋填攢雜嗽嘍として、篋填を沸かしむ。
 形幢絳旃紫纛旒形幢絳旃、紫纛旒。
 炎官熱屬朱冠禪炎官熱屬、冠禪を朱にせり。
 髹其肉皮通脞臂その肉皮を髹にして、脞臂に通ず。
 頰胸埤腹車揪輶頰胸埤腹、車、輶を揪ぐ。
 緹顏鞞股豹兩鞬緹顏鞞股、豹の兩鞬。
 霞車虹靽日穀輻霞車虹靽、日の穀輻。
 丹莛蕝蓋緋緋帟丹莛蕝蓋、緋として帟を緋へす。
 紅帷赤幕羅脈膳紅帷赤幕、脈膳を羅ぬ。
 血池波風肉陵屯血池、波風、肉の陵屯。
 鎗笏鉅壑頗黎盆鎗笏たる鉅壑は頗黎の盆。
 豆登五山瀛四嶂五山を豆登にして、瀛は四嶂。
 熙熙醜醜笑語言熙熙醜醜、笑うて語言す。

酒盛りをする。【一三】齊攻 子虛賦に其石則赤玉玫瑰とあつて、齊灼の註に「玫瑰は火齊珠なり」とある。
 【一四】攢雜 集まり交る。【一五】嗽嘍 廣韻に「嗽嘍は小聲、嘍嘍は大喚」とある。【一六】篋填 二つともに笛の類、郭璞の爾雅註に「填は土を焼いて之を爲り、篋は竹を以て之を爲る」とある。【一七】形幢絳旃 ともに赤い旗。劉熙の釋名に「幢は容なり、これを車蓋に施せば、童童然として、以て形容を隱蔽するなり」とある。それから、周禮に「通帟を旂となす」とあり、爾雅に「軍に因るを旂といふ」とあつて、郭璞の註に「帟を以て旗となす、その文章に因つて復た之を畫かす」とある。【一八】樂器 東京賦に方紇左肅とあつて、その註に「斄牛の尾を以てす、大斗の如し、駝馬の頭上に置いて、以て馬目を亂し、相見しめざるなり」とある。【一九】髹其肉皮 周禮に「駘車に飾あり」とあつて、その註に「髹は漆赤多く黒少きなり」とある。赤漆で皮肉を焼きつける。【二〇】脞臂 脞は脾と通ず、ひばら。【二一】頰胸埤腹 埤は胸、埤は腹、ぼてぼてした腹。埤は凸に同じ。【二二】輶輶 輶を擧げて車が動き出す。【二三】緹顏 字林に「緹は帛の丹黄色」とあつて、やや黄みがかつた赤色。【二四】鞞股 鞞は赤色と茜草で染めた車。【二五】豹の兩鞬 方言に「弓を盛る、これを鞬」とあつて、豹の皮で造つた馬袋。【二六】虹靽 靽は手綱。【二七】日穀 太陽を車輪として動き出す。【二八】丹莛 莛は流蘇、即ちふさ。【二九】緋緋 爾雅に「一染、これを緋」とある。

雷公擊山海水翻雷公、山を擊いて、海水翻り、
 齒牙嚼齧舌腭反齒牙嚼齧、舌腭反す。
 電光礮礮積目暖電光礮礮、積目暖なり。
 頊冥收威避玄根頊冥威を收めて、玄根を避く。
 斥棄輿馬背厥孫輿馬を斥棄して、厥孫に背く。
 縮身潛喘拳肩跟身を縮め、潛に喘いで、肩跟を拳む。
 君臣相憐加愛恩君臣相憐んで、愛恩を加へ、
 命黑螭偵焚其元黑螭に命じて偵はしめ、其元を焚かる。
 天闕悠悠不可援天闕悠悠として、援づべからず。
 夢通上帝血面論夢に上帝に通じて、血面にして論ず。
 側身欲進吐於闕身を側て進むと欲すれば、闕に吐せらる。
 帝賜九河湔涕痕帝、九河を賜うて、涕痕を湔はしめ、
 又詔巫陽反其魂又巫陽に詔して、其魂を反さしむ。

是なり」といつて居る。【五七】 慎微 慎んで耐へて居る。【五八】 桃著花 禮記の月令に「仲春の月、始めて雨水、始めて華さく」とあり。漢書に「杜欽、王鳳に説いて曰く、春桃桃花の水盛にして、羨溢せむ」とあり、水衡記に「黄河の水、十二月各名あり、二月、三月、名づけて桃花水といふ」とある。桃の花の咲く頃になれば、少しく頭を上げるが善い。【五九】 月及中西 舊註に「申は七月、酉は八月、水は申に生じ、火は酉に死す、故に水は申に至つて利、火は酉に至つて怨む」とあるが、あとの方が面白くないので、利復怨は、水の利と火の怨とを並立したのでないの、怨を復するに利ありと讀まなければ適切でない。【六〇】 五龍 なぜ五といつたか分からぬが、四海と中國とを併稱したのであらう。【六一】 九龍 九は大数、数多き意。【六二】 崑崙 水經に「崑崙の墟は、西北に在り、崑崙を去ること五萬里。河水、その東北隅に出づ」とある。【六三】 止睡昏 れむ氣まじにする。【六四】 出翼 翼を寫すといふ上に出て居る。【六五】 上焚 これを焚いて上天に告げる。【六六】 和増 餘計なものを和して作つた。【六七】 任又煩 佛想奇怪にして、詩句煩冗なること。【六八】 不可門 詩經に、莫門朕言とあつて、門はさする、進める。舌を擡でも間に合はぬ。

【題義】 皇甫湜は前に總說中に略傳を記して置いた通り、字は持正、陸州新安の人、元和元年、進士の第に擢んでられ、陸渾尉となつた。陸渾は、本と周の畿内の地、秦晉が陸渾の戎を伊川に遷したといふことがある。漢には、立てて陸渾縣となし、唐書地理志には「陸渾縣は河南道河南府に屬す、陸渾山、一名方山」とある。ここに韓退之の門人皇甫湜が、陸渾の尉となつて赴任した處が、その地の山には、樹木が非常に茂つて居る處から、木と木と擦れ合つて、山火事に成つたのを目撃して、陸渾山火と題する詩を作つて、韓退之が見せた。すると、韓退之は、非常に面白く、その韻を用ひて、この詩を作つたのである。詩中に時當三玄冬澤乾源とあるから、韓退之が東都に分司たる時で、前詩に次いで、大方、元和三年の頃であらうといふことである。劉攽の説に「唐人廣和の詩、次韻あり、

その次に依つて韻を用ふ、依韻あり、同じく、一韻の中に在り、用韻あり、彼の韻を用ひて、必ずしも之に次せず、公の陸渾山火に和する、是れなり。然れども、持正の詩は傳はらず」とあつて、用韻が普通の次韻と異なつて居ることは、殊に記憶して居て貰ひたい。

【詩意】 門人の皇甫湜といふものが、古しへの真渾、即ち今の陸渾の地方官に補せられて、新に赴任した處が、時は玄冬に際し、いづれの澤も、その水源が皆涸れて居た。それで山が狂ひ谷が拗ねて、互に相吐呑するやうに成つたのは、如何した譯かといふと、風が軒軒として、怒號して止まぬからである。かくて木と木とが磨擦して火を發し、つまり木が自分で火を出して、大へんな山火事を始めた。そのばちばちといつて燃える聲を聞いた時、はじめは、何に本づくか、考へても分からなかつたが、窓を明けて見ると、天も跳り、地も蹕つて、乾坤を顛覆せむばかり。その焰は、赫赫として、眞赤に上昇し、空の續かざり、その光が徹底して居るし、又横に燃え廣がつては、東西南北、何處までも限りある處まで焼き拂ふといふ勢である。山中に栖んで居た鬼神どもは、火に焼き立てられて、焦頭爛額の憐れな姿となり、逃げ出す口もなく、その心持では、日月星辰、謂はゆる三光までも、最早無くなつたと思ふ位である。鬼神すら其通りであるから、山中に居る虎とか、熊とか、鹿とか、野猪とか、乃至猿猴の類、又水中に住む龍とか、鼈とか、龜とか、魚とか、鼈とか、次に鳥の類では、鴉だの、梟だの、鷹だの、鷹だの、雉だの、鵠だの、鵠だの、鵠だのいふやうなものは、この大火の爲に、茹で上げら

れたり、毛蒸し焼にされたり、火で炙られたり、埋め焼に成つたりして、飛奔し去る暇もなかつた。火神の祝融は、今まで、やつと働いて焼き立てて居たが、やがて、全山焼け盡し、鳥獸の類まで、皆焼け死んで仕舞つたので、もう仕事も済んだ、ここらで、ちよつと一休みといったやうな風に、休みを告げて、妻子眷屬、長幼尊卑の類を召し寄せて、のんきに酒宴を始めた。その席上には、火齊玫瑰などいふ赤い玉を錯陳し、立派な花園を開いて、その中に芙蓉の花が今を盛りと咲き出でたるを折り取り、花瓶の中に一ぱい挿み、それが、極めて鮮かに見える。そして、音楽を始め、千鐘萬鼓が鳴り出して、耳に喧しく、嗽として極めて小さい聲や、唾として頗る大きな響を集め、篋埴を吹き立てる聲は、さながら、沸くが如くである。それから、赤い旗どもを立て、紫色の大纛を翻し、祝融の幕下に隸屬して居るものは、皆炎官熱屬と稱する火神の類であつて、帽子は固より、腰巻に至るまで、いづれも火に因んで真赤であるし、衣裳ばかりでなく、その皮膚筋肉は、赤漆で焼き付けた様な色をして居て、脊中から尻に至るまで、すつと真赤である。それ等の者が、逞ましい胸、ぼてぼてした腹をして、車に打乗り、そして、そろそろ轅が動いて走り出す。それをよく見ると、赤い顔をして、股には赤い皮袋をあてた者どもが、豹の皮で作つた一雙の弓袋をかけ、霞の車に虹の手綱で、太陽を車輪として走り廻り、車の飾とした房も赤く、車蓋も赤く、そして、緋の色の旗を車の上に押し立て、帷も、幕も、亦た真赤であつて、その車上には、祭肉を積み上げ、血の池が風に波立つかと疑はれ、

肉は丘陵の如く堆くなつて居る。彼等は、谿衍たる巨壑の様に大きな口を開いて、赤い顔黎益に盛つた其肉を食ふのである。かくて、五嶽を以て豆登の食器に充て、四方の瀛海をば酒樽となし、例の祝融の眷屬どもは、熙熙然として、さも樂しげに獻酬して、娛樂をなし、賑賑しく笑ひどよめいて居る。その鬼どもが物を食ふ時に、齒を無茶苦茶に噛んで、顎を動かす聲は、雷公が山を劈いて、海水を翻すやうであるし、食し畢つて、恐ろしく大きな目を見張ると、さながら、電光が礮礮として暗中を照らす様である。ここに、祝融と反對の仕事をするのは、水の神で、その一番の頭は顛頊、その下に使はれて居るのは玄冥であるが、顛頊でも、玄冥でも、祝融の暴はれ廻るには、いたく閉口し、その威を収め、ちつと身體を縮めて、水底なる根據地に避難を爲し、その勢の善い時、輿に乗り、馬に跨り、意氣揚揚として往來せしには似もやらず、その輿馬を盡く打棄てて、水からいへば孫に當る火が跋扈して、どうにも始末に終へぬといふので、これに背いて逃げかくれ、身を縮め、息を潜め、肩や踵をすばめて居る。しかし、何時までも、こんな風をしては居られぬといふので、顛頊と玄冥と、君臣相憐んで、愛恩を加へ、何とか工夫はあるまいかと、色々考へた末、ひそかに黒鷲に命じて、火の跋扈して居る處へ往つて偵察しろといったので、黒鷲は、仕方がなく、ひよいと身を起すと、火は相變らず燃えて居たから、氣の毒にも、その頭を、すつかり焼かれて仕舞つた。そこで、黒鷲は、苦痛に堪へかね、天に向つて號泣したが、天關悠悠として、攀べべからず、仕方がないから、せめては、

夢になりと、天帝の處に往つて、血だらけの顔で泣いて訴へむとし、一體どういふ譯で、火だけが跋扈し、私ども、水の眷屬に、此の如き愛き目を見せられるのか、まことに聞こえませぬといつて、一理窟こねる積りで、愈よ身を側てて天帝の處に往つて見たが、ひどく門番に叱りつけられて、閉口して居ると、天帝は、これを哀れと見そなはし、九州の河の水を悉く其處に集めて、その涙痕を洗ひ落さしめ、又巫陽といふ神聖なる巫女に命じて、黒鷄の靈魂を返さしめ、徐に之に命じて、前に進ましめ、其方は夢に顯はれて、何事をか申したいといつて參つたさうだが、一體如何なる冤罪であるかといつて、懇に御尋ねに成つた。そこで、黒鷄は、その要點を摘まんで、奏上すると、上帝は、これに答へて、今は冬である、冬は火の跋扈すべき時節で、もし冬に於て火を禁じたならば、天下の生きとし生ける物は、食物を絶たれて死んで仕舞ふに相違ないから、いくら火が跋扈したとて、これを制止する譯には行かぬ。元來、火といひ、水といひ、親類同士であつて、火の丁の女は水の壬に向つて其婦とあり、代代婚姻を續けて居るのに、一朝仇を結べば、貴様達の後世子孫の爲に甚だ宜しくない、元來、物が勢力を得るのは、時の運行の爲であつて、しばらく耐へて居ると、やがて、元へ歸つて来る、今は、火が勢力を得べき時で、いくら貴様が愚圖愚圖いつても仕方がないから、矢張、玄根の水底に潜んで、小さく成つて居るが善い。春に成つて桃がそろそろ咲き出す頃にもならば、水も亦た少しづつ頭を出して善いのである。やがて、月、申酉に及び、七八月の頃にも成らば、水は勢力

を得べく、かくて、今日火に苦しめられた遺恨を報ゆるも宜しからう。さういふ時が来れば、天帝も決して黙つては居らず、五龍を遣はして助けしめ、又多くの鯢を従はせて、汝の勢威を増さしめるであらう。この時は、今しも火の跋扈して居る村を一時に溺らせ、火の神を捕へて、崑崙山に押し込めても差支はないと、かう申された。皇甫湜は、今次、山火事を見て詩を作つたが、何の爲にしたかといへば、格別深い考もなく、實は睡氣ざましの業くれに過ぎぬ。その癖、眞を寫す上に於て傑出して居るからといつて、大に自慢の氣味で、天に示すが爲に、それを焚いて、上に向つて告げたのである。それで、もう澤山であるのに、皇甫湜は、なほ嫌らず、我輩に強ひて、餘計な者を一首作り足すことにした。そこで、我輩は、止むを得ず、作つては見たものの、上述の如く、構想怪奇、そして、文辭煩冗、今さら後悔したが、すでに出來た上は、この舌を撫でても追ッ付かず、これを抹殺する譯にも行かぬから、取り敢へず披露するので、その不完全な個處などは、先づ大目に見て置いて貰ひたい。

【餘論】この詩は、韓集中に在つても、極めて有名なもので、その構想の怪奇なることは、まことに自ら言ふところに負かぬ。ある人の説に「韓退之は、元來佛が嫌ひであつて、佛骨を諫めた一表の爲に、潮州にまで流された位であるが、佛典などは、必要上、熟讀して居たものと思はれる。この詩に火事の有様を寫した處は、どうも、彼の法華經の方便品中、火宅の喩の敘事文に極めて類似して居る。

但し、彼は印度の文學であつて、自然坊主臭いけれども、此は、何處までも、儒教主義で押し通し、少しも坊主臭い言葉を使つて居ない。但し、その光彩陸離たる處は、髣髴として、互に類似して居るので、まさしく、彼の神を采つて來たものであらう。儒者は、佛敎を口にするこゝさへ憚るが、誰が見ても、宜しい様に、儒教的に焼き直して見やうといふ様な考は、韓退之にも有つたに相違ないと思はれる。それから、この詩は、毎句韻の例の柏梁體であるから、勝手次第な句法を用ひ、そして、一番初の起句が最も面白い。皇甫補官古賁渾、これは、皇官古渾が雙聲、甫補賁が又雙聲、かういふ雙聲の文字を併せ、錯綜して一句としたのは、文を戲にするものであるが、音節の上に於て極めて妙味がある。唯だ讀み悪いが、そこに又面白味があるといつて居るが、大體は、中つて居るので、予も亦た此に贊するものである。韓醇は「この詩を詳にするに、はじめは火勢の盛を言ひ、次は祝融の火を御するを言ひ、その下は、水火相剋し相濟ふの説なり」といひ、樊汝霖は「公に從つて、文を學ぶもの多し。惟だ李習之は公の正を得、皇甫持正は公の奇を得たり。持正、かつて人に語つて曰く、書の文、奇ならず、易、奇なりと謂ふべし、豈に理を礙げ聖を傷つけむやと。龍駁於野、其血玄黃、見二豕負塗、載鬼一車、突如其來、如焚如死如棄如何等の語の如きなり。今、この詩、黑騎五龍九鬩等の語、其れ易の龍戰於野と何ぞ異ならむや」といひ、筆墨閒錄には「無逸云ふ、鴟鵂鷹鷹雉鷓鴣の句、正に柏梁體。後山、七字の詩を作る、東坡を上にして、この體を襲ぐ」といひ、劉石齡は「公

の詩の根柢、全く經傳に在り。易の説卦、離は火たり、その人に於けるや大腹たりの如き、故に炎官熱屬に於ては、頽胸坭腹を以て、これを其形容に擬す。臆説に非ざるなり。又彤幢紫纛日殺霞車虹駟豹韃電光顏目等の字、亦た日となり、電となり、甲冑となり、戈兵となるの句より化して出で、造語極めて奇、必ず依據あらむ。理を以て考索するに、解すべからざるものなし。世儒、この篇に於て、毎に怪異を以て之を目し、且つ解すべからざるを以て之を置く、吁、これ亦た深く其故を求めざるのみ、豈に眞に解すべからざらむや」といひ、朱竹垞は「鑿空硬造、語法、騷に本づく。然れども止だ是れ奇を競ふのみ、甚だしき風致なし」といひ、最後に乾隆御批には「只だ是れ野燒を詠するのみ、寫し得て此の如し、天動き、地岐る、空に憑つて結撰し、心花怒生」とある。

縣齋讀書

縣齋に書を讀む

出宰山水縣讀書松桂林。
蕭條捐末事。邂逅得初心。
哀狷醒俗耳。清泉潔塵襟。
詩成有共賦。酒熟無孤斟。

出でて山水の縣に宰とし、書を松桂林の林に讀む。
蕭條、末事を捐て、邂逅、初心を得たり。
哀狷、俗耳を醒まし、清泉、塵襟を潔くす。
詩成つて共に賦するあり、酒熟して孤斟なし。

青竹時默釣、白雲日幽尋。

青竹、時に黙して釣り、白雲、日に幽尋。

南方本多毒、北客恒懼侵。

南方、本と毒多し、北客、恒に侵さむことを懼る。

謫譴甘自守、滯留愧難任。

謫譴、自ら守るに甘んじ、滯留、任へ難きを愧づ。

投章類縞帶、佇答逾兼金。

章を投じて縞帯に類す、答を佇つこと、兼金に逾えたり。

【字解】(一) 末事 俗事に同じ。(二) 遐邇 偶然に逢ひ見る。(三) 時默釣 陽山縣志に「釣魚臺は、縣東牛里、塔溪の右に在り。韓愈が區册を送る序に云ふ、之と嘉林に居し、石磯に坐し、竿を投じて漁し、陶然以て樂む」と。宋の嘉定の初、滯留郎應、はじめて臺を臺上に作る」とある。(四) 縞帶 左傳襄公二十九年、吳の季札、鄭に聘す、子産を見て、これに縞帯を與ふ。子産、紵衣を獻す」とあつて、杜預の註に「吳地は縞を賣び、鄭地は紵を賣ぶ」とある。(五) 兼金 陸機の詩に「愧無三韓佩、良訊代兼金」とあり、趙岐の孟子註に「兼金は、その價、兼れて常に倍するもの」とある。

【題義】この詩は、次の新竹、晚菊の二篇と共に、貞元二十年、韓愈が陽山に居た時の作である。樊汝霖は「陽山に在つて作るなり。公、かつて曰く、陽山は天下の窮處。又曰く、縣郭に居民なく、官に丞尉なし、少吏十餘家と。これを審にすれば、詩成有共賦、酒熟無孤斟」と、其れ孰れか與に此を樂まむや。公の集を觀るに及び、區册、區宏、寶存亮、劉師命の輩、皆遠方より來つて公に従ふ。すなはち、戸外の塵滿つ」といつて居る。それから、胡渭は、陽山縣志を引いて「賢令山は、縣北二里に在り。むかし、韓愈、令たるの日、書を此に讀む、上に讀書臺あり、一名牧民山」といつて居るか

ら、韓愈が書を読んだのは、即ち此地であらう。

【詩意】われは、陽山に來て、この様に山水の眺め宜しき處に縣令となり、そして、松桂の列をなして居る林の中に於て、書を読んで居る。平生蕭條として、俗事を棄て去り、偶々相逢ふ人は、皆おのが心を知り合つて居る友達である。その林で啼いて居る猿の悲しき聲は、俗事を醒ますべく、清泉は、塵に汗れた衣襟を洗つて潔くすることが出来る。詩の出来るのも、互に唱和するからであるし、酒が熱すれば、ひとりではなく、互に酌み交はすから、逸興は湧くのである。時には、青竹を竿にして水邊に釣を垂れることもあるし、白雲の深く立ち罩めたる山路を彼方此方と尋ねて、珍らしい景色を探ることもある。元來、南方は、毒熱の地であつて、北から來て風土に慣れぬものは、毎に之に侵される虞がある。しかし、謫譴せられて此に來たものの、上述の如き樂があるから、甘んじて自ら守つて居るので、ここに滯留して、縣宰たる職分を盡し得るや否や、その點は、聊か覺束なく思はれる。抑も、詩を作つて其和を求める爲に、人に詩を贈るは、さながら、昔人が縞帯を贈つたと同じ心持であるし、又先方から和を求めて、その答を待つことは、恰も兼金の珍物でも贈られるやうであるといふから、是非一つ願ひたいと言はれると、黙つて居る譯にも行かずして詩を作るので、晨夕の應酬は、先づ此様なものである。

【餘論】この詩は排律であつて、對仗も嚴確である。朱竹純は「全く力を費さず、然れども、意味却

つて餘あり」といつた。

新竹

新竹

筍添南塔竹。日日成清閼。

筍は南塔の竹を添へ、日日清閼を成す。

標節已儲霜。黃苞猶揜翠。

標節、すでに霜を儲へ、黃苞、霜は翠を揜ふ。

出欄抽五六。當戶羅三四。

欄を出でて五六を抽き、戸に當つて三四を羅ぬ。

高標陵秋嚴。貞色奪春媚。

高標、秋を陵いで嚴たり、貞色、春を奪うて媚ぶ。

稀生巧補林。併出疑爭地。

稀に生じて、巧に林を補ひ、併せ出でて、地を争ふかと疑ふ。

縱横乍依行。爛漫忽無次。

縱横、乍ち行に依り、爛漫、忽ち次なし。

風枝未飄吹。露粉先涵淚。

風枝、未だ吹を飄へさす、露粉、先づ涙を涵す。

何人可攜翫。清景空瞻視。

何人が攜へ、翫ふべき、清景、空しく瞻視す。

【字解】【一】清閼 閼は暗く閉ちこめる。

【二】標節 青色の節。

【三】黃苞 黄色の竹の皮。

【四】爛漫 繁生の貌。

【題義】單に新竹を詠じたのである。

【詩意】

筍が段段生長して、南階の竹となつたから、自分の居る處は、日に増し、奥深く閉ちこめて清幽に見える。若竹であるから、青色の節に白い粉を含んで、霜を貯へたやうであるが、何分皮が剥けたばかりであるから、黄色の薄皮に包まれて、翠色を掩うて居る。忽ちにして、欄干の處に五六本、戸の處に三四本ならび立ち、段段それが伸びるに随つて、高標は、秋の空の凜凜たる色をも凌ぐかと思はれ、貞色は、いつも變らずして春の麗かしきを奪ふやうである。少し疎らに生えて、巧に林の缺けた處を補つて居るかと思ふと、非常に併出して重り合ひ、他の株と地を争ふかと疑はれる。その縱横なるは、行列をなし、茂り過ぎると、順序もなく、ごたごたに成つて來る。また枝が碌碌出揃はぬから、風に吹かれる處も少く、露に濕へる竹粉は、涙に涵した様である。新竹は、如何にも風情あるもので、何人が之を攜へ、翫ぶか、我は獨り、この清景を眺め入つて、如何にも惜いやうな心持がする。

【餘論】これは、仄韻の排律で、朱竹垞は「琢句、前詩に比して更に工峭」といつた。縱横乍依行は稀生巧補林を承け、爛漫忽無次は併出疑争地を承け、即ち隔句對になつて照應して居る處が面白く、この四句が取りも直さず、全篇中の精彩である。

晚菊

晚菊

少年飲酒時。踊躍見菊花。

少年酒を飲む時、踊躍して菊花を見る。

今來不復飲。每見恒咨嗟。

今來復た飲まず、見る毎に恒に咨嗟す。

佇立摘滿手。行行把歸家。

佇立、摘んで手に滿ち、行行把つて家に歸る。

此時無與語。棄置奈悲何。

この時、ともに語るなし、棄置悲を奈何。

【字解】「一」題。興に乗る貌。「二」棄置。劉琨の扶風歌に棄置勿重陳とある。

【題義】單に晚菊を詠じたのである。

【詩意】少年の時、酒を飲むに際し、興に乗れば、身を躍らして菊花を見たが、段段年を取つて、酒も飲めなくなり、菊を見ても、毎々咨嗟するのみで、むかしの様に喜ぶことは無くなつた。しかし、菊花は、依然として棄てられぬ故に、佇立して手に一ばい之を摘み、行行これを攜へて、我が家に歸つて來た。おまけに、これは晚菊であつて、この時に當つて、棄てつばかして置いたならば、その儘、凋んで、跡から如何に悲んだ處で仕方がない。そこで、菊と共に此心を語らうと思ひ、この時を外す、これを採つて家に歸つたのである。

【餘論】朱竹垞は「興趣、淵明に近し、但し氣脈は太だ今」といつた。

落齒

齒を落つ

去年落一牙。今年落一齒。

去年一牙を落し、今年一齒を落す。

俄然落六七。落勢殊未已。

俄然として六七を落す、落勢、殊に未だ已まず。

餘存皆動搖。盡落應始止。

餘の存するも皆動搖、盡く落ちて應に始めて止むべし。

憶初落一時。但念豁可恥。

憶ふ初めて一を落す時、但だ念ふ、豁にして恥づべしと。

及至落二三。始憂衰即死。

二三を落すに及んで、始めて憂ふ衰へて即ち死せむことを。

每一將落時。懷懷恒在已。

一の將に落むとする時毎に、懷懷として、恒に已るに在り。

又牙妨食物。顛倒怯漱水。

又牙として、物を食ふを妨げ、顛倒して、水に漱ぐを怯る。

終焉捨我落。意與崩山比。

終焉として我を捨てて落ち、意、崩山と比す。

今來落既熟。見落空相似。

今來落つること、既に熟せり、落るを見れば空く相似たり。

餘存二十餘。次第知落矣。

餘の存する二十餘、次第に落つるを知る。

儻常歲落一。自足支兩紀。

もし常に歲ごとに一を落さば、自ら兩紀を支ふるに足る。

如其落併空。與漸亦同指。

もし其れ落ちて併せて空しく、漸なると亦た指を同じう

人言齒之落、壽命理難恃。 人は言ふ、齒の落つる、壽命、理、恃み難し。
 我言生有涯、長短俱死爾。 我は言ふ、生、涯あり、長短俱に死するのみ。
 人言齒之豁、左右驚諦視。 人は言ふ、齒の豁たる、左右驚いて諦視すと。
 我言莊周云、木屬各有喜。 我は言ふ、莊周云ふ、木屬各喜あり。 還た美なり。
 語訛默固好、嚼廢軟還美。 語訛すれば、默する固より好し、嚼廢して、軟なるも
 因歌遂成詩、持用詫妻子。 因つて歌うて、遂に詩を成し、持し用つて妻子に詫る。

【字解】 一、齒、あらはに、縛りが無くなること。 二、懷、疑懼の念。 三、又牙、動く。 四、爾、一紀は十二年。
 【五】 莊周、史記に「莊子は、蒙の人なり、名は周、かつて、蒙の漆園吏となる、書十餘萬言を著す。大抵寓言なり」とある。 六、木屬各有喜、莊子の山木篇に見えて居るので、「莊子、大木を見る、木を伐るもの、其旁に止まつて取らざるなり。その故を問ふ。曰く、用ふべきところなし。莊子曰く、この木、不材を以て、その天年を終るを得たり」と。故人の家に會す。故人、豎子に命じ、服を殺して之を差る。その一は能く鳴き、その一は鳴く能はず。豎子請ふ、美を殺さむ。曰く、鳴く能はざるものを殺せ」とある。
 【七】 詫、莊子「孫休門に睡つて、子扁慶子に跪ぐ」とあつて、司馬彪の解に「跪は告ぐるなり」とある。しかし、舛るといふのが普通で、その方が面白いやうである。

【題義】 これは、齒が一年毎に落ちて仕舞ふにつけて、段段自分の衰へ行くことを、つくづく感じて作つたのである。韓愈は早老の人と見え、かつて、姪老成に與へて「吾、未だ四十ならずして、齒牙動搖す」といひ、貞元十八年、崔羣に與ふる書に「近ごろ、左車の第二牙、故なくして動搖、脱し去る」とある。そして、此詩に去年落一牙、今年落一齒とあるを見れば、貞元十九年の頃でもあらうか。

【詩意】 去年から、齒が落ち始めて、一つ奥齒が取れ、そして、今年は、又一つ齒が落ちた。さうかと思ふと、俄然として、六つ七つ、一時に落ち、その落つる勢は、まだ已まず、残つて居る齒も、皆ぐらぐら搖き出したので、どうせ、みんな落ちて仕舞つて、はじめて止むことであらう。溯つて考へると、去年初めて一つ牙が落ちた時、何だか面相が變り、口に締まりが無くなつて、極まりが悪いやうな心持がしたが、引續いて、今年二三落ちると、これは、身體が衰へたからで、もう死期が近づいたのであらうと、初めて憂の心を生じた。その後は、一つが將に落ちむとするに際し、懷懐たる疑懼の念を懷き、どうか落ちぬやうにしたいといふので、障つて工合の悪いのを怵へ、又牙として動いて居る其齒に觸れぬ様にし、朝、口を漱ぐ時にも、もがもがして、やつと濟ませ、務めて、大切に保護したけれども、矢張、その效なくして、遂に落ちて仕舞ひ、さながら、山が崩れかかつて、止めても止まらぬ様な有様であつた。しかし、それも、初の内だけのことで、この頃は、齒の落ちることに慣れて仕舞ひ、落ちる上は、一本でも、二本でも、同じ事で、格別身體にも關係しない様である。今残つて居る齒は、二十餘本であるが、いづれ次第に落ちるであらう、一年に一本落ちるとすれば兩紀、即

ち二十餘年間は、まだ保つべき勘定である。その兩紀を経た後の事を考へると、次第に、ぼつぼつ落ちやうが、一時に落ち盡して仕舞はうが、その結果は同一である。ある人は、齒の落ちるのは、壽命の縮まつて來た證據だといつたが、實はさうでもないらしい。わが考では、この生には限があつて、長からうが、短からうが、いづれ、死を免れず、齒が落ちたからといつて、今更の様に壽命を心配する理由はない。それから、又ある人は齒が落ちて口元に締まりの無いのは見苦しいから、左右の者は、驚いて見て居ますぞといつたが、我が考では、莊子が、木は不材を以て壽を保ち、雁は鳴かざるが故に早く殺されるといふ通り、材藝の有無、どつちが宜しいか分らないので、齒にしても、落ちた方が却つて善いことがある。何となれば、齒が落ちると、言葉が訛つて聞こえるから自然黙つて居る、世間の事は、一體黙つて居る方が善い。それから齒が無いと物を嚙むことが出來ないけれども、世の中には、軟かで味の善いものがあるから、それさへ食つて居れば善い。初めは、齒が落ちたので、ひどく心配したが、かうなると、どうでも構はないといふ氣に成つた。そこで、この事を詩に作つて、どうだ、我輩の考は、如何にも宜しいだらうといつて、妻子にも誇つて聞かせた次第である。

【餘論】この篇は、一瑣事を取つて、丁寧周匝に敘し盡し、その敘事の工合も面白いし、結末も亦た達道の言である。朱竹垞は「節節敘し來つて、態勢甚だ磊落」といつた。

哭楊兵部凝陸欽州參

楊兵部凝、陸欽州參を哭す

人皆期七十、纔半豈蹉跎。人皆七十を期す、纔に半にして豈に蹉跎せむや。

併出知己涙、自然白髮多。併せて知己の涙を出し、自然に白髮多し。

晨興爲誰慟、還坐久滂沱。晨興、誰が爲に慟せむ、還つて、坐して久しく滂沱。

論文與語語、已矣可如何。論文と語語と、已んぬるかな、如何すべき。

【字解】「蹉跎」楚辭に「履蹉跎」とあつて、廣雅に「蹉跎は足を失するなり」とある。韓愈は、大曆三年戊申に生まれたから、今茲貞元十九年癸未、年三十六、そこで、七十の中といつたのである。「三」晨興、朝早く起きる。「三」滂沱、涙の流れる貌。

【題義】唐書楊凝傳に「凝、董晉の判官となり、晉卒の亂起るや、凝、走つて京師に還り、門を闔づること三年、兵部郎中に拜せられ、病を以て卒す」とあり、蔣註に「凝、字は、懋功、兵部郎中たり。凝、兵部郎中に守たり。而して、兵曹といふは、隋、かつて兵部を改めて兵曹となし、禮部を禮曹と爲せばなり」とある。そして、柳宗元は、その墓碣を作つて「貞元十九年正月卒す」といつて居る。次に、李翱の陸欽州述に「吳郡の陸參（一に儉に作る、字は公佐、侍御史より、入つて祠部員外郎となり、二年出でて欽州に刺たり、遂に卒す」といひ、その續きに、歿年を記して、貞元十八年四月としてあ

る。そこで蔣註には「參は、凝に先つこと一年にして卒す、公、乃ち同時に之を哭す。蓋し、參、主司に佐たる時、公、かつて書を以て侯喜等を薦め、出でて、敵に刺たるに及び、亦た序あつて送る。又、かつて行難一篇あり、參の爲に設くるなり。凝は、公と嘗て董晉に汴州に佐たり。嘗、知己の者なり。去年、參死し、今年凝又死す。これ公が凝に因つて、併せて之を哭する所以なり」といつて居る。

【詩意】人生は七十を期するのに、我輩は今茲三十六歳、わづかに其半に及んだのであるから、何も蹉跎して非常に悲むにも及ばないが、友を喪つたことに至りては、悲まない譯には行かぬ。それも、一人なら未だしも、又次に一人、つまり二人連続して死んだのであるから、知己の涙を併せて注ぎ出し、その爲に、自然と白髪も多い様になつた。朝早く起き、おもひ出しては慟哭し、やがて坐つても、涙は滂沱として盡きない。この二人とは、生前、ともに文を論じ、面談して心を慰め、まことに、我が良友であつたのに、最早さうすることも出来ないと思へば、慟哭を止める譯にも行かず、已んぬるかな、今後どうしたら善からうと思ふばかりである。

苦寒

苦寒

四時各平分、一氣不可兼。

四時、各平分、一氣兼ぬべからず。

隆冬奪春序、顛項固不廉。

隆冬、春序を奪ふ、顛項、固より廉ならず。

太昊弛維綱、畏避但守謙。

太昊、維綱を弛む、畏避して但だ謙を守る。

遂令黃泉下、萌牙天勾尖。

遂に黃泉の下をして、萌牙勾尖を天せしむ。

草木不復抽、百味失苦甜。

草木復た抽かず、百味、苦甜を失へり。

凶虺攪宇宙、銛刃甚割砭。

凶虺、宇宙を攪し、銛刃、割砭よりも甚だし。

日月雖云尊、不能活烏蟾。

日月尊しと云ふと雖も、烏蟾を活かす能はず。

羲和送日出、恒怯頻窺覘。

羲和、日を送つて出で、恒怯、頻りに窺覘す。

炎帝持祝融、呵嘘不相炎。

炎帝、祝融を持し、呵嘘すれども相炎まらず。

而我當此時、恩光何由沾。

しかも、我、この時に當り、恩光、何に由つてか沾はむ。

肌膚生鱗甲、衣被如刀鎌。

肌膚、鱗甲を生じ、衣被、刀鎌の如し。

氣寒鼻莫嗅、血凍指不拈。

氣、寒くして、鼻、嗅ぐ莫し、血、凍つて、指、拈せず。

濁醪沸入喉、口角如銜箝。

濁醪、沸いて喉に入れば、口角、箝を銜むが如し。

將持七箸食、觸指如排籤。

將に七箸を持して食はむとす、指に觸れて籤を排するが

侵鐘不覺暖。熾炭屢已添。
 探湯無所益。何況織與織。
 虎豹僵穴中。蛟螭死幽潛。
 焚惑喪繼次。六龍冰脫髻。
 芒碭大包內。生類恐盡殲。
 啾啾窻間雀。不知己微纖。
 舉頭仰天鳴。所願晷刻淹。
 不如彈射死。却得親無燂。
 鸞皇苟不存。爾固不在占。
 其餘蠢動儔。俱死誰恩嫌。
 伊我稱最靈。不能女覆苦。
 悲哀激憤歎。五藏難安恬。
 中宵倚牆立。淫淚何漸漸。

鐘を侵して、暖を覺えず、炭を熾にして、屢ば己に添ふ。
 湯を探れども、益する所なし、何ぞ況んや織と織とをや。
 虎豹は穴中に僵れ、蛟螭は幽潛に死す。
 焚惑、繼次を喪ひ、六龍、氷つて髻を脱す。
 芒碭たり、大包の内、生類、恐らくは盡く殲きなむ。
 啾啾たり、窻間の雀、己の微纖なるを知らず。〔むことを。〕
 頭を擧げ、天を仰いで鳴く、願ふ所は、晷刻の淹しからず。
 如かず、彈射せられて死し、却つて、親く無燂せらるるを。〔得むには。〕
 鸞皇、苟くも存せず、爾、固より占に在らず。
 その餘、蠢動の儔、俱に死すとも、誰か恩嫌せむ。
 伊れ我最も靈なりと稱すれども、女を覆苦すること能はず。
 悲哀激して憤歎、五藏、安恬し難し。
 中宵、牆に倚つて立てば、淫淚何ぞ漸漸たる。

天王哀無辜。惠我下願瞻。
 褰旒去耳纒。調和進梅鹽。
 賢能日登御。黜彼傲與儉。
 生風吹死氣。豁達如褰簾。
 懸乳零落墮。晨光入前簷。
 雪霜頓銷釋。土脈膏且黏。
 豈徒蘭蕙榮。施及艾與兼。
 日暮行鏤鏤。風條坐擔擔。
 天乎苟其能。吾死意亦厭。

天王、無辜を哀み、我を惠して、下に願瞻せよ。
 旒を褰げて、耳纒を去り、調和、梅鹽を進めよ。
 賢能、日に登御、彼の傲と儉とを黜げよ。
 生風、死氣を吹き、豁達として、簾を褰ぐるが如し。
 懸乳、零落して墮ち、晨光、前簷に入る。
 雪霜、頓に銷釋し、土脈、膏且つ黏。
 豈に徒に蘭蕙の榮のみならむや、施いて艾と兼とに及ぶ。
 日暮行く、鏤鏤たり、風條、坐ながら擔擔たり。
 天か苟くも其れ能くせば、吾死すとも、意亦た厭きなむ。

【字解】(一) 四時各平分。感春の詩の處で解釋して置いた。(二) 一氣不可兼。禮記に「四氣の和、以て萬物の理を著はす」とあるが、これは、全體の上から見たので、春夏秋冬の一季候に就いて云へば、各一氣を以て季候を爲し、その一氣を以て他の四時を兼攝することは出来ないといふ義。(三) 顛項。前に陸渾山火詩の中に見ゆ。禮記月令に「孟冬の月、その帝は顛項」とある。(四) 不厭。不正直で、おのが季候外に在つても跋扈する。(五) 太昊。禮記月令に「孟春の月、その帝太昊」とある。(六) 黃泉。左傳隱公元年に「黃泉に及ばざれば、相見るなきなり」とあつて、杜預註に「地中の泉、故に黃泉といふ」とある。(七) 勾尖。禮記月令に「勾

書早く出で、萌者盡く遠す」とある。曲つたり尖つたりする。【八】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【九】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一〇】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一一】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一二】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一三】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一四】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一五】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一六】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一七】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一八】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【一九】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二〇】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二一】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二二】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二三】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二四】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二五】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二六】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二七】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二八】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【二九】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三〇】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三一】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三二】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三三】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三四】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三五】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三六】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三七】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三八】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【三九】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四〇】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四一】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四二】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四三】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四四】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四五】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四六】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四七】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四八】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【四九】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。【五〇】朝冠。切り刺す。杜甫の「萌者盡く遠す」とある。

【一】 鳥輪。五經通義に「日中に三足の鳥あり、月中に魂と蟾蜍とあり」といつて居る。【二】 義和。前に見ゆ、即ち日御。山海經に「東南海の外、甘泉の間、義和の國あり、女子あり、義和といふ、帝俊の妻たり、これ十日を生む、常に日を甘泉に浴す」とある。【三】 炎帝。禮記月令に「孟夏の月、その帝は、炎帝、その神は祝融」とあつて、すでに陸渾山火詩の中に見ゆ。【四】 刀。列子に「鐵を揮し、紫を帯ぶ」とあつて、説文に「鐵は使なり」とある、鐵は鎌。【五】 其。説文に「其は鼻を以て氣に就くなり」とあつて、即ち鼻ぐこと。【六】 不。廣韻に「拈は指にて物を取るなり」とある。【七】 如。衛。猿くつわを嵌められた様である。【八】 七。指。指は先端。【九】 排。竹。竹を並べる。【一〇】 儀。儀は儀。【一一】 儀。儀は儀。【一二】 儀。儀は儀。【一三】 儀。儀は儀。【一四】 儀。儀は儀。【一五】 儀。儀は儀。【一六】 儀。儀は儀。【一七】 儀。儀は儀。【一八】 儀。儀は儀。【一九】 儀。儀は儀。【二〇】 儀。儀は儀。【二一】 儀。儀は儀。【二二】 儀。儀は儀。【二三】 儀。儀は儀。【二四】 儀。儀は儀。【二五】 儀。儀は儀。【二六】 儀。儀は儀。【二七】 儀。儀は儀。【二八】 儀。儀は儀。【二九】 儀。儀は儀。【三〇】 儀。儀は儀。【三一】 儀。儀は儀。【三二】 儀。儀は儀。【三三】 儀。儀は儀。【三四】 儀。儀は儀。【三五】 儀。儀は儀。【三六】 儀。儀は儀。【三七】 儀。儀は儀。【三八】 儀。儀は儀。【三九】 儀。儀は儀。【四〇】 儀。儀は儀。【四一】 儀。儀は儀。【四二】 儀。儀は儀。【四三】 儀。儀は儀。【四四】 儀。儀は儀。【四五】 儀。儀は儀。【四六】 儀。儀は儀。【四七】 儀。儀は儀。【四八】 儀。儀は儀。【四九】 儀。儀は儀。【五〇】 儀。儀は儀。

の定まりで、各一氣を以て季候をなし、その一氣を以て四時を盡く兼ねしめることは出来ない。今しも、冬の隆寒の氣が春の節序を奪ひ、非常に寒冷なのは、冬の神たる顛頊が甚だ不正直で、春になつても、跋扈するからであらう。これと同時に、春の神たる太昊は、甚だ氣が利かず、いつとはなしに、締め括りの太い綱を弛め、他の暴威を畏れて、之を避けむとし、唯だ謙を守つて居るのは、もとより宜しくない。そこで、地の下から萌え出づべき筈の草の芽も、曲つたり、尖つたりして、天死して仕舞ふ。草木が伸びればこそ、百味が出来るのであるが、かうなつては、百味も無くなつて、甘も苦も無い様になる。そののみか、旋風を起して、宇宙を攪亂し、その切ッ先の銳きは、刃で切られたり、針で突かれたりするよりも甚しい。日月は尊い物であるが、日中の鳥、月中の蟾蜍が、この寒さの爲に死んで仕舞つたらば、何の效用をも爲さぬ。羲和は、日御となつて、毎日毎日、東方から太陽を送り出すが、恐る恐る、機子を伺つてする様では、一向役に立たぬ。それから、夏の神たる炎帝は、その手下に祝融などいふものを召し連れて居ながら、その出やうとするのを却つて抑へて、叱り懲らして居る位だから、世界は、到底、暖まる譯には行かぬ。われは、此時に當つて、日月の恩光に霑ふことが出来ない爲に、肌膚はひび破れて鱗甲を生じ、著物は皆凍つて刀や鎌を身に著けた様な心持がする。かくて、あまり寒い爲に、鼻は作用を失つて、物の匂ひも分からぬやうになり、血が凍つた爲に、指は屈んで、物を取る事が出来ない。そこで、濁酒でも沸かして飲んで、元氣を付けやうと思ふ

が、喉へ行つた其物は熱いけれども、口端に残つて居る雫は、凍つて仕舞つて、丁度猿ぐつわでも嵌めたやうであるし、匙や箸で物を取らうとしても、野菜なり、魚なり、皆その先端に凍り付いて、さながら、竹筥を竝べた様で、とんと食ふことが出来ない。鐘の中に幾ら炭を添へて、火を焚いても、一向暖を覺えないし、湯に入つても、身體は少しもぬくまらぬ。まして、絹物木綿物など、どんなに重ねて著ても、寒氣を防ぐことは出来ない。人は勿論のこと、虎豹でさへも、穴の中に僅れて仕舞ひ、蚊虻の類も、幽潛の中に凍死し、はては、天文までも亂れ、南方の火星たる熒惑は、その軌道を外れて、一向火の效用を爲さず、六龍も凍つて、自然に鬚が脱け落ちるといふ始末、芒碭たる乾坤の内に於て、生きとし生けるものは、到底、命を保つことが出来ないかとも思はれた。啾啾として窓間に鳴いて居る雀は、おのが繊微の物たるを知らず、矢張、命は惜しいものと見え、頭を擧げ、天を仰いで、ひたすら鳴き囀り、せめては、一刻でも生き延びたいと願つては居るが、かう成つては、いつそ、人に彈射せられ、そして、料理されて、毛蒸しにするなり、茹でるなりして、暖められた方が善いかも知れない。かの鸞鳳の如き瑞鳥ですら、寒の爲には、皆死んで、苟くも存せぬといふことに成つて居るから、卜筮の中に載つて居らぬ雀などいふ詰まらぬものは、無論、死ぬことに決まつて居る。雀のみか、その餘、蠢動して居る蟲けらの類は、共に死んでも、誰も氣にさへ懸けぬが、しかし、考へて見ると、人は萬物の靈と稱するものであるから、汝等をいたはつて遣ふことの出来ないのは、つま